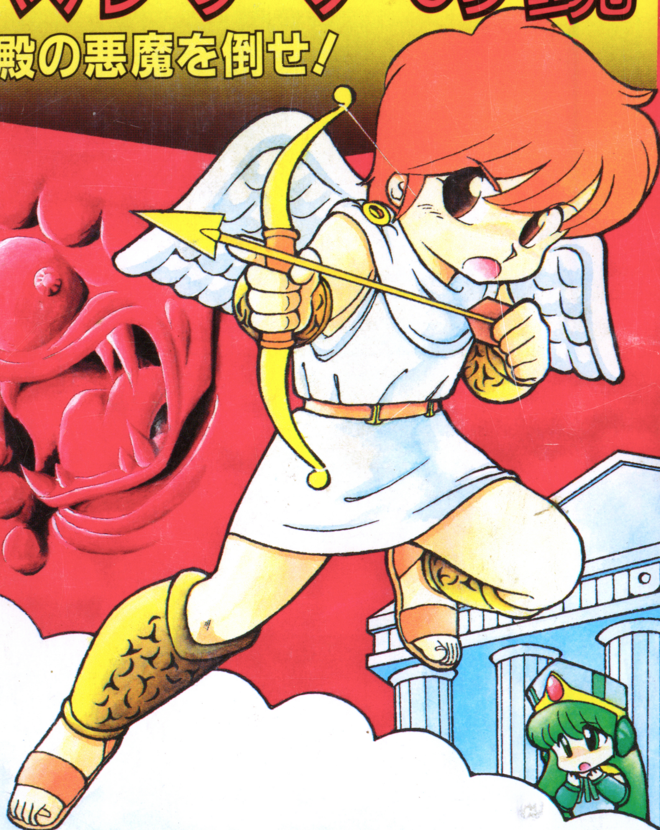
ファミコン冒険ゲームブック

光神話
パルテナの鏡

神殿の悪魔を倒せ!



双葉文庫　ゲームブックシリーズ

ストーリー

　ボクの名は、鏡光夫。勉強はダメ、運動はダメのまるっきりさえない中学２年生。ある日ふと手にした１冊の本。その中に書かれていたことが、ボクの運命を大きく変えることになってしまったんだ!!
「汝は選ばれた勇者である。フィクション世界の女神、パルテナの危機を救えるのは汝のみ。時計が午前０時を示すとき、汝の部屋の鏡がこの国への入口となる」
　半信半疑で鏡の前に立ったボク。とたんにボクの体は鏡の中に吸い込まれたのだ!!　はたして、そこでボクを待ち受けているものは……!?

カバーイラスト●不敵万才
カバーデザイン●長野幸三

光神話
パルテナの鏡

神殿の悪魔を倒せ!



FUTABASHA FAMICOM GAME BOOK

ファミコン冒険ゲームブック

光神話パルテナの鏡

——神殿の悪魔を倒せ！——

双葉文庫

A Myth of Light, Parutena's Mirror ; Overthrow Devil in Shrine
by Studio Hard Co.,Ltd. and Emiko Muranaka, Kaori Maeda

Illustration by Mansai Futeki

First Published by Futabasha Books Co.
3–28 Higashi-Gokencho, Shinjuku, Tokyo, Japan

光神話パルテナの鏡

――神殿の悪魔を倒せ！――

もくじ

プロローグ

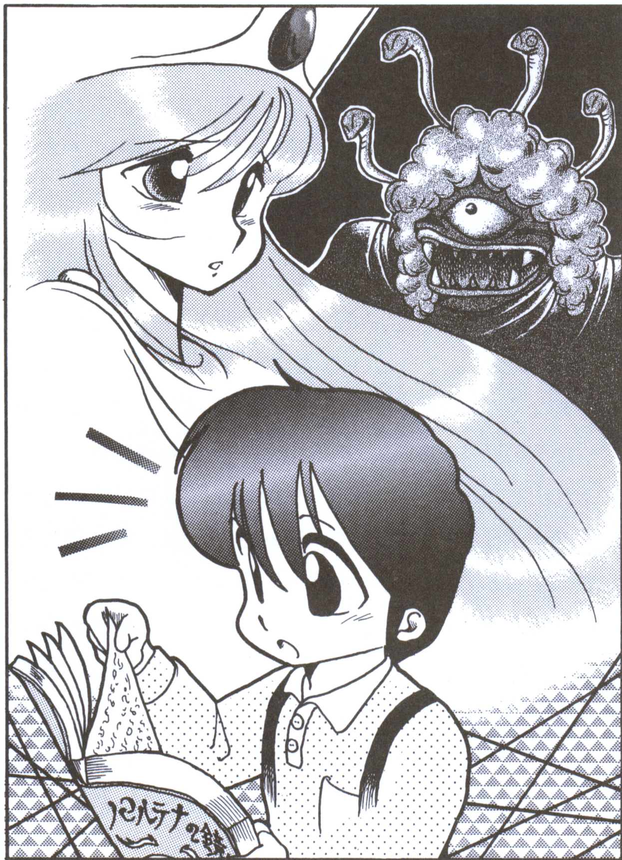
その運命の日、ボクは汗ばんだ手で、一通の手紙を握りしめていた……。

なんて、ちょっとカッコイイ出だしだけど、とんでもない。ボクは今、真剣に悩んでいるんだ。

ボクの名前は鏡光夫。中学2年生になったばかり。勉強はダメ、運動オンチのまるっきりさえないヤツ。こんなボクのたったひとつの心の支えは、美子ちゃんという、とびきり美人の文通相手。ボクは、彼女が遠くに住んでいるのをいいことに、成績はトップだとか、クラスの人気者だとか……、手紙にはウソ八百を書き並べていたんだ。

ああ、なんてことだ！　よりによって、その美子ちゃんがボクの通っている学校に転校してくるなんて!!　ボクは「会える日が待ち遠しいわ」と書いてきた美子ちゃんの手紙を握りしめ、この偶然を呪っていた。

まったく絶望的だよ。この前の手紙で、今学期は2年生でありながら、生徒会長に選ばれることまちがいなしさ、なんて書いたばかりだぜ。もう、死にたい気分だよ。


パルテナの鏡

それから１週間――。

いよいよ明日。明日になれば美子ちゃんはボクの学校に来て、そして、ボクのついたウソにあきれ返るに違いない。おまけに、明日は、生徒会立候補者を決めるホームルームのある日。

すっかり落ちこんだボクは、少しでも気を紛らそうと、オヤジが経営する古本屋に向かった。『君も人気者になれる』なんて本を立ち読みしたりして……。だけど何にも収穫なし。

何気なく１冊の本を手に取り、パラパラとページをめくったその時！　突然、本の中から無数の鏡のカケラがあふれ出したのだ。あわててオヤジを呼びにいく。しかし、ボクがオヤジを連れてもどった時には、鏡の破片なんて、すっかり消え去っていた。いったいどういうことなんだ!?　ボクは、床に落ちたその本を拾いあげた。『パルテナの鏡』のタイトルが気にかかり、こっそりとその本を自分の部屋に持って帰ったのだ。

それにしても、あれは幻覚だったのだろうか……。机の上にその本を置き、しばらくためらった後、思いきって１ページめを開く。何だって!?

「この本を開いた者は、選ばれた勇者である。今、フィクション界は重大な危機にさらされている。フィクション界を治めていた女神パルテナが、悪魔メデューサに囚われてしまったのだ。女神を救えるのは、今、この本を開いている者、すなわち汝のみである。時計が午前0時を打つとき、汝の部屋の鏡がこの国への入口となるであろう。来たれ、フィクション界へ。その時から汝の物語が始まるのである」

そのページの後ろをめくったが、あとはずっと白紙が続くだけ。何だ、この本は!? 冗談か……。

ちょっと試してみるのもおもしろいかな。ボクは、ホンの軽い気持で壁にかかっている鏡を机の上に立てかけ、時間が過ぎるのを待った。

ボーン、ボーン。

アンティックな置き時計が0時を知らせる。その時、ボクは、スーッと頭から鏡の海へ飛び込んでゆくような感じを覚えたのだった。→1へ

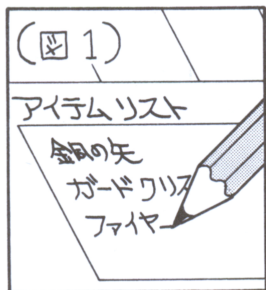
この本の遊び方

本の中の世界に入り込んでしまった鏡光夫。彼は、勇者ピットとして冒険をしていくことになるのです。いったい彼の行く手には、どんな運命が待ちうけているのでしょうか。いよいよ、お楽しみは、これからです。

さて、その前に、ゲームの遊び方の説明をしておきましょう。ルールは簡単ですが、冒険をなるべく有利に展開させるためにも、以下の説明をしっかりと頭に入れておいてください。

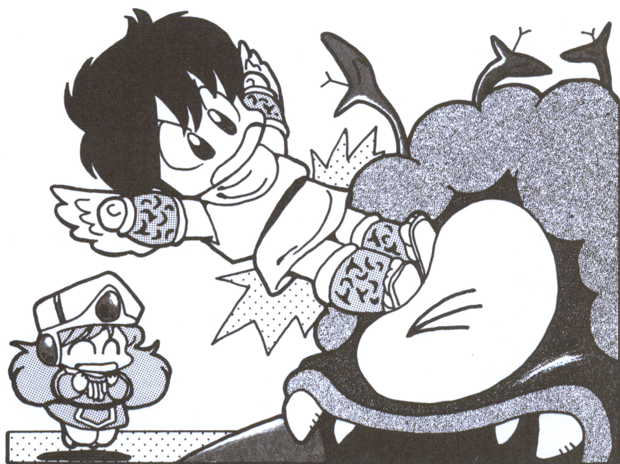
1．行動記録紙の使い方

ゲームを進行していくうちに、ピットの能力や、冒険の条件は次々と変化してゆきます。それは、そのつど15ページにある行動記録紙に記入してゆくことになります。では、順を追って、この行動記録紙の使い方を説明しましょう。



●アイテムリスト

冒険の途中でピットは、さ



まざまなアイテムを手に入れてゆきます。ゲームの進展によっては、アイテムを持っていないと、不利なルートに行かされてしまうことがあります。自分の持っているアイテムを忘れないように、このアイテムリストの欄にしっかり記入してゆきましょう。(図①参照)

また、同じアイテムを2度取りすることはできません。同じルートを2度3度通った場合は、無視して進んでください。ただし、途中でそのアイテムを失った場合に限り、もう一度取ることができます。

●ポイントチェック

冒険中変化してゆく、ピットの能力は、3つのポイントで表わされます。それは、**体力ポイント**、**武力ポイント**、**知力ポイント**です。

体力ポイントは、文字通りピットの体力を表わします。このポイントは、生命の酒を見つけて飲むと増え、逆に、体力を消耗するような行動をとると減ります。

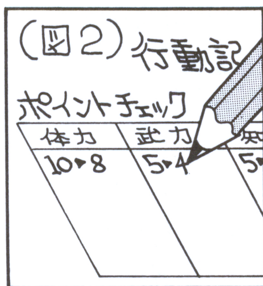
また、このポイントがゼロになったら、それはピットの死を意味しゲームオーバーとなります。しかし、他のふたつのポイントは、マイナスになってもゲームを続けることができますので、注意して下さい。

武力ポイントは、ピットの戦闘能力を表わします。このポイントは、敵との戦闘に勝ったりすると増え、戦いの方法がまずかったりすると減ります。武力ポイントをアップさせてゆくコツは、なるべくたくさんのアイテムを手に入れてゆくことでしょう。

最後の知力ポイントは、ピットの知能や精神状態を表わします。これは、冒険に役立つ情報を得たり、カンを鋭く働かせた行動をとったりすると増えます。反対に、何かに失敗して、ピットの気持が落ち込んだりすると、

減ってゆきます。

このポイントが高いか低いかが、ゲームの進展に大きく影響する場合があります。なるべくポイントを増やすように努力しましょう。



以上の3つのポイントはそれぞれ、体力ポイント10、武力ポイント5、知力ポイント5で始まります。冒険が進行するにつれて、このポイントの変化は、ポイントチェックの欄に、そのつど書き変えていってください。(図②参照)

●ステップメモ

何かの拍子で本が閉じてしまったり、途中でゲームを一時中断したりして、自分がたどってきたルートがわからなくなってしまうことがあります。そんな時に役に立つのが、このステップメモです。

1から順に、自分が通った項目番号をメモしてゆきましょう。こうすれば、途中でENDになってしまっても、2〜3項目さかのぼったところから再スタートすることができます。

以上が行動記録紙の利用方法です。ゲームは常に、この記録紙とともに進行しますから、記入もれのないように注意して下さい。何回もチャレンジできるように、記録紙をコピーして使うとよいでしょう。

2．バトルの方法

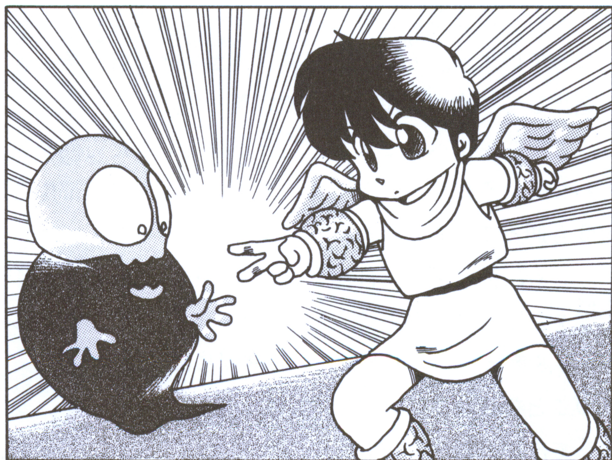
敵との勝敗の決定のしかたは、大きく分けて3つあります。それは、アイテムの有無で決定される場合、ポイントの大小で決定される場合、そしてもうひとつがバトルという方法による場合です。

このバトルについてくわしく説明してゆきましょう。

本をパラパラめくると、左ページの上に、グー、チョキ、パーのジャンケンマークがあるのに気がつきますね。ひと言で言えば、バトルの勝敗は、このマークを使って、敵とのジャンケンで決定されるのです。

順を追って述べます。「バトルだ！」と書かれている項目にきたら、まず、ピットのジャンケンマークを決めます。方法は簡単。マークを見ないようにして、適当なページをパッと開きます。そこに書かれているのが、ピットのマークです。

同じようにして、敵のマークも決めます。



両者のマークがでたら、あとはこのふたつを合わせ、実際のジャンケンと同じように勝敗を決めればいいのです。たとえば、ピットのマークが「パー」で、敵のマークが「グー」なら、ピットの勝ちとなるわけです。

ピットが勝つか敵が勝つかの確率は、半々。運だめしのつもりでチャレンジしましょう。

3．迷路について

このゲームは、いくつかの冒険世界に分かれています。そのうち、最後の戦場となるのが、メデューサのいる城

塞です。この城塞は、たくさんの部屋で構成された迷路となっています。入口から順に、東西南北、各方角の扉を選択して、次の部屋に進んでいきます。

ここで注意すべきことは、自分が進んできた方向を見失わないようにすることです。でなければ、同じ部屋を何度も通ってしまうはめになります。

もしも、前に通った部屋にまた来てしまったら、よく記憶をたどって、前と違う扉を選んでゆきましょう。しかし、メデューサの城塞では、何度同じ部屋を通っても、そのことで冒険が不利に展開することはありません。安心して部屋の扉を選択していって下さい。

さあ、いよいよ冒険の始まりです。キミだけのすばらしい英雄物語を作りあげてください。健闘を祈ります。

行動記録紙

ポイントチェック

体　力	武　力	知　力
10 ▶	5 ▶	5 ▶

アイテムリスト

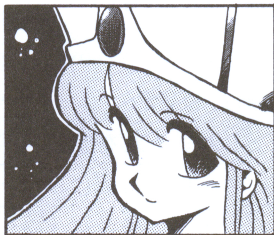
行動記録紙

ステップメモ

1 ▶ 32

光神話パルテナの鏡

——神殿の悪魔を倒せ！——

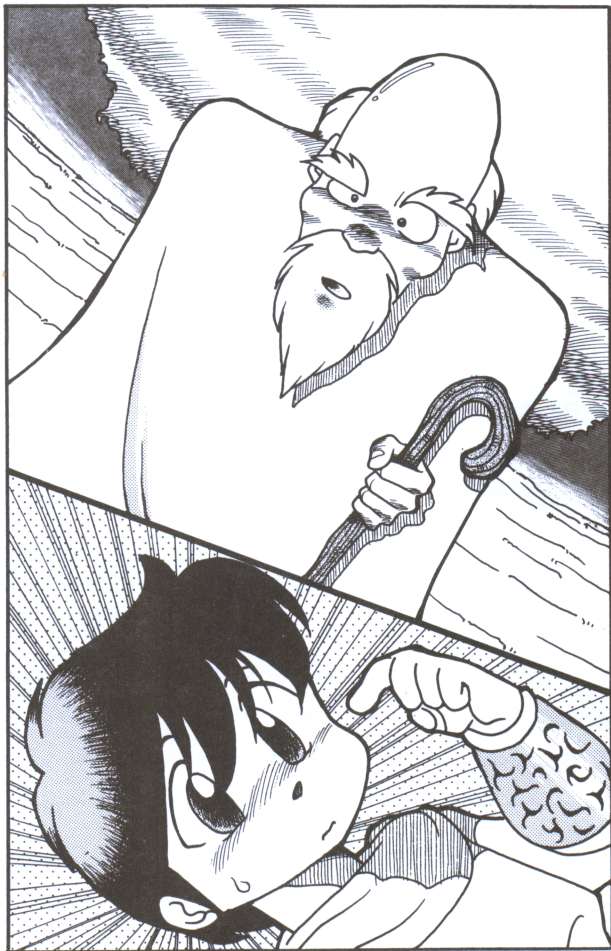




1

　気がつくと、見知らぬ森の中……。これは夢か!?
　その時、突然、目の前にひとりの老人が出現した。白いヒゲに白い衣装、物語に登場する神様みたいだ。
「あ、あなたは……!?」
「わしは、簡単に言えば、おまえが入り込んだ『パルテナの鏡』という本の作者じゃ」
「すると、あなたがボクを呼んだんですか」
「さよう。わしは今、このフィクション世界でのおまえ、すなわち、勇者ピットの物語を書いておる。作者と言っても、正確に言えば、記録係じゃ。物語を作ってゆくのはおまえ自身、わしはそれを書きとめてゆくだけじゃ」
「物語を作るたって……」
「ここは、フィクション世界じゃ。おまえのしたことすべてが物語になるんじゃ。いいか、よく聞け。この世界でのおまえの使命は、悪魔メデューサを倒し、女神パルテナを助けることじゃ。それを成しとげれば、立派な英雄物語ができあがるというわけじゃ」
「そ、そんな——。ボク、おうちに帰りたいよ——」
「ええい、だだをこねるでない。みっともなくて書けないではないか。おっ、そうじゃ、いいものをあげよう。この弓矢と革袋じゃ。この弓矢は、無限に矢が使える不思議な弓矢じゃ。革袋は、無限に物を入れることができ

1 ボ、ボクがヒーロー!? それ、ミスキャスティングじゃない?





1

る魔法の袋じゃ」

フン、物でつるなんて子どもをあやすんじゃあるまいし。

「わしの用件はそれだけじゃ。せいぜいいい本が出来あがるように、がんばるんじゃな。では、さらばじゃ」

そ、そんな、無責任な――。

しかし、老人は一瞬にして消えてしまった。→ 100 へ

2

バトルだ！

ルールにしたがって、敵との勝敗を決定せよ。

●勝った　→ 351 へ　　**●負けた　→ 38 へ**

3

次の部屋に入ると、東西南北の順で壁が4色に塗られていた。赤、白、青、黒。なんだか、目がチカチカして、気が狂いそうだ。しかし、敵の気配はしない。よし、先へ進もう。

さて、4色に塗られた扉のどれを選ぼうか？

●赤の扉へ　→ 331 へ　　**●白の扉へ　→ 95 へ**

●青の扉へ　→ 31 へ　　**●黒の扉へ　→ 177 へ**

4

足元でひしめき合ったオクトスたちが、次々と飛びかかってくる。体に吸いついてくるヤツを払いのけ、同時に下にいるヤツを踏みつける。この、この、この〜〜！

4

悪戦苦闘が続いたが、オクトスの数は半分以下に減った。今のうちに逃げよう。さて、どの扉へ？

●北の扉へ　→ 65 へ　**●南の扉へ　→ 96 へ**

●西の扉へ　→ 177 へ　**●東の扉へ　→ 318 へ**

5

恐怖にかられたボクは城の中をウロウロと歩き回った。すると、いつのまにか、地下室へ来ていた。

「おやっ、あんな所に牢が見える」

中には白雪姫がいた。

「あなたが見た白雪姫はまま母なんです。魔法の力でわたしになりすましているんです」

やはりそうか！　メデューサのしわざなんだな。ニセの白雪姫を何で倒そう。とりあえず、矢を使ってみるか。

●Ｙｅｓ　→ 242 へ　**●Ｎｏ　→ 137 へ**

6

いいぞ、いいぞ、本当に勇者みたいになってきた。

さて、勇者としては、ここで休んでいくべきか？

●休んでいく　→ 73 へ　**●先へ進む　→ 143 へ**

7

まちがって、天の下敷きにでもなったら大変だ。よし。ボクはアトラスの真横に立って、天のかつぎ方のコツを教えてもらうふりをした。得意になって説明する巨人。



7

「ふーん、なるほど。どうやら、ボクみたいな未熟者には、とてもできない仕事みたいだ。やっぱり天をかつぐには、君のようなすばらしい能力がないとね」

「そりゃあ、そうさ」

おだてられてアトラスは、その気になっている。

「だから、ボクはやっぱり、銅の矢をとってくる役に……」

「えーい！　このノータリンの役立たずめ！」

突然、後ろからのっぺりとした紫色の顔の魔物が出現した！　**→119へ**

8

戦闘だ！　ファイアは、あるか？

●ある　→385へ　　**●ない　→78へ**

9

バトルだ！

ルールにしたがって、敵との勝敗を決定せよ。

●勝った　→80へ　　**●負けた　→226へ**

10

薄暗闇の道が続く。見えるのは、霧ばかり。

なにも起こらなければいいが……。

と思っていた矢先、ドスン、ドスンと足音が近づいてきた。**→356へ**

11

再び闇の世界をさまよう。静寂がかえって不安をかきたてる。

と、その時、犬がうなるような声が……。→ 323 へ

12

ムチを浴びせようと敵に近づく。

ツインベロスは、ふたつの口から炎を吹きつけてくる。

うかつに手が出せないぞ。様子を見ながら、後ずさる。

ガォ――！

しびれを切らして、ヤツが飛びかかってきた。

ボクは、すんでのところで飛び上がり、ヤツの後ろにまわり込む。ヤツが向き直る前に、素早くムチの連打！

やがて敵は、完全にのびてしまった。ふたつの口から赤黒い血が流れ出している。そして、その炎のような体の色は、しだいに薄茶色へとあせていった。**（武力ポイント・プラス１）**　→ 346 へ

13

さて、これから、どこへ進もうか？

見渡すと、右手には、森が広がっている。左手には、なだらかな山がある。

●森のほうへ行く　→ 303 へ

●山のほうへ行く　→ 231 へ



14

「こっちゃこい、うほ、うほ。こっちゃこい、うほ、うほ……」ヤツの奇妙な呪文で次々とアテイテムが空に昇ってゆく。

ついに、全部のアイテムがヤツの手に渡ってしまった。

「大収穫だ！」飛び去ってゆくプルトンフライ。

クソーッ、こんなのって、あんまりだ！**（弓以外のアイテムを全部リストから消す。知力ポイント・マイナス2。アイテムがない場合は、知力ポイント・マイナス4）**

ショックが大きすぎた。空白の心理状態でフラフラ歩き出す。どのくらい歩いたか、記憶がない。いつしか、ボクは洞窟の中に入り込んでいた。**→121へ**

15

どぅわあああ――!!

水柱とともに、水中から竜のような怪物が飛び出した。

ヤツはムチのように体をしならせながら、鋭いキバをむき出しにして、頭を近づけてくる。

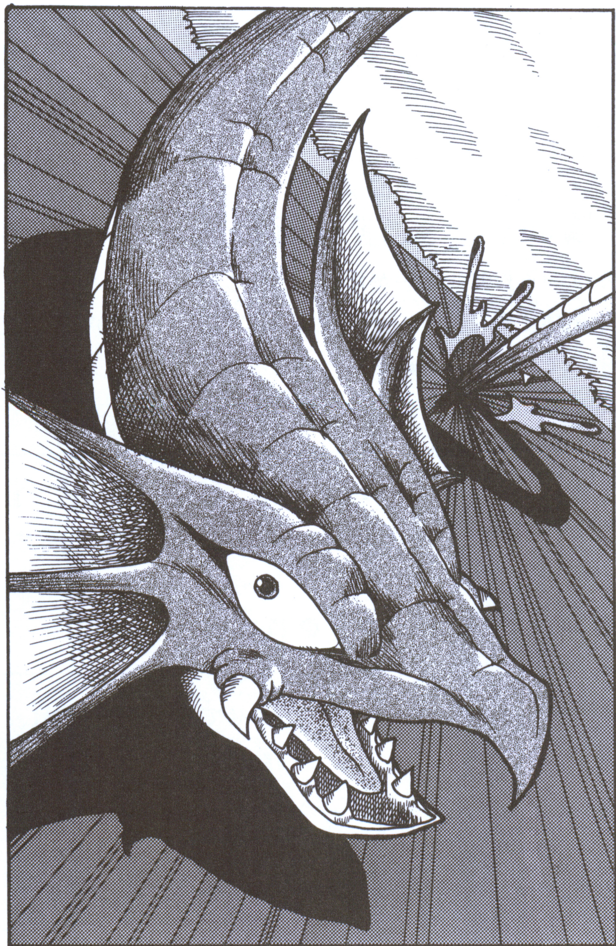
「ひと思いに食ってやる！」

「ま、ま、待ってくれ！　その前に、せめて名前を教えてくれ」つまらない時間かせぎだが、やむを得ない。

「オレさまか？　オレさまは、ヒュードラーだ〜〜」

「えっ、あの頭が9つある伝説のヘビ？」

「違う、それはヒドラだ。オレさまは、ヒュードラー！」



15

どぅわああ〜〜〜!! 突然、水中から竜のような怪物が飛び出した。



15

「じゃあ、『やめて、やめて、あんまりよ』っていう……」
「それは、ヒドイだろ！」
「わかった、これだ！　ドラム管に、ヒューと風が吹き込んで、ヒュードラ……」
「このヤロー！　おちょくってんのか!!」
　調子に乗りすぎた。怒りが頂点に達っしたヤツは全身をまっ赤にして襲いかかってきた！
　絶体絶命！　武力ポイント＋知力ポイントが17以上あって、しかも大鎌を持っているか？

●Ｙｅｓ　→197へ　　●Ｎｏ　→398へ

16

　ぼやぼやしてると、パンドーラに襲われてしまう。おっと、ワープして姿を消した。くそっ、どこにいるんだ。
　体力ポイント＋知力ポイント＋武力ポイントは？

●30以上　→260へ　　●29以下　→399へ

17

　ヒタヒタと不気味な足音を響かせて入ってきたのは、メデューサだった。
　ハデスの帽子をかぶっているから、ボクの姿が目に入ってないようだ。メデューサはボクに背を向けて立っている。
「よし、このチャンスを逃がすものか」

17

ボクは体中の力を振りしぼって、メデューサの首を目がけて大鎌を振り下ろした。武力ポイントは？

● 9 以上 → 124 へ　　● 8 以下 → 199 へ

18

クモの巣だらけだ。わっ、気持ち悪い。

おや？　表面がガタガタにひび割れた鏡がある。ゴォー、ゴォー。割れ目から、ものすごい強い力が出ている。部屋にあるものすべてが吸い込まれていく。ボクの体も引っぱられ始めた。

「うっ、耐えられない！」

背中が鏡の中へ入り込んだ。ボクは足をバタつかせたが、とてもたちうちできなかった。

うわぁー、とうとうボクは吸い込まれてしまった。

→ 117 へ

19

赤ずきんは森の中へ姿を消していった。ボクはその後ろ姿を気にしながら、西の方へどんどん歩いていった。

小鳥のさえずり、小川のせせらぎの音。今までの冒険がウソのようだ。とても平和なひととき。このまま、ずっとこうしていたい……。

しかし、早く、パルテナを助けなければ。前進しよう。

→ 288 へ



20

銀の矢は持っている。しかし、果たして、ヤツを倒すことができるだろうか？　なんだか、ボクは不安になってきた。

知力ポイント＋武力ポイント＋体力ポイントは？

●32 以上　➜ 131 へ　　●31 以下　➜ 377 へ

21

旅を続けよう。村を出てしばらく歩くと、上り坂と下り坂に道が分かれていた。どちらへ行くか？

●上り坂へ　➜ 174 へ　　●下り坂へ　➜ 392 へ

22

一匹の狼がボクに気づき、大木に向かって突進してくる。

バトルだ！　ルールに従って、敵との勝敗を決定せよ。

●勝った　➜ 239 へ　　●負けた　➜ 307 へ

23

こんなヘンテコリンな町になんか、いつまでもいられない。

ボクは大通りを横道にそれて、一目散に町のはずれまでやってきた。

道がふたつに分かれている。ひとつは平坦な道、もうひとつはデコボコ道だ。

●平坦な道　➜ 392 へ　　●デコボコ道　➜ 64 へ

24

童話世界に入ってすぐ、キミは親切な老夫婦の家で泊めてもらったことがあるか？

●Ｙｅｓ　→136へ　　●Ｎｏ　→291へ

25

部屋にいた姫がホンモノだったのだ。

バトルだ!! ルールに従って、敵との勝敗を決定せよ。

●**勝った**　→93へ　　●**負けた**　→150へ

26

闇の中をどこまでも落ちてゆく。

すると、老人の声が……。

「これまでの記憶は消してしまうぞ。おまえはまた、童話世界の始めから冒険をやり直すんじゃ」

（童話世界で得たアイテムをすべてリストから消し、体力ポイント・マイナス１、武力ポイント・マイナス１、知力ポイント・マイナス１）　→328へ







27

コビルの体は、氷のように冷たくなった。そして、息絶えた。

ボクの心は、大きく揺れ動いていた。

こんなつらい気持ちで、メデューサと戦わなければならないのだろうか。

だが、コビルをこんな目に合わせたのは、メデューサだ。ボクは、メデューサへの憎しみをいっそう強くした。

その時、突然、目の前に鏡が……。

ボクは、迷わず、その中へ飛び込む。**➡ 374 へ**

28

扉をあけたとたん、何かがボクの足をつかんだ。

「ギャー、お前は何者」

10匹、20匹とタコのような化け物が足をくねらせてうごめいている。

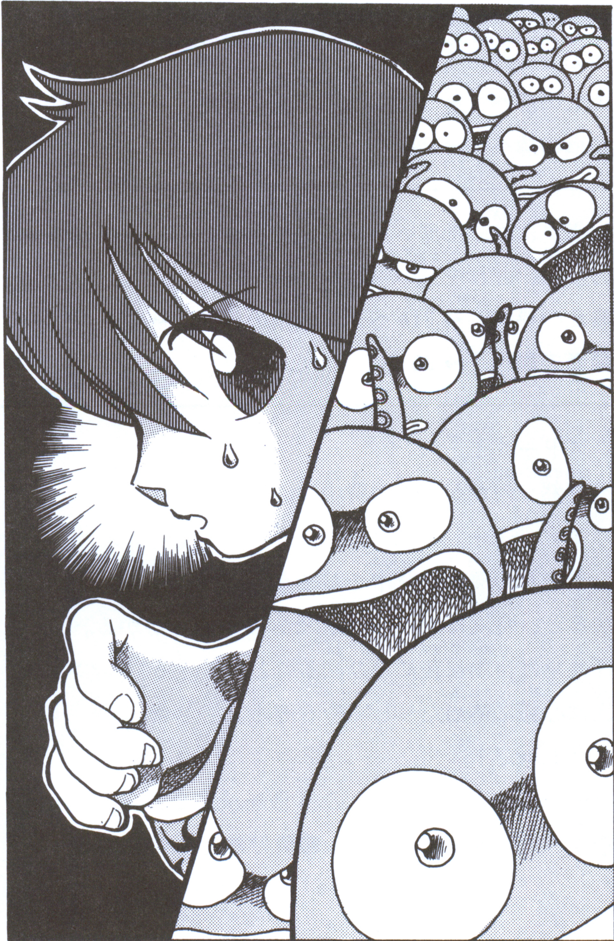
「フ、フフ、オレたちはオクトスだ。お前の体から生気を吸いとってやるぞ!!」

バトルだ!! ルールに従って、敵との勝敗を決定せよ。

●勝った　➡ 4 へ　　　**●負けた　➡ 150 へ**

29

次から次へと敵と戦って、体力に自信のあるボクも疲れてしまった。さてと、この部屋はどうかな？　敵がどこかに隠れているのだろうか？　ひと回りしてみたが、



28

ギャ〜〜！　何十匹ものタコのお化けが迫ってきた!!



29

何もないようだ。次の部屋へ進むとしよう。扉は北、東、西の３つがある。どれを開けるべきか？

●**北の扉へ　→ 310 へ**　　●**東の扉へ　→ 245 へ**

●**西の扉へ　→ 294 へ**

30

ボクは次の部屋へ急ぐ。さて、北、南、西の３つの扉のうち、どれを選ぶべきか？

●**北の扉へ　→ 318 へ**　　●**南の扉へ　→ 268 へ**

●**西の扉へ　→ 96 へ**

31

ズドーン！

突然、何かがボクの背中にぶつかってきた。

「イテェ――」

あまりの痛さに背中をおさえて、その場に倒れ込んだ。すると、今度は天井から、そいつが襲いかかる。

「オレは自由自在に飛び回ることができる、タマンボだ。次は心臓に体当たりしてやるぞ！」

バトルだ！

ルールに従って、敵との勝敗を決定せよ。

●**勝った　→ 339 へ**　　●**負けた　→ 150 へ**

32

ヤツの目を直視しては、いけない！

ボクはとっさに、鏡の盾で、ヤツの視線をさえぎる。鏡の盾には、ヤツの醜悪な姿が映っていた。いいぞ、この鏡でヤツの動きが手にとるようにわかるぞ。鏡から目を離しさえしなければ、案外、ラクにやっつけられるかもしれない。

よおし、一気に攻撃だ！

体力ポイント＋武力ポイント＋知力ポイントは？

●40以上　→246へ　　**●39以下　→179へ**

33

コリンズを倒してしまえば、フィルなんて、ボクの敵じゃない。

「よし！　この矢を受けてみろ！」

コリンズの心臓をめがけて、矢を引いた。

胸を押さえながら、コリンズは地面に倒れた。と同時にフィルはどこへともなく、消えてしまった。**（武力ポイント・プラス1）**

コリンズが息絶えるのを確かめて、ボクはまた扉を選ぶ。どの扉も血のニオイがしてくるようだ……。

●北の扉へ　→214へ　　**●東の扉へ　→177へ**

●南の扉へ　→95へ



34

扉の前に立つと、まだ触れてもいないのに、自然と開いた。不吉な予感……。

しかし、どこを見ても、敵が隠れている様子はない。どうやら、安全だな。次の部屋へ進む。

東西南北、どれを選択すべきか？

●東の扉へ　→ 177 へ　　**●西の扉へ　→ 321 へ**

●南の扉へ　→ 310 へ　　**●北の扉へ　→ 293 へ**

35

うーん、神々の王が、ナンパしてもいいものだろうか。

いったい、どういう世界なんだ？　ここは。

あっ、だれかこっちへ走ってくるぞ。**→ 349 へ**

36

森はシーンと静まりかえっている。

カサ、カサ、カサ……。

草を踏むボクの足音だけが、空気を振動させる。

おや？　ふと、別の音が耳に入ってきた。

サラサラサラ……。

川だ！　近くに川がある。

ボクは、音のする方向へ、駆けだした。

森がとぎれ、幅 10 メートルぐらいの川が横たわっている。川の向こうは、また森だ。

川を越えて、また森へ入るか、それとも、川に沿って

歩いてゆくか？ 36

●川を越え、また森へ　→ 144 へ

●川に沿ってゆく　→ 250 へ

体力ポイント＋武力ポイントは？ 37

● 15 以上　→ 351 へ　　● 14 以下　→ 2 へ

ヤツは、地上に降り、地面の上をピョンピョン飛びはねる。だめだ、狙いが定まらない。 38

逃げよう。ボクは、一目散にかけ出した。だが、しつこく追ってくる。

ひぇ〰〰、どこまで、逃げればいいんだよ——！

あれ!? 不意にヤツが消えた。用心深く引き返してみる。なんと、ヤツは、小さな落とし穴の中にはまっていたのだ。カエルの化け物は、その中で見動きとれず、ジタバタしている。

ボクは、大きな石をさがしてきて、穴にフタをした。

これで、よしと。**（体力ポイント、マイナス 1）**

また歩き始める。しばらくすると平原に出た。**→ 252 へ**

魔物かもしれない。避けたほうが無難だ。 39

ボクは、方向を変えて、再び歩き出した。**→ 276 へ**



40

要するに、相手をボールだと思えばいいんだ。

よーし、タイミングを見はからって、ジャンプ!!

「アタ〜〜〜ック！」

ヤツを地面にたたきつける……つもりだった。が、ヤツのトゲが、手にグサッ。

イテ——ッ!!　手を押さえて走りまわるボク。

くそ〜〜〜。これでは弓が引けない。ヤツの攻撃を避けるのがせいいっぱいだ！

作戦変更だ！　ボクは、腰につけた皮袋をつかむと、中のアイテムを出した。そして、からっぽの皮袋を開き、接近する敵に向かって突き出す。

スポッ！　うまい具合にヤツは、袋の中に収まった。いそいで口をヒモで縛り、袋に全体重をかけて、踏みつける。

プシュ〜〜〜。

やった、風船ミノスが割れた！　袋からヤツの皮をとり出すと、地面へポイッと捨てる。

さて、分かれ道だ。東の道を行くか、南の道を行くか？

●東の道へ　→149へ　　●南の道へ　→278へ

41

知力ポイント＋武力ポイントは？

●16以上　→151へ　　●15以下　→228へ

42

体力ポイント＋武力ポイントは？

●16以上　→385へ　　●15以下　→150へ

43

読者のキミに質問。

キミは、女の子にモテるほうかな？

ここで、ミニ診断。以下の質問のうち、キミが当てはまるのは、ふたつ以上か？（**女の子なら無条件に154へ**）

①ラブレターをもらったことがある。

②バレイタインデーには、必ず１個はチョコをもらう。

③女の子との仲をウワサされたことがある。

④女の子に、誕生日のプレゼントをもらったことがある。

●ふたつ以上当てはまる　→280

●ひとつ、あるいは、全然当てはまらない　→154へ

44

ワナかもしれない。ここは、逃げよう。ボクは、めくらめっぽうに駆け出した。

どのくらい進んだだろうか。

気がつくと、山を越え、目の前に、平原が広がっていた。→342へ



45

弓を構えるヒマなんて、ありゃしない。ヤツのモーレツな勢いに、身をよけるのがせいいっぱいだ。このまま格闘戦にでもなったら、押しつぶされてしまうだろう。

知力ポイントは？

●7以上　➡320へ　　●6以下　➡191へ

46

なんてこった。ヤツに命中した矢は、次々とはね返ってくる。固いドクロには突き刺さらないのだ。

これじゃたちうちできない。（**武力ポイント・マイナス1**）

天使の羽を持っているか？

●**持っている**　➡114へ　●**持っていない**　➡156へ

47

いただきまあす！　ボクは、実を口の中にかくす。

「食べたな」ニヤリと笑って、ハデスが言った。

「ふあっはっは。バカめ。これでおまえは死んだのだ」

とたんに、光り輝いていた御殿は、闇の中に消えた。そして、金ピカのハデスも、漆黒の布をまとった死神に変わったのだ。やっぱりワナだったのか！

「ボクが死んだとは、どういうことだ！」

「この実を味わった者は、二度と地上世界にもどることはできない。冥府界の住人、つまり死者となるのだ」

47

「ざ〜〜〜んねんでした。ほんとは、食べてないよ〜だ」
「な、なに!?」ボクは、実を吐き出してみせた。
「おのれ！　それならばこのオレ様が命を奪うまでだ」
　ヤツは、鎌をふりかざして迫ってきた。
　大鎌を持っているか？

●持っている　➜ 229 人　●持っていない　➜ 82 へ

48

　ボッ。火玉のひとつが服のすそに燃え移った。
　あぢ〜〜〜!!　ころがり回りながら、必死で火を消す。
　頭にきたボクは、ファイアをムチャクチャに放った。
矢のまわりをクルクル回るファイアは、ヤツの火玉をけ散らして飛んでゆく。そして、矢は次々とツインベロスの体に突き刺さっていった。
　ボワ〜〜〜。
　ヤツは、本物の炎に包まれた。火は勢いよく燃え続け、その中にはまっ黒になったツインベロスの死骸があった。くっきりと形を残したふたつの頭が不気味だ。
　火が消え終わらないうちに、ボクは、先へと歩き出した。**➜ 346 へ**







49

しばらく考えて、ボクは男の話をきっぱりと断わった。

「ファミコンは現実世界だけのものです。フィクション世界にはフィクション世界のイメージがある。ぼくは、フィクション世界のイメージを大切に守っていきたいのです」

カッコイイ！　今のセリフ、老人はちゃんと書き取ってくれたかな。

それっきり、男の声は消えた。

それからどのぐらい歩いただろうか。これは、ハデスに化けた敵のワナじゃないだろうかと思い始めた時、遠くにかすかな光を発見した。

もしや、あれは!?

光に向かって走ってゆく。ああ、やっぱりそうだ。なつかしい地上世界の光だ。とうとう出口だぞ。➡ **388 へ**

50

読者のキミに質問。

好きなアイドル歌手の曲は、2回聞けば、メロディが覚えられるか？

●Ｙｅｓ　➡ **284 へ**　　　●Ｎｏ　➡ **360 へ**

51

ゼウスの言うとおり、歩き始めてまもなく、岩山にぶつかった。そのふもとには、3つの洞窟の入口が並んでい

る。右と左と中央どれに入るか？　運命の分かれ道だ！

●右の洞窟へ　➡161へ　**●左の洞窟へ　➡314へ**

●中央の洞窟へ　➡121へ

52

「クソッ、あの商人め！　ボクにまがいものの光の剣を渡しやがって……」

しかし、今さら後悔しても遅い。ひとつぐらい、アイテムを失ったからって負けるものか。ウジウジ考えるのはやめて次の部屋への扉を選ぼう。

●東の扉へ　➡358へ　**●西の扉へ　➡338へ**

●南の扉へ　➡29へ　**●北の扉へ　➡34へ**

53

おやっ、部屋の中に３つの扉が見える。

血のように真っ赤な扉、暗黒の世界へ続くような真っ黒な扉、そして、雪女の肌のようにぬけるような白い扉。

どれも、イヤ～な予感がする。だけど、こんな所でグズグズしてられない。ひとつの扉を選んで、前進だ。

●赤の扉へ　➡123へ　**●黒の扉へ　➡376へ**

●白の扉へ　➡203へ







54

何か、変だ。死んだはずの首がグラッ、グラッと動いている。

「ヤツはまだ生きているのか……」

ギョロリ、憎悪に満ちたメデューサの目がボクをにらみつけた。→ 377 へ

55

ここは……？

鏡を抜けて、着いたところは、森の中だった。

「ピットよ」目の前にあの老人が現れた。

「おまえは、別のフィクション世界へ迷い込んでしまったんじゃ。だが、もちろん、この世界を通過して、メデューサのいる世界へ行くことはできる。安心しなさい。それより、鏡の中を移動している間に、革袋の中から、アイテムが落ちてしまったようだぞ」

「えっ!?」

いそいでボクは、革袋の中を調べてみる。

「本当だ！　アイテムが３つしか残っていない」

（好きなアイテムを３つ選んで、リストからそれ以外のアイテムをすべて消す）

ボクが、革袋の中を調べている間に、老人は消えてしまった。しかたなく、ボクは歩き出す。→ 286 へ

56

歩き出したとたん、数匹の犬がボクを見つけて、ワンワン、吠えたてた。

村人たちがボクを探すために、犬を放していたのだ。

あっという間に、村人たちに取り囲まれてしまった。

どうせ、村人は誰ひとりとして、ボクが吸血鬼でないということを信じるわけがない。な、なんだ!? 村人のひとりがライフルを向け、ボクに狙いを定めた。

一瞬、銃口がキラリと光った。

ズドーン。弾はボクの心臓をぶち抜き、ボクはその場に倒れ込んだ。

END

57

キラッ！

部屋の中で何かが光った。近づいてみると、壁に丸い鏡が……。

あっ、あの老人の姿が映っている！

と思った瞬間、強烈な力で鏡の中に引き込まれた。

闇の中を落下してゆく——。

「おまえは、これからメデューサの城塞へ行くのじゃ」

そう言う老人の声が、耳の中でこだましていた。

→374へ



58

しかたがないな。今晩は野宿して、夜が明けるのを待とう。

ピ、ピピピ、小鳥のさえずりで目が覚めた。

さて、道が北と南に分かれている。どちらへ行こうか？

●北へ　➡ 288 へ　　**●南へ　➡ 168 へ**

59

なーんだ、ボクの考えすぎだったのか。無事に赤ずきんを送り届けたボクはホッとひと安心。

そして、おばあさんの家から出て、また旅を続けた。森を抜けると、道が左右に分かれている。さて、

●左へ　➡ 288 へ　　**●右へ　➡ 174 へ**

60

ウォーン、ウォーン。

狼の鳴き声だ。

窓から見ると、な、なんと何十匹もの狼の大群が村に向かって来る。

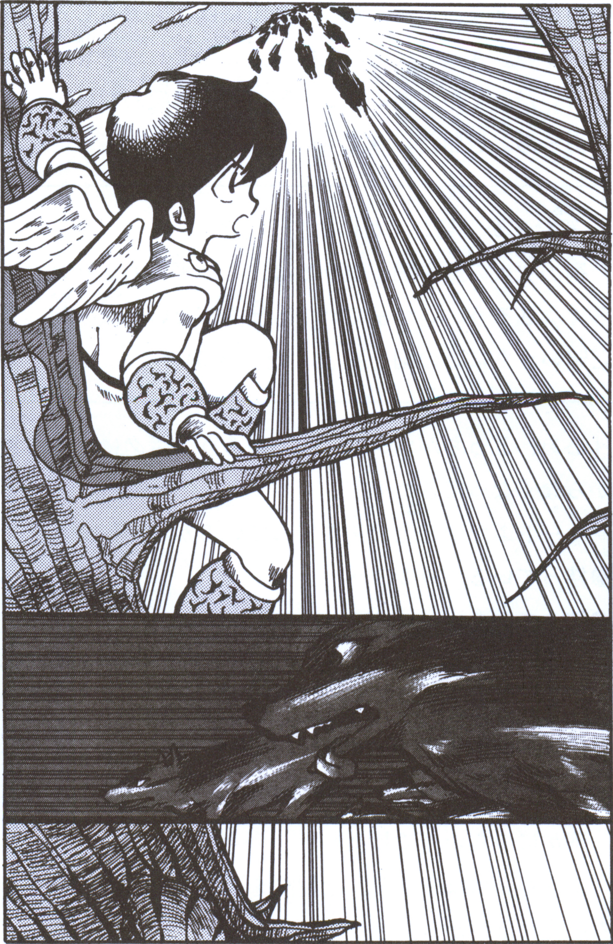
ここにいては危険だ。家を抜け出し、大木によじ登って、様子を見る。

「ボクはなんて、バカなんだ。少年はウソなんかついていなかったんだ」

（知力ポイント・マイナス１）➡ 22 へ

60

狼の大群の襲撃だ！　少年の言ったことは本当だったんだ。





61

町にとどまってみたが、この町には何もおもしろいものがない。きっと、あの王様が人々の楽しみを奪っているせいだ。その証拠に、この町の人々は笑わない。

あーあ、退屈だ。**→ 23 へ**

62

「鏡なんか、見たくないや」

宿の主人の話を聞く限りでは、この国もあまりおもしろくなさそう。いつまでいても仕方がない。次の朝、まだ暗いうちにこの国を脱出した。**→ 64 へ**

63

「ああ、どっちがホンモノなんだろう。ボクにはもうわからなくなってきたぞ」

ハートふたつと金の矢を持っているか？

●持っている　→ 393 へ

●持っていない　→ 266 へ

64

「ようやく、ここまでたどりついたな」

いつの間にか、老人が現れていた。

「どうじゃな。この世界での冒険の感想は」

「確かにつらい旅でした」

「そうか。おまえがどんな冒険をしてきたかは、アイテムを見ればわかる。どれ、アイテムを全部見せてみろ」

64

ボクは、言われたとおりアイテムを取り出してみせた。
ハートを３つと、金の矢を持っているか？

●全部持っている　➡ 379 へ

●全部そろっていない　➡ 243 へ

65

「ゴォーッ」
すごい風が吹いている。ボクは床に這いつくばって、敵がいないか確かめた。しかし、この部屋は風が吹くだけで何もいない。さて、次に行こう。東西南北、４つの扉がある。早く決めなければ、風に飛ばされて、壁に叩きつけられてしまう。

●東の扉へ　➡ 309 へ　**●西の扉へ　➡ 140 へ**

●南の扉へ　➡ 28 へ　**●北の扉へ　➡ 343 へ**

66

コメトはすばやい動きでボクに飛びかかろうとした。その目を狙ってキック。ヤツは青い血を吹き出しながら、死んでいった。**(武力ポイント・プラス１)**
「こうなりゃ、どんな敵とだって、ボクは戦ってやる」
さて、東と西と南の扉のどれを開けるべきか？

●東の扉へ　➡ 97 へ　**●西の扉へ　➡ 322 へ**

●南の扉へ　➡ 293 へ



67

部屋を開けると、そこには何もいなかった。ホッとひと安心しながら、ボクは次の扉を選ぶ。東、西、南、北どの扉も特徴がない。さて、どれにするか？

●東の扉へ　➡359へ　**●西の扉へ　➡177へ**

●南の扉へ　➡331へ　**●北の扉へ　➡368へ**

68

息が苦しい。この部屋は空気が薄いようだ。あわてずに、部屋の中を探ろう。どうやら、ここにも敵はいない。
「呼吸困難に陥りそうだ。早くこの部屋を脱出しよう」
次の部屋へ行く扉は北と西のふたつしかないぞ！

●北の扉へ　➡348へ　**●西の扉へ　➡269へ**

69

ピタ。勇んで右の道を歩き始めたボクの動きが止まった。同時に心臓が凍りつく。

そこには、ボクの太ももほどの太さのヘビが、トグロを巻いていたのだ！

ウワーッ！

ヤツは、ボクを見つけると、ゆっくりと、鎌首を持ち上げた。

わ〜〜ん、いきなり、こういう展開って、アリ？

早くやっつけなければ、こっちが襲われてしまう。

こうなりゃ、イチかバチかだ！

●弓を使ってみる　→ 180 へ
●石を投げつける　→ 394 へ

69

70

「なんですって、あの人ったら、キ〰〰、くやしい！」
ヘラの顔は、ますます鬼のような形相に変わってゆく。そして、猛烈な勢いで、ゼウスのいた方向へ飛んでいった。→ 36 へ

71

いつの間にか、川から離れた道を歩いていた。
ウワ――ッ!!
突然、足もとの土がくずれ出す。土の中から、奇怪な怪物が出現！　ヤツは触覚を、ゆっくりと動かしながら、はい出てきた！　まるでアリが巨大化したような化け物だ。
「何者だ、こいつ!?」
「ギリンだ」と敵が言った。何で戦うか？

●ファイア　→ 298 へ　●ムチ　→ 350 へ
●弓しかない　→ 241 へ

72

「パンパカパーン！　おめでとう。正解だ」
いつの間に用意したのか、ラッパが鳴り響き、くす玉が割れる。(知力ポイント・プラス 1)



72

「さあ、『ザ』、『神』、『話』と書かれた3つの箱のうち、どれかを選びたまえ！」

どの箱を選ぶか？

●『ザ』の箱　→183へ　●『神』の箱　→384へ

●『話』の箱　→217へ

73

休むときは、休む。いくら勇者だって、要領よくやらないと、身がもたないよ。（体力ポイント・プラス1）

近くにあった大きな石に、ドッかと腰かける。

サーッとさわやかな風が吹いてきて、木々の葉をサワサワと揺らした。うーん、気持ちいい。

ふと、上を見上げる。高く伸びた木々の間から、小さな空がのぞいていた。

うん？　あれは……!?　→275へ

74

「ダメだ。渡すわけには、いかないよ」

「どうしても、ダメか？　じゃ、やっぱり死のう」

くるりと背を向けるキクロペ。

「わ、わ、わ——！　わかったよ、やるよ、やるよ」

根負けして、ボクは言った。

「やったあ！」キクロペは、飛びあがって喜んだ。

約束どおり、かわりにヤツは大鎌をくれた。（大鎌入



72

「正解だ！　さあ、賞品を選びたまえ」とヘルメスが箱を指した。



74 **手、チェックリストに記入。天使の羽をリストから消す）**

キクロペと別れて歩き出す。

さて、この平原を、どのように進もうか？

●東に進む　➜ 252 へ　　●西に進む　➜ 300 へ

●南に進む　➜ 276 へ

---

75 矢ははずれっぱなし。あせれば、あせるほどとんでもない方向へ飛んでいく。**（体力ポイント・マイナス１）**

その時、不意に、ボクを狙っていたヤツらの動きが止まった。

男が、ヤツらに石を投げつけているのだ。

よーし、体勢を整えて、再度攻撃だ!!

１匹目に命中。よし、だんだん調子が出てきた。

とうとう、全部やっつけたぞ！

ボクは、男に駆け寄っていった。周りには、血を吐いた口の化け物の死骸が散乱している。**➜ 106 へ**

---

76 ザッバーン

上空のモイラに気をとられるうち、水の中に転落！

見ると舟は、５メートルほど先へ流されている。早く、舟へもどらなければ……。

ところが……！　モイラが、次々と、ボクに体当たり

76

してくるのだ！

これじゃあ、潜って、舟に近づくしかない。

水中に潜り、舟の下にたどりつく。さて、ここからが問題だ。ヤツらはきっと待ち構えているだろう。イチかバチか飛び出すだけだ！

1、2の、3！　勢いをつけて水から飛び出す。

うわあ——！

思ったとおりだ。ヤツらはいっせいに襲撃してくる！死にものぐるいでヤツらを払いのけながら、なんとか舟によじのぼった。**（体力ポイント・マイナス2）**

やった！　弓を手にしてしまえば、こっちのもんだ。たっぷりおかえししてやるぞ。**→253へ**

77

無事、もとの岸に到着。

腹ごしらえでもするとしようか。ボクは、湖の魚をつかまえ、焼いて食べた。

フー、満腹、満腹！**（体力ポイント・プラス1）**

そろそろ出発しよう。ボクは立ちあがった。**→223へ**







78

ムチは、持っているか？

●持っている　→ 255 へ　●持っていない　→ 42 へ

79

それからひたすら、歩き続けた。

はてしなく時間がすぎたような気がする。

（体力ポイント・マイナス１）　→ 372 へ

80

素早く弓を構え、ヤツに狙いを定める。すると、まだ弓を放たないうちにヤツはガクガクふるえ出した。

「ワー！　やめてくれ!!　弓をこちらに向けないでくれ。オレは、先端恐怖症なんだよ～～」

そう言ってヤツは、あッという間に逃げていってしまった。

なんだ、ありゃ。あれでよくドロボウが務まるな。でも、おかげでアイテムが盗まれずにすんだ。

早く山を下ってしまおう。**→ 189 へ**

81

「せめて、腹筋ができるくらい、その樽みたいなお腹を引っこめるんだな」

そうヤツに言い捨てて、ボクはその場を去った。

→ 227 へ

82

トァ――！

死神は、ボクの脳天めがけて、鎌を降りおろしてきた。とっさに後ろへ飛ぶ。鋭い刃が、鼻先をかすめた。

ガッ！　ヤツの鎌は、そのまま地面に突き刺さった。あわてて引き抜こうとする死神。しかしよほど力まかせに振り降ろしたのか、なかなか抜けない。

今だ！　素早く弓を構え、ヤツの背中に向かって、矢を放つ。と、ところが……!?

矢は、死神の体を素通りして、次々と地面に突き刺さったのだ!!　こ、こいつの体は、幽霊と同じなんだ。

手応えのない敵なんて、どうやって倒せばいいんだ？モタついているうちに、地面から鎌を引っこ抜いた死神がまた向かってくる！

ガードクリスタルを持っているか？

●持っている　→387へ　●持っていない　→192へ

83

ボウッ、ボウッ。

ツインベロスは、ふたつの口から、火玉を吐き出してくる。

アチチチチ〜〜。

火玉が、髪の毛や服をかすめていく。これは、容易に近づけないぞ。



83

ファイアを持っているか？

●持っている　➜ 48 へ　●持っていない　➜ 150 へ

84

悪魔コビルがくれたガードクリスタル。

こいつが何かの役に立つかもしれない。

ガードクリスタルを取り出す。先端についている透明な石がキラリと光る。するとそこから、光がふたつ飛び出した。それは、ボクが歩きはじめると、まわりをくるくる回りはじめた。

ほら穴のような、せまくて暗い道をひたすら歩き続ける。どのくらい時がたっただろう。

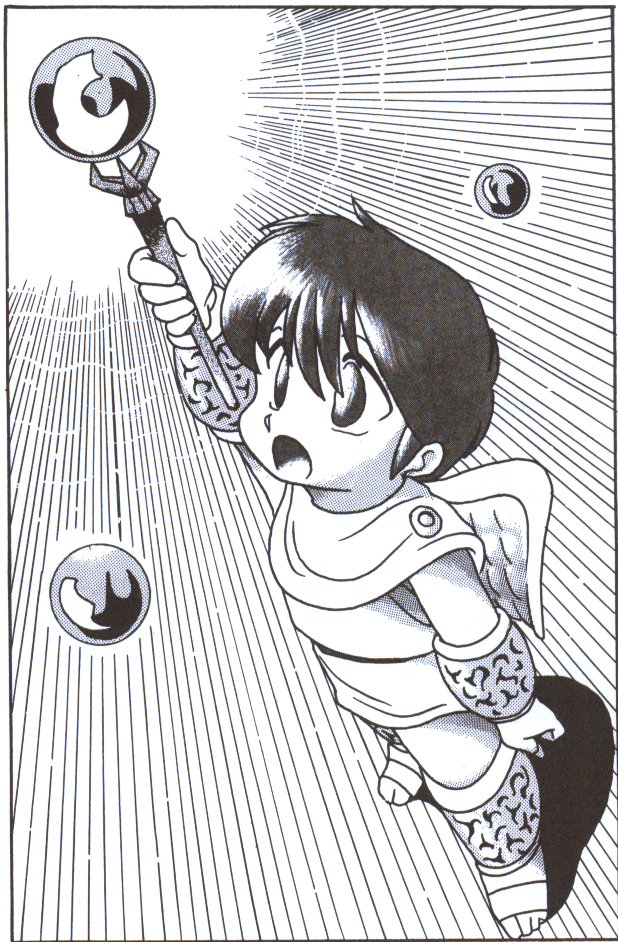
あ、あれはもしや……。はるかむこうからもれるかすかな光。希望を抱いて、ボクはそれに向かって走った。光が次第に広がってゆく。

ああ、まぎれもない、なつかしい地上の光だ！　出口は目前だ。

それにしても、ハデスの言った試練って、いったい何だったんだろう……。

なに気なくボクは、まわりをくるくる回っているガードクリスタルのふたつの輝きに目をやった。

そうか！　こいつが、ずっと守っていてくれたんだ。ボクを襲ったはずの誘惑や幻から……。➜ 388 へ



84

コビルのくれたガードクリスタル。こいつがきっとボクを助けてくれるさ。



85 「うほ——い」

突然、上空で、妙な叫び声が……。

あっ、あれは何だ!? ➜ 233 へ

---

86 「こっちゃこい、うほ、うほ。こっちゃこい！」

ヤツは奇妙な呪文を唱え始める。

そうは、させるか！　ボクのみがき抜いたハイテクを見よ、ファミコン流、弓矢の連続攻撃だ！

ヒュン、ヒュン、ヒュン。切れ目なく、矢が飛ぶ。

さすがに、矢の雨を浴びて、ヤツは逃げ出した。

「うほ——い、たまらん、ほーい」

（リストの中から、アイラムを 2 個消す。弓矢以外のアイテムが全然ない人は、かわりに、武力ポイント・マイナス 2。ひとつしかない人は、そのひとつを消し、武力ポイント・マイナス 1）

気をとり直して歩き出す。10 分ぐらい進むと、湖に出た。どれ、どれ、ここらで、ひと休みしようか。

水浴びをしようと、湖に入ったとたん！ ➜ 15 へ

---

87 バタン。扉を開けて入ってきたのはなんと、憎きメデューサだった。

しかし、今、ボクが飛び出しても勝ち目はない。なん

87

とか、このまま身を隠していなければ……。

「どうか、メデューサに見つかりませんように」ボクは心から祈った。

しかし、何て不運なんだ。ドジなボクはくしゃみをしてしまったのだ……！　→377へ

88

倒したはずのメデューサの首が動いた。そして、ボクの方へ顔を向けようとしている。

「あっ、危ない。ヤツの目を見たら、たちまち、ボクは石にされるのだ」

こうなったら、メデューサの息の根を止めてやるしかない。銅の矢はあるか？

●銅の矢を持っている　→236へ

●銅の矢を持ってない　→377へ

89

反対側の岸に到着。このへんで、ちょっとひと休みしよう。ボクは、岸辺に座り込んだ。**（体力ポイント・プラス１）**

ふと、向こうのほうに、人が立っているのに気がついた。人影に近づくか？

●近づく　→254へ　**●無視して先へ進む**　→109へ



90

日が暮れ始める。あたりが急に薄暗くなって、何だかボクは心細くなる。とぼとぼ……と歩いていると、1軒の家の明かりが見えた。明かりの方へ行ってみるか？

●Ｙｅｓ　→130へ　　●Ｎｏ　→58へ

91

あたりを探し回ってみると、少年も別の木の陰に隠れていた。恐怖にブルブルと体を震わせながら、様子をうかがっているようだ。

あっ、少年が狼にほえ立てられている。少年の方へ近づいていって、狼から救うべきか？

●Ｙｅｓ　→207へ　　●Ｎｏ　→264へ

92

ボクひとりだけ、ボーッと立っていた。

すると、馬の上にいた王様がボクの姿を見とがめて、

「無礼者！　そいつをひっとらえるのじゃ!!」

逃げるか、それとも抵抗せずにつかまるか？

●逃げる　→23へ　　●抵抗しない　→208へ

93

危機一髪!!　たけり狂ったニセモノがのしかかろうとした瞬間、足めがけて、矢を放った。

ギェ〜〜〜！　ヤツは叫び声をあげて、床に倒れ込んだ。

今だ——！　ボクはヤツの心臓にキック。すると、ヤ

ツは血ヘドを吐きながら、息絶えた。

白雪姫を無事に救い出したボクに、王様が言った。

「この国にずっといて、わしの右腕になってくれ」

しかし、ボクにはパルテナを救うという使命があるのだ。行かなければ……。

ボクは王様の申し出を丁寧に断わって、この国をあとにした。 **→ 64 へ**

93

94

ネトラのスキをついて、ボクはそばにあった石を頭の上に落としてやった。すると、ネトラは体をバタつかせながら、息絶えた。**(武力ポイント・プラス１)**

「ザマーミロ」

ボクは自分の力に感心しながら、次の部屋に進むための扉を選ぶ。北、西、南のどれがいいか？

●北の扉へ　→ 309 へ　　**●西の扉へ　→ 28 へ**

●南の扉へ　→ 381 へ

95

「うっ、まぶしい」

なんと、ここは光の部屋だ。四方から、光が射してきて、目をあけていられない。ボクは目をふせながら、次の部屋への扉を探しあてる。

北、東、南、どうやら、３つの扉がある。どれを選ぶ



95

べきか？

●北の扉へ　→ 313 へ　　●東の扉へ　→ 3 へ

●南の扉へ　→ 295 へ

96

　この部屋は何もない。壁がまっ白で、物音ひとつしない。なんて静かなんだろう。

「そうか、きっと、嵐の前の静けさだな」

　次の部屋ではまた、恐ろしい敵が待っているに違いない。ファイトがわくぜ!!　東西南北、どの扉を選ぶべきか？

●東の扉へ　→ 381 へ　　●西の扉へ　→ 358 へ

●南の扉へ　→ 325 へ　　●北の扉へ　→ 28 へ

97

　扉を開けると、その部屋には人の悲鳴が響いていた。

「キャー、キャー」

　頭が割れそうだ。気がヘンになるぞ。

　どうやら、声だけで何もいない。早く、次の部屋へ進もう。東、西、南、いったい、どの扉を開ければ、いいのか？

●東の扉へ　→ 343 へ　　●西の扉へ　→ 329 へ

●南の扉へ　→ 140 へ

98

商人の言葉を無視して、次の部屋への方向選択をする。東西南北、どの扉を見てもイヤーな予感がしてくる。

●東の扉へ　→ 358 へ　**●西の扉へ　→ 338 へ**

●南の扉へ　→ 29 へ　**●北の扉へ　→ 34 へ**

99

胞子を吸い込むと、胸がムカムカする。こいつはきっと有毒だ！

ヤツは、空中を飛んだり、地面に降りたり、自在に胞子を吹きかけてくる。

胞子を浴びまいと、よけるのがせいいいっぱいだ！

早く攻撃しなければ！　弓を構えながら、スキを狙うが……。

バトルだ！

ルールにしたがって、敵との勝敗を決定せよ！

●勝った　→ 298 へ　**●負けた　→ 370 へ**

100

大変なことになってしまった。ああ、あの時、鏡さえのぞかなければ……。後悔しても、もうおそい。

不安を胸に、トボトボ歩き出す。しばらくして、小さな湖に出た。なんだか、足がスースーするな。

あれっ！　その時、突然気がついた。いつの間にか、ちゃんとギリシア時代の衣装を身につけている！　白い



100

布をスカートみたいに、ピラピラとまとい、サンダルまではいているのだ。どれどれ、ピット様の勇姿を拝見。

水面に近づいた。ところが……!? そこに映っていたのは、きれいな女の人の姿だったのだ。

ま、まさか、ボク、性転換までされちゃったの——!?

しかし、その時、声が……

「勇者ピット、早くわたしを助けにきて下さい」

悲しそうな瞳でそう訴え、その女の人は消えた。もしかしたら、今のが女神パルテナだろうか？　美子ちゃんを大人にしたみたいに美人だ。なんだか、ガゼンやる気がわいてきたぞ！

さて、分かれ道だ。右へ行くか、左へ行くか。

●右へ　➡ 69 へ　　　　●左へ　➡ 142 へ

101

「いいえ、知りません」

「そう。わたしは、女神ヘラよ。もし、ゼウスを見つけたら教えてね」

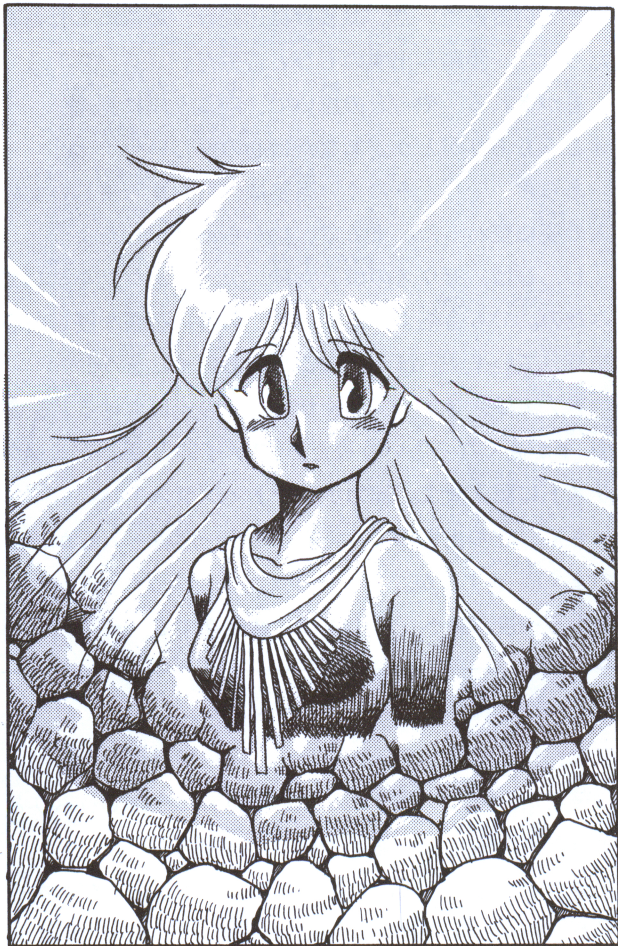
そう言うと、女神は去った。➡ 297

102

「悪いのう。通りがかっただけじゃのに」

「い、いえ。平気です」

くそ〜〜〜。なんでこんなに重いんだ？　まるで石を背



100 湖にうつるパルテナの美しい姿。ガゼンやる気がわいてきたぞ！



102

負っているみたいだ。おまけに川底は、ぬるぬるした石だらけ。一歩踏み出すのもひと苦労だ。

息がきれる、やっとの思いで、向こう岸に到着。

「どうもありがとう。あなたは心の優しい少年ね」

あらら……!? みにくい老婆は、たちまち美しい女の人の姿に変わった。まるで、絵からぬけ出したよう。

「わたしは、ゼウスの娘、女神アテナ。あなたを試してみたの。でも合格よ。あなたは、勇者に必要な優しい心を持っています。ほうびにこれをあげましょう」

アテナは、ファイアをくれた。矢の先につけると、命中率が高くなるという炎だ。**(ファイア入手。チェックリストに記入せよ。知力ポイント・プラス1)**

さて、立ち止まって考える。もう一度森へ入るか、このまま直進するか。

●もう一度、森へ　→144へ　●直進する　→71へ

103

おや？ 声がするぞ。それも大勢だ。

な、なんだ!? まっ昼間から、宴会だろうか？

美女たちにとり囲まれたひとりの男。そのでっぷりと太った男を中心に、歌えや踊れの大騒ぎ。

見つからないうちに立ち去ろう。クルリときびすを返したとたん――「おーい、そこの若者。こっちへこい！」

103

しまった、おそかった。

「わっはっはっは。苦しゅうない。わしは、酒の神バッカスじゃ。ここを通りかかったのも何かの縁。余興に何か歌ってゆかんか？」

大きな耳たぶまで染まった赤ら顔。豪快に笑いながらバッカスは言った。強引な神だ。逆らうと後がコワいぞ。

何を歌うか？

●日本の心、演歌で酔わせよう　→ 218 へ

●ギンギンのロックで注目を集めよう　→ 182 へ

104

天使の羽を試してみるチャンスだ。

羽を身につけて、よ――い、ドン！

ウワー、本当だ！　ヘルメスが言ってたとおりだ!!

あの出現のしかたから言って、巨人の足も相当速いはず。なのに、巨人が平原の端にたどり着く前に、ボクは、平原を往復していた。

飛ぶように走るとは、こういうことをいうんだぜ！

「ま、まいった！　オレさまの負けだ」

もどってくるなり、地面に倒れ込んで、巨人は言った。

「王座を奪われてしまった。もう、生きてはゆけぬ」

そう言って、キクロペは、どこかへ立ち去ろうとした。

「わ、わ、待って、早まっちゃいけない！」



104 ボクは、巨人を止めようと、その足にタックル。そして、天使の羽のことを話した。すると……。

「それが欲しい！　たのむ、この大鎌と交換してくれ」

そう言ってヤツは、大きな頭を何度も下げるが……。

天使の羽をキクロペにあげるか？

●あげる　➡ 74 へ　　　●断わる　➡ 184 へ

---

105 勝った――！

「うぐぐ。おまえの運はなかなか強力じゃわい。わしの魔力では、アイテムをひとつ奪うぐらいがやっとじゃ」

貧之神はくやしそうにそう言って、ドロンと消えた。

もとの闇が周囲をうめつくす。

いそいで、穴の外へ出て、革袋の中を調べる。

ヤツの言う通りアイテムがひとつなくなっていた。

（チェックリストの中から、アイテムをひとつ消す。弓以外のアイテムが全然なければ、かわりに武力ポイント・マイナス２）

気をとり直して、別の方向へ歩き始める。**➡ 186 へ**

---

106 「危ないところをありがとう。わたしは、予言者プロメテウスだ」傷口を押さえながら、男は言った。

「どうして、こんなところにつながれていたんですか」

106

「わたしは、ずっとメデューサに囚えられていたんだ。ある日、ヤツに思いっきり悪い予言をしてやったらこのざまさ。ここにつながれて、さっきの怪物ミックのエジキにされようとしていたんだ」

メデューサめ、なんてひどいことをするんだろう！

「ピット君、お礼にいいことを教えてあげよう。もうしばらく行くと、大きな湖に出る。その湖の中には、小さな島がある。島には、セレインという魔物が住んでいるが、こいつが持っている蜜酒は、後できっと役に立つぞ」

（知力ポイント・プラス１）

プロメテウスと別れて、ふたたび歩き出す。

さて、丘を反対側に降りようと思うが、右と左、どちらの道を下るか？

●右の道へ　➜186へ　　●左の道へ　➜149へ

107

その時、舟に立てかけてあったオールが、コトリと音を立てて落ちた。

はっ、霧が濃くなってゆくというのに、ボクはいったい何をしていたんだろう。あの声のせいだ！

よおし、声をかき消してやる。

ボクは竪琴をひき始めた。ポロロン……。

ころがるような音色が湖に響いてゆく。それは、この



107

世のものとは思えないほど美しい音色だった。

すると、圧倒されたかのように歌声はピタリと止んだ。

この間に島に上陸だ！　猛スピードで舟をこいでゆく。

➡ 355 へ

108

「ところで、お前はどこの者だ。この村の者ではないな。いったい、どこから来たんだ」

村人たちは皆、ボクを疑い深げな目でジロリとにらみつけている。何と答えれば、ボクのことをわかってもらえるんだろう。さて、今の知力ポイントは？

● 10 以上　➡ 261 へ　　● 9 以下　➡ 165 へ

109

パタ、パタ、パタ……。

おや？

見上げると、人間の大きさほどもある巨大な花が、空中に浮かんでいる。

不思議だ。あんな重そうな花が……？

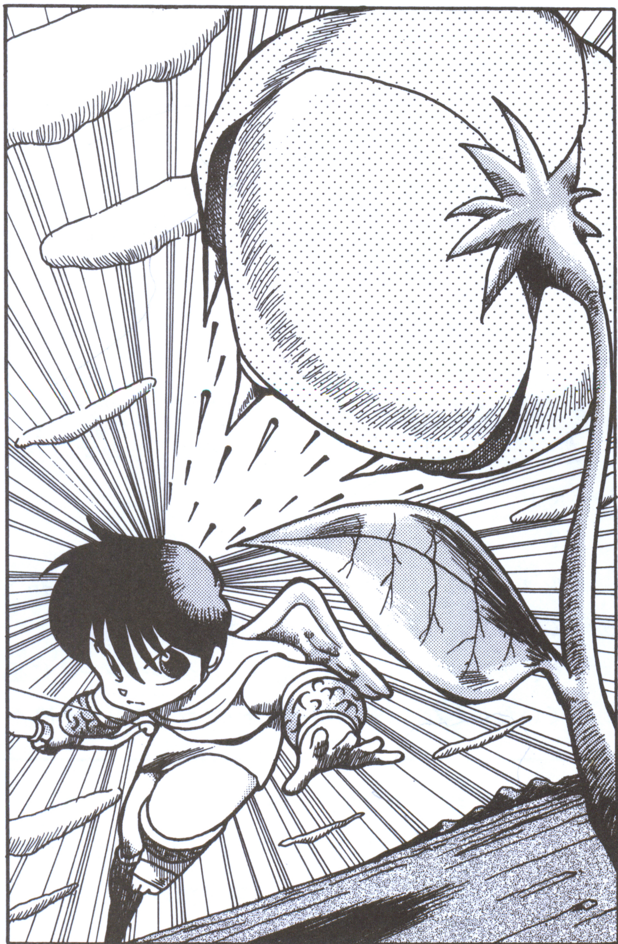
次の瞬間、そいつは急降下してボクの前に立ちふさがった。

「わたしは、ダフネよ。とても美しい花。だから、わたしには、トゲがあるの」

そう言うなり、ヤツは花からトゲを発射した。

109

「わたしは美しい花」そう言うなりダフネはトゲを発射してきた。





109

ナルシスを連れているか？

●連れている　→224へ　●連れていない　→8へ

110

「美しい少年じゃのう」

ヘレーネは、ナルシスを見て目を細めた。

「どうじゃ。わらわといっしょに、月の世界で暮そう。欲しいものは、なんでも与えてやるぞ」

「いやだ！　ぼくはピットといっしょに旅を続けるんだ」

きっぱりとナルシスは言った。けなげなヤツ。

「じゃが、月の世界には、おまえとそっくりの女の子がいるぞ」

「え？　ほんと？　じゃ行く！」

ズルッ。ふたりはボクを無視して、仲良く月の世界へ去っていった。なんだ、あいつらは！

でも、ナルシスがいなかったら、ボクがヘレーネに狙われていたかもな。**（知力ポイント・プラス１）　→79へ**

111

それほど、おいしい実なのか……。

ボクは、その男が差し出す実を口に入れた。その味は、イチゴのように甘く、桃のようにコクがあり、なしのようにみずみずしい、なんとも不思議な味だった。

111

その味に魅せられ、いったい実をいくつ食べたことだろう。

気がつくと、ボクは、自分がなぜここにいるのか思い出せなくなっていた。それに自分の名前さえも……。

でも、まあ、いいさ。この村にいれば、いつまでも楽しく暮らしていけるだろう。

END

112

どうやら、地獄を脱したようだ。周りはまた、霧に包まれた薄闇にもどっていた。何が起こるかわからないぞ。

おっと、さっそく敵さんの登場か？

ドクロに触手がついたようなヤツが、フワフワと空中をただよってくる。

さすが、冥府界の化け物。気色悪い。

よく見ると、おでこの部分に大きく、「ガニュメデ」とイレズミが彫ってある。さて、何を使ってやっつけるか？

●ムチ　→282へ　●ファイア　→190へ

●弓しかない　→46へ

113

赤、青、緑……何種類ものスポットライトが、突然上から差し込んだ。そして、なんと、その中に浮かびあがったのは、黄金造りの御殿。それは、様々な光をうけて、



113

さんぜんと輝いている。

もしかしたらここは、ハデスの神殿か？　中に入ってみようか、どうしようか。

●中に入る　→256へ　　**●素通りする　→11へ**

114

天使の羽で逃げれば、ひとっ飛びだ！

ビュン、ビュン、ビュン。５歩も駆けただろうか。ふりむくと、もうガニュメデの姿はなかった。

ところが、天使の羽をしまおうとした時、羽がなくなっていることに気がついた。必死であたりを探しまわる。しかし、どうしても見つからない。

しかたない、あきらめよう。ボクは落胆しながらトボトボ歩き始めた。**（天使の羽をリストから消す。知力ポイント・マイナス１）　→227へ**

115

「よくここまでやって来たな、ピット。わがハデスの神殿にたどりついたことが、真の勇者のあかしじゃ。ほめてつかわすぞ」金の衣装に身を包み、髪の毛やヒゲまでも金色に染めたハデスが言った。

「さっそく歓迎の酒盛りじゃ」そうひと声、王が叫ぶと、大きなテーブルは、豪華なごちそうで埋めつくされた。

「さて、食事に入るまえに、勇者の儀式じゃ。ここに、

115

地下世界でしかとれないザクロの実がある。これは、食べると、今より何倍にも強くなれるのだ。勇者にもってこいの実じゃ。まず、これから味わうのじゃ」

ハデスは、実を勧めるが……。知力ポイントは？

●9以上　→47へ　　●8以下　→157へ

116

闇がどんどん深くなる一方だ。引き返そうか迷っているうちに、とうとう真の暗闇に包まれてしまった。

すると、どこからか、不気味な笑い声が……。声は、次第に闇全体に広がってゆくようだ。

今ならまだ引き返せる。**（引き返す場合は、分岐点にもどって、別の道を選択）**

さて、どうする？

●様子を見る　→230へ　　●引き返す　→346へ

117

ここは……。机、ベッド、美子ちゃんの写真立て……。

ボクの部屋だ！

そうなのだ。ボクは、自分の部屋の机に座っていた。鏡を前にして……。

夢を見ていたんだ。机で本を読んでいるうちに、いつの間にか眠ってしまったんだ。

ボクは、なんだか寂しい気持ちに襲われた。



117

たとえ夢でも、最後(さいご)までみたかった。

END

118

「ヒー、ヒー、ああ、もう死にそう」

最後(さいご)の一歩(いっぽ)を登(のぼ)りきると、ドッとその場(ば)に倒(たお)れ込(こ)む。

（体力ポイント・マイナス１）

「おまえが勇者(ゆうしゃ)ピットか？」

上(うえ)から声(こえ)がふってきた。見上(みあ)げると、岩(いわ)のように固(かた)そうな筋肉(きんにく)を持(も)った、巨人(きょじん)が立(た)っていた。

「スナから話(はなし)を聞(き)いたよ。銅(どう)の剣(けん)がほしいんだってな」

こいつが、巨人アトラスか。

「いいとも、協力(きょうりょく)しよう。ただし、今(いま)オレがやっている天(てん)を支(ささ)える仕事(しごと)をかわってくれたらだ」

「天を支えるって!?　そんなムリだよ。ぼくには」

「いや大丈夫(だいじょうぶ)。オレが締(し)めているこのベルトを身(み)につければ。これは力持(ちからも)ちになれる魔法(まほう)のベルトだ」

巨人の仕事を代(か)わってやるか？

●Yes　→232へ　　●No　→7へ

119

「おまえは、何者(なにもの)だ！」

「オレはメデューサ様(さま)に仕(つか)えるなすび使(つか)い。または……」

口(くち)の中(なか)でブツブツと呪文(じゅもん)を唱(とな)えたかと思(おも)うと、ヤツは

119

ドロンと消えた。かわりにそこに現れたのは……

「あ——っ！　山の妖精スナ」

信じられない変身。憎らしいことにウインクしてる。

「そういうことか。おまえたちグルだったんだな」

「そのとおりだ」ナスビ使いは、再び元の姿にもどった。

「アトラスのやつが、しくじらなければ、おまえは今ごろ、天の下敷きだったというのに」

ヤツは、憎々しげにアトラスを見て言った。

「こうなったら、オレが片ずけてやるまでだ！」

ヤツは、杖を使って、呪文を唱え始めた。

ガードクリスタルは持っているか？

●持っている　→159へ　●持っていない　→196へ

120

「残念ながら、まだ修業が足らんようじゃな。真の勇者としてはまだ不合格だ」ゼウスは、冷たく言い放った。

はじめて、ゼウスに会った時、ゼウスのナンパを目撃しているか？　そしてさらに、ヘラにそのことを告げ口しなかったか？　このふたつの条件を満たすならYesへ、ひとつでも、当てはまらなければ、Noへ。

●Yes　→160へ　　●No　→361へ



121

　ああ、鏡だ！　吸い寄せられるように、ボクは、鏡に近づいていく。そして鏡をのぞいた瞬間、ボクはその中へ吸い込まれていった。

　闇の中をどこまでもどこまでも落ちてゆく。

「ピットよ、ピットよ」聞き覚えのある声……。そうだ。ボクの物語を書いている老人の声だ！

「ピットよ、おまえは、ワナにはまってしまったんじゃ。この鏡に入り込むと、時間がもどってしまうんじゃよ。今までの記憶は全部消されて、また冒険の途中からやり直しじゃ。やれやれ、おかげでわしの本も白紙にもどってしまった。無駄な仕事をしてしまったわい」

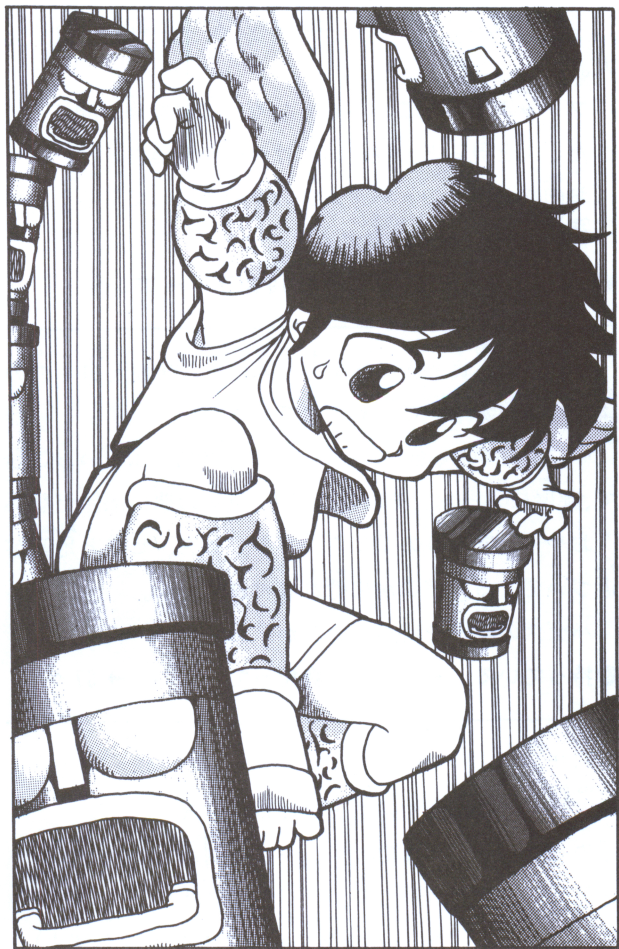
　意識が遠ざかっていく——**（リストの中からアイテムをふたつ消す。体力ポイント・マイナス２、武力ポイント・マイナス２、知力ポイント・マイナス２。アイテムがひとつしかない人は、それだけ消す。アイテムがない人は、ポイントのマイナスのみ）**　**→ 278 へ**

122

　グラ、グラ、グラリ！　おやっ、ヘンだ。神殿に足を踏み入れたとたん、１本の柱が大きく揺れ始めた。

　ドスーン。柱の１本が崩れ、ボクの足元に落ちてきた。

　間一髪で柱の下敷きにならずにすんだ。が、ホッとしたのもつかの間、また落ちてくる。



122

うわぁ――!! 柱の下敷きになんてなったらカッコ悪いぜ！



122

　これは柱じゃない！　はにわのような顔したお化けだ。
「フォッホホ」どこからともなく不気味な声が聞こえてきた。ふと見ると、柱のお化けが口を開いた。
「お前など、このトーテム様の下敷きにしてやる」
　体力ポイント＋知力ポイントは？

●20以上　→305へ　　●19以下　→362へ

123

　ギィーッ、真っ赤な扉を押し開ける。壁も天井も血のような真っ赤な色で、ぬられている。
　中を見回すと、誰もいないようだ。勇気をふるいおこして、部屋に入った。それにしても、気味の悪い部屋だな。
　おやっ、向こうの壁から、ヒタ、ヒタ、ヒタと足音が近づいてくる。どこかに隠れなければ……。
　ハデスの帽子を持っているか？

●持っている　→17へ　　●持っていない　→87へ

124

　バサッ!!
　大鎌がメデューサの首を落とした！
「やったぁー、これでメデューサを倒したんだ」
と思ったのも、つかの間、ドジなボクはハデスの帽子を落としてしまった。**（ハデスの帽子をリストから消す）**

124

ボクの姿は敵からまる見えだ。

知力ポイントは？

●10以上　→ 88 へ　　●9以下　→ 54 へ

125

あったぞ、鏡だ！

だ円形の鏡が、部屋の中央に浮かんでいた。この鏡が本物のメデューサーのいる世界へ導いてくれるに違いない。そう確信して、ボクは鏡に近づいた。

スーッと体が鏡に吸い込まれてゆく。→ 117 へ

126

物陰に隠れて、村人たちの様子をながめる。何か儀式が行なわれているようだ。

村人たちは口々に呪文を唱えている。棺のふたをあけて、ひとりの男が死体に向かって、何かを叫んだ。

それから、その男はなんと死体の心臓にクイを打ち込んでいる。いったい、この村はどうなっているんだ。狂っているのか、それとも、何かがあるか？

●近寄って村人たちにわけを尋ねる　→ 201 へ

●近寄ると危険だ、見つからぬよう、進もう　→ 306 へ

127

逃げても、逃げても追いかけてくる村人たち。

これまでの冒険の疲れもあって、足が思うように動か



127

ない。

（体力ポイント・マイナス１）

「何てことだ、この先は行き止まりだ」

結局、つかまってしまったボク。

力ずくでムリやり、村長の家へ連れていかれる。

→ 327 へ

128

冗談じゃないよ、ボクは吸血鬼じゃない。

「村長、聞いてくれ。ボクはホントはこの世界の人間じゃないから、この国の鏡には映らないだけなんだ!!」

だめだ。村長は恐怖感でボクの話を聞くどころじゃない。**（知力ポイント・マイナス１）**

そして、村長はボクに十字架をつきつけ、奥さんは村人たちに助けを求めにいった。

どうして、ボクの言葉を信じてくれないんだろう。仕方がない。今のうちに、この村から逃げ出そう。吸血鬼の伝説を信じているような村にいたら、きっとボクは殺されちゃう。→ 287 へ

129

それにしても、この館は妙だ。人間が住んでいるにしては暖かみがない。ゾォーとするような寒気を感じる。もしかしたら、ここは……。十分、注意しよう。

129

居間に通されると、主人が現れた。立派なひげをたくわえた紳士だ。

「キミかな、森に迷った少年というのは。ロクなもてなしもできないが、今晩はゆっくりと休んでいきなさい」

主人の暖かい言葉にボクはひと安心。居間に大きな鏡が飾られている。そっとうかがう。が、主人の姿はちゃんと映っている。なーんだ、やっぱりボクの早とちりか。きっと、疲れて疑い深くなっているんだ。今晩は主人の言葉に甘えることにしよう。 →237へ

130

「道に迷ってしまったんです。一晩泊めて下さい」

とても人の良さそうな老夫婦で、心良く承知してくれた。テーブルには、質素だが温かいスープといい香りのするパンが用意されている。ボクはひと口食べると、急に元気が出てきた。**（体力ポイント・プラス1）**

「ばあさんや、娘がプレゼントしてくれた、うちの宝をお客人にも見せてあげなさい」

おじいさんに言われておばあさんが持ってきたのは、きれいな鏡だった。

この世界では、貧しい人々にとっては鏡は高級品なのだろう。美しい鏡だ。それを手にとって見る。

ところが……。自分の姿が映らない!!



130 ガッシャーン。おばあさんは持っていたカップを突如床に落とし、体をブルブルと震わせている。おじいさんも急に顔色を変えて、ボクを見る。

「ま、魔物だぁー!!」

冗談じゃないよ、ボクは魔物なんかじゃないのに。ボクは大あわてで、その家から逃げ出した。➜ 204 へ

---

131 「化け物め、この銀の矢をくらえっ!!」

目に矢がつきささり、悲鳴をあげて化け物は倒れた。

ボクはナイフで、化け物の腹をグサリと裂く。中から赤ずきんが飛び出した。

「おばあさーん、恐かったよぉー」

「おー、よしよし。ありがとう旅のお方。赤ずきんを助けてくれたお礼に、この赤いハートをあげましょう」**(赤のハートを入手、チェックリストに記入せよ)**

ボクは赤ずきんとおばあさんに別れを告げ、また旅を続ける。森の中を抜けると、道が左右に分かれている。

●左へ　➜ 288 へ　　**●右へ　➜ 174 へ**

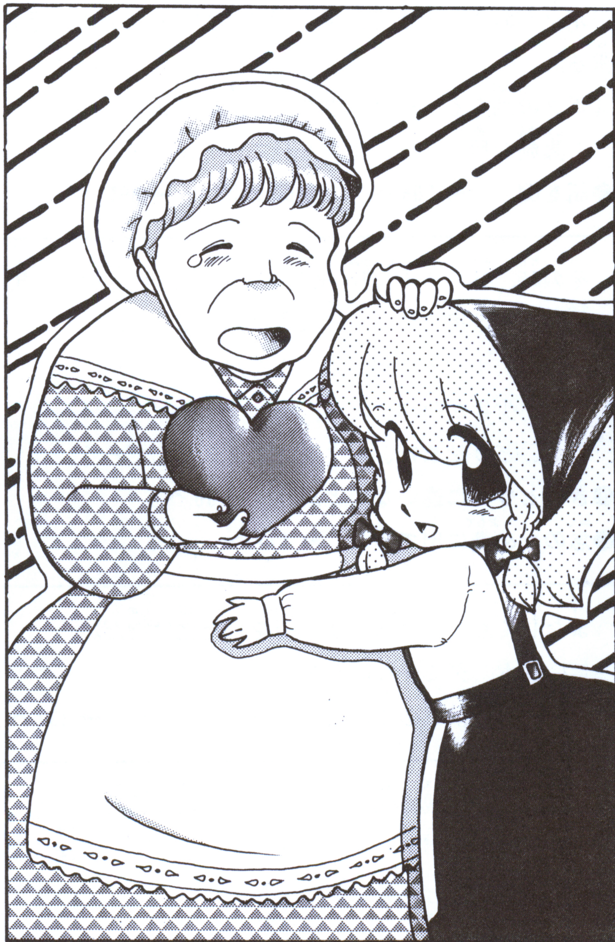
---

132 もう、1時間以上が過ぎた。しかし、やはり、狼が現われる気配はない。

「コイツ、やっぱり、ウソを言ったんだな」

131

赤ずきんを助けたお礼に、おばあさんは赤いハートをくれた。





132

ボクがおこり出すと、少年は「ホントなんだ」と言い張る。

「ボクの話をもう一度、きちんと聞いてよ」

と真剣な目をして、ボクを見ているが……。

●話を聞く　➡206へ　　**●聞かない　➡365へ**

133

その時、外から「狼が来たぞォー」という少年の声。前の時とは違って、今度は真に迫っている。

「狼だよ、ホントに狼が来てるんだよォー」

また、少年が叫ぶ。

でも、どうせまた、ボクをだます気なんだろう。

●きっとウソに違いないと思う　➡60へ

●念のため表に出てみる　➡171へ

134

またしても、メデューサの姿をした化け物だ。

こいつも、ダミーなのか？

お前なんか、この銀の矢で射抜いてやるぞ。**➡332へ**

135

翌日、ボクは城に向かった。そして城の門番に、

「お姫さまを必ず笑わせてみせます。どうか、王様に会わせて下さい」と謁見を申し出た。

王様の部屋に通された。

135

「おい、わかっておるな！　もし、姫を笑わすことができなければ、即刻、打ち首じゃぞ!!」

王様はきっぱりと言った。→ 173 へ

136

娘の部屋に入ると、大きな鏡が壁に飾られていた。

「おっと、危ない。ボクは鏡にうつらないんだから、要注意だ」

ボクは鏡にうつらない位置に立つ。すると、娘は鏡に「鏡よ、鏡。世界で一番美しいのはだ〜れ？」と尋ねた。

「それは白雪姫」

なんと、不思議なことに鏡が答えた。

へえー。そんなに美しい白雪姫なら、ぜひ一度、会ってみたいもんだ。

「今夜、お城で姫のお婿さんを選ぶための舞踏会があるの。国中の貴族が集まってくるの」と娘が言った。

チャンス！　まぎれこんでやれ。→ 308 へ

137

牢の中から白雪姫を救い出し、白雪姫の部屋へ向かう。

そして、ボクはニセの白雪姫に向かって叫んだ。

「お前はいったい、何者だぁー」

だが、その白雪姫は言った。

「私はホンモノの姫よ、後ろの者こそ、ニセモノなのよ」



137

ふたりとも、私がホンモノだと主張する。どちらが本当なんだろうか？

●部屋にいた姫　→ 266 へ　●牢の姫　→ 242 へ

●どちらとも決められない　→ 63 へ

138

鏡からぬけると、そこは小さな街。レンガ造りの家が立ち並び、外燈がぼうっと闇に浮かんでいる。こがらしの吹く寒い夜だ。

「マッチは、いかがですか？　マッチは……」

あの声は……!?　遠くに見える小さな人影が近づく。

「あっ！　きみは、赤ずきんじゃないか!?」

「あら、ピットさん」

「なんでこんなところで、マッチなんか売ってるんだ」

「ここは、呪いのマッチ売りの街なの。メデューサに呪いをかけられた者が、ここに送り込まれてくるのよ」

「じゃあ、あの後、またメデューサにつかまったっていうのか。そんなばかな……」

「ねえ、ピットさん。あなたの持っている赤いハートを下さいな。そうすれば呪いが解けて、元の世界にもどれるの」**（赤ずきんにハートをあげるか？　あげてもあげなくてもよい。あげる場合はリストから消す）　→ 267 へ**

139

「コビル、ボクの命をあげるよ。だから、また元気になってくれ！」ボクは、寒さの中でこごえかけているコビルの体に抱きついた。すると、とたんに体は暖か味をとりもどし、ヤツは、ムックリと起き上がった。

「おお、元気になったぞ！　ピット、ピット……！」

だが、ボクは……地面に横たわったままだった。

うおーん、うおーんとほえるようなコビルの泣き声を聞いたような気がした。気がつくと、ボクの体は、どんどん天に向かって上昇していた。

ああ、本当に死んだんだな。

あっ、あれは⁉

真上に見える雲の上にあの老人が立っている。

「よくやったぞ、ピット。おまえは、最後の試練に耐えたのだ！」

「えっ⁉　それでは冒険を続けられるんですね」

「もちろんじゃとも。さあ、鏡のタテをあげよう」**（鏡のタテ入手、チェックリストに記入。金の矢もとりもどす）**

「いよいよ、最後の戦場じゃ。ピット、この鏡に飛び込むんじゃ」

老人は、目の前に浮かぶ鏡を指して言った。

ボクは、決意を新たに、鏡の中へ飛び込んだ。**→374へ**



140

部屋に入るなり、「うわぁ〜、あ、熱い」床から、真っ赤に燃えたぎるマグマのようなものが流れ出してきた。

逃げても逃げても、コイツはボクの足元からにじみ出てくる。**（体力ポイント・マイナス１）**

「ハ、ハ、ハ。思い知ったか、マグーさまの力を。お前がどんなに逃げようと、お前の気配を感じて、変幻自在に現れることができるのだ」

急いで次の部屋に逃げ込もう。東西南北どの扉をあけるか？

●東の扉へ　➜ 65 へ　　**●西の扉へ　➜ 293 へ**

●南の扉へ　➜ 177 へ　　**●北の扉へ　➜ 97 へ**

141

なんということだ!!　メデューサの魔力で入口へワープしてしまった。また入口から、メデューサの所へ突き進んでいかなくてはならない。城塞に到着したところから、やり直し）　**➜ 374 へ**

142

ボクはルンルン気分で、左の道を歩き始めた。

不意に血の気が、スゥ――と引いた。

「サ、サソリだ――!!」

全長30センチぐらいの巨大なヤツだ。

バサ、バサ、バサ、その大きなハサミで草を切り落と

しながら進んでくる。
ん？　サソリは砂漠にいるんじゃないのか!?　こんなところに出るなんて、ルール違反だよ！
逃げるか、やっつけるか？

●逃げる　➡369へ　　**●やっつける　➡215へ**

142

143

歩き出そうとしたとたん、
「いやー、みごと、みごと」そう言って、パチパチと手をたたきながら、ひとりの男が現れた。
「わたしは、戦いの神ヘルメスだ。キミの今の戦いぶりを見ていたよ。なかなか立派なもんだ」
テレちゃうなあ。でも、ちょっとオーバーじゃないか。
「ほうびをあげよう。でも、タダというわけにはいかない。突然だが、クイズ！　な～～るほど・ザ・神話！」
ヘルメスは、クイズ番組のオープニングのように、大きく叫んだ。
「この問題は同時に、メデューサを倒すための情報にもなるぞ。よ～く、聞け。悪魔メデューサを倒すには、いくつかのアイテムが必要だ。しかし、とどめの一撃には、銅の矢と大鎌、どちらが役に立つか？」
ここが運命の分かれ道、慎重に答えなければ。

●大鎌だと答える　➡145へ　　**●銅の矢と答える➡　72へ**



144

それにしても、お腹がへったよお。

うん？　あれは、木の実か？

オレンジ色をした実が、1本の木にたわわになっている。おいしそう、いただきまあす！

いたたたた……。1個まるごと食べたところで、急に腹痛が……！　害のある実だったようだ。**（体力、知力ポイント、ともにマイナス1）**

しばらく地面に寝そべって、回復を待つ。**→216へ**

145

「残念ながら、不正解だ。だが、ガッカリすることはないぞ。特別に残念賞をあげよう」

期待したボクが甘かった。ヘルメスのくれた物は、等身大のヘルメスの肖像画。しかも、サイン入り。

ヘルメスの機嫌をそこねないように、とりあえず、もらっておこう。フー、神への気配りも大変だ。

さて、道が三方向に分かれている。どの道へ進むか？

●右の道へ　→275へ　　**●左の道へ　→251へ**

●中央の道へ　→103へ





146

ドサッ。草の上に身を投げる。ん？　あれは……!?

目の前に、ちっちゃな透明の羽をつけた妖精が現れた。

「きみは……？」

「わたしは、森の妖精よ」と言って、クスクス笑う。光のしずくが落ちてゆくみたいに、まぶしい笑顔だ。

「あなたは、勇者ピットでしょう。いいことを教えてあげるわ。メデューサを倒すには、4つのアイテムが必要なの。そのひとつは、ハデス王が治めている地下の冥府界にあるんですって」

「その4つのアイテムって何だい？」

しかし、そう聞いた時には、妖精は消えていた。**（知力ポイント・プラス1）**再び歩き始める。**→ 340 へ**

147

中は、薄暗くて、周りがよく見えない。

ボッ。不意に青白い火の玉がいくつも出現した。

その光の中に浮かびあがったのは、黒い布をまとい、ふわふわ浮いているしゃれこうべのお化け。

「うわぁ〜、幽霊だ——!!」

「失礼な！　わしは、貧乏神じゃ」

え？　そう言えば、いかにも貧相な顔。同じ神がついても、ほかの神々とはえらい違いだ。

「まさか貧乏神に出会うと、貧乏になってしまうってい



147

うんじゃ……」

「そのとおり。だが、どの程度の貧乏ですむかは、おまえの運の強さ次第じゃ。それ、わしとジャンケンじゃ。せ〜えの、貧乏も、金持ちも、よよいのよい！」

かけ声を合図に、ボクと貧乏神は、パッと手を差し出す。勝負だ！

バトルと同じく、適当なページを開き、ピットのジャンケンマークを決定せよ。

●チョキ、パーが出たら　➜ 277 へ

●グーが出たら　➜ 105 へ

148

ゴー、ゴー、ゴ——

ごつごつした岩の表面が、のっぺりと見えるほど、ものすごいスピードでヤツがころがってくる！

とても逃げられそうにない。戦うしかないのだ!!

大鎌を持っているか？

●持っている　➜ 220 へ　●持っていない　➜ 319 へ

149

飲まず、食わずで、どのぐらい歩き続けただろうか。もう、のどはカラカラ、お腹はペコペコだ。

ドサッ。草の上に身を投げる。このままひからびて、死んでしまうんじゃないだろうか。

149

耳元で草がサワサワ音を立てる。その音に混じって、別の音が聞こえてきた。

サラサラサラ……

ボクは、飛び起きて、音の方向を探る。思った通りだ。そこには、小川が流れていたのだ。

川の水は白くにごっている。それに甘い匂いがする。

ふと見ると、そばに立て札があった。「命の酒」と書かれている。一気に体力回復だ！　ボクは、酒を手ですくい、浴びるように飲んだ。

一息つく頃には、空腹感も、のどのかわきも、すっかりいえていた。**（体力ポイント・プラス２）**　**→278へ**

150

敵の攻撃をまともにくらってしまった。もうダメだ。たち上がれない。ここで死ぬってことは、もう、現実世界へもどれないってことだ。美子ちゃんにバカにされてもいいから、もとの世界へもどりたかった……。

END

151

ああ、なんだか眠くなってくる。だめだ、この声はワナだ！　よおし、声をかき消してやる！

いきなりボクは、ガナリ声で歌を歌いだした。

歌い続けながら、島に上陸！　そこに声の主がいた。



151 美しい女の顔をしているが、両足に鋭いツメを持つ鳥の化け物だ。ヤツは歌うのを止め、必死で耳をふさいでいる。

「やめて、やめて、その音程のない歌を止めて。セイレンの耳がこわれちゃうわ。お願い、この蜜酒をあげるから、さっさと、島から出ていって」

ムカッ。音程がないだって。でも、もらい物しちゃったからいいや。（**蜜酒入手。チェックリストに記入**）

さて、もとの岸にもどるか、反対側の岸へ行くか？

●もどる　→77へ　　●反対側の岸へ　→89へ

---

152 ちょうど、峠にさしかかった時だ。大きな袋をかついだ、ヒゲづらの男が、ボクの前に立ちふさがった。

「オレは、山賊プルトンだ。おまえの持っているアイテムをいただいていくぜ！」

体力ポイント＋武力ポイント＋知力ポイントは？

●26以上　→155へ　　●25以下　→9へ

---

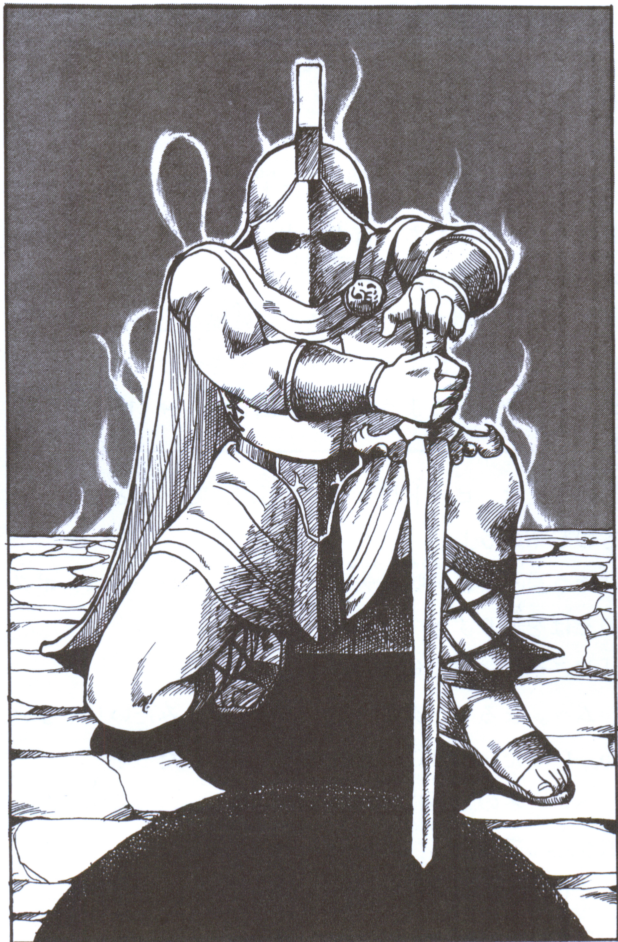
153 兵士が、その長い剣で、地面に円を描く。すると、そこにポッカリと穴が開いた。促されて、穴に入る。

気がつくと、薄闇の中に立っていた。

やっと足元がわかる程度の道を歩き出す。しばらく行くと、矢印の書かれた立て札が目についた。

153

兵士が地面に穴を開けた。穴の中は黒々とした闇が見えるばかり。





153

この矢印の示す方向には、いったい何があるのだろう。

闇の中に、赤い照明が見え始めた。照明の中に霧の流れがはっきりとわかる。そして次第に霧がはれてきた。その中に現れたものは……。

炎の車につながれた男、底に大穴のあいた桶に水をくまされている娘たち、首まで水につかりながら、一滴も水を飲ませてもらえない大男。

ここは、地獄なんだ！　こんな残酷な光景は見るに耐えない。早く、出よう。ボクは、罰を受けている人たちから目をそむけるように、走り出した。➡ 112 へ

154

「おまえは、ピットじゃな。勇者が、美少年とは限らんものじゃのう」

そう言って、興味を失ったように、ヘレーネは、ボクのそばを通りすぎていった。

「どこかに、美少年はおらんかえ」

ムッ。まるでボクが、美少年じゃないみたいじゃないか。いったい、どこに目をつけているんだろ！

ヘレーネの言葉に腹を立てながらも、いつの間にか、眠り込んでいた。

そして、夜明け——

ボクは、再び歩き出す。➡ 79 へ

155

プルトンが、体当たりしてきた。ぶつかる寸前に、サッと身をかわす。

ヤツは、ぶざまにも、勢いあまってころんだ。弓を構え、ヤツの鼻先に、矢の先端を突きつける。

「ワー、許して、この袋の中の物を差しあげますから」

「何が入ってるんだ？」

「このアイテムなんか役に立ちますよ」

ヤツは、商人のようにもみ手をしながら、アイテムをさし出した。それは、ムチとファイアだった。**（ムチとファイアを持っていない人は、ここで入手することが出来る。リストに記入。すでに両方持っている人は、かわりに武力ポイント・プラス2。どちらか一方持っている人は、持っていない方のアイテムをリストに記入し、武力ポイント・プラス1）**

ふうん。もらっておいて損はなさそうだな……。

あっ！　ボクがアイテムに気をとられているスキに、ヤツは袋をかかえて、逃げ出した。

しかし、収穫もあったし、いいだろう。➡ 189 へ

156

もう逃げるしか手はないのか……。

体力ポイント＋知力ポイントは？

● 18 以上　➡ 281 へ　　● 17 以下　➡ 345 へ



157

甘くて苦くてすっぱい。何だ、この妙な味は。

「食べたな」

実を飲み込んだ瞬間、ハデスがニヤリと笑った。

そのとたん、御殿は一瞬にして消え、目の前に大きな鎌を持った死神が現れた。しまった、ワナだったのか！

「おまえは死んだ」ハデスに化けていた死神が言った。

「えっ!?　どういうことだ」

「この実を食べたものは、二度と地上世界にもどることはできない。冥府界の住人、つまり死者となるのだ」

そ、そんな。現実世界どころか、地上世界へももどれないなんて。ショックで、気が遠くなってゆく——。

END

158

扉を開けると、中は、ガランとした白一色の部屋だった。

バタン。入るなり、扉が閉まる。

ん？　鏡だ。

壁のひとつに、だ円形の鏡が埋め込まれている。それは、ボクが、この世界へ入り込むきっかけになった鏡と同じものだった。

鏡をのぞき込む。そのとたん——。

ボクは再び、鏡の中に吸い込まれた。→ 117 へ

159

こいつは、いいぞ！　ガードクリスタルが、ボクの回りに、バリアを作ってくれた。

ヤツの魔術が、稲妻のようにはね返ってゆく！

ナスビ使いは、紫色の汗をたらしながら、やっきになって、呪文をかけ続けている。

ウワー！　突然、ヤツは、後ろにひっくりかえったかと思うと、大きなナスビに変身!?

なんと、はねかえった魔術を自分でくらってしまったのだ！（**知力ポイント・プラス１**）

ドジなヤツ！

下りは、楽勝だった。アッという間にふもとに到着。さて、どこに向かおうか？

●北の平原地帯へ　→ 85 へ　**●南の森へ　→ 303 へ**

●東の丘陵地帯へ　→ 259 へ

160

そ、そんな、せっかく、ここまでたどり着いたのに！

「いいですよ。ボク、あのやさし〜〜い、ヘラのお姉様に、もう一度、判定してもらおっと！　ボクが、ゼウス様の秘密を握っていることを知ったら、きっと――」

「わ〜〜!!　言うな、言うな。だれかに聞かれたらまずい！　わっ、わかった！　特別に合格にしてやる！」

「わ――い！」ボクは、飛びあがって喜んだ。



160

「ピットよ、これからの旅は、今までよりも、もっとつらいものになるぞ。心してゆけよ。それ、勇者の印のペガサスの翼を与えよう」**（ペガサスの翼入手。チェックリストに記入）**

別れ際、ゼウスは言った。

「よく聞け！　この先を行くと、岩山につき当たる。そのふもとには、3つの洞窟が並んでいる。それぞれの中には、ひとつずつ鏡が置かれているが、その中のひとつは、メデューサの神殿へワープできるものだ。だが、別の鏡に入り込んでしまうと……。いや、その先は、言うまい」

そして、ゼウスは、周りの風景に溶け込むように、スッと消えた。**→ 51 へ**

161

ああ、鏡だ！

洞窟の闇の中に、なぜかぽつんと、ひとつの鏡が浮いている。

それは、天井からさす、一筋の光を受けて、キラキラ輝いていた。

吸い寄せられるように、ボクは、鏡に近づいていく。

そして、鏡をのぞいた瞬間、ボクは、その中へ吸い込まれていった。**→ 235 へ**

162

上空は、しゃぼん玉でいっぱいだ。

「誰がこんなことを……」

「オレ様だよ。オレの名はパンドーラ。天空の砦のボスさ」ヤツはそう言うと、パッと姿を消した。

「どこへ消えたんだ」

あたりを見回しても、いない。すると突然、目にブワーッとしゃぼん玉をふきかけられた。

「ハハハ、オレは自由にワープできるのさ」

手ごわい敵だ。ハデスの帽子を使うか？

●使わない（持っていない） **→16へ**

●使う **→198へ**

163

エリヌスが口を大きく開けて、ボクにつかみかかろうとした。その瞬間、銅の矢を放つ。

「やったぁー、ヤツのひとつ目に命中したぞ」

「グウォー、グウォー」

エリヌスは悲鳴を上げながら、その場に倒れた。（**武力ポイント・プラス１**）

この先は進めない。もう一度もどって、赤の扉か、白の扉を選ばなければならない。**→53へ**



164

「ハッハッハッ……」しんと静まりかえった部屋に何物かの笑い声がする。

「だ、だれだ」

あたりを見回すと、死んだはずのメデューサが口を開き、不気味な声を上げている。

「小生意気な小僧め！　私を殺したと思ったのか。バカな奴、私は本物のメデューサではない。メデューサ様がお前ごときに殺されるものか。私はメデューサ様に作られた身代わりなのだ……」

メデューサの生首はそう言うと、息絶えた。なんてことだ。じゃあ、ヤツはいったいどこにいるんだ!?

ボクはまた別の部屋を探し始めた。

目の前に3つの扉が見えた。左、中央、右、このうちのどの扉を開けて進もうか？

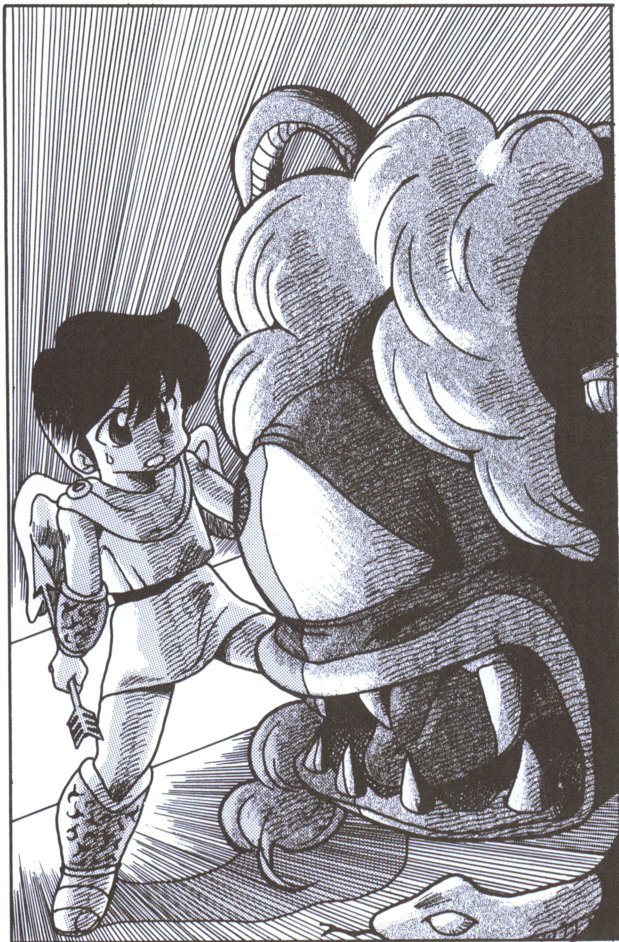
●左の扉へ　➜ 200 へ　　**●中央の扉へ　➜ 363 へ**

●右の扉へ　➜ 125 へ

165

ボクは村人たちに、一生懸命に説明した。

ボクが20世紀の人間であること。あるとき、1冊の本に出会ったことで、パルテナを救うため、フィクションの世界に入り込んでしまったこと。そして、冒険を続けるうちにこの世界に迷い込んでしまったこと……など。



164

「ばかめ……！」死んだはずのメデューサが口を開いた!?



165

しかし、誰も信じようとしない。そして村人のひとりがこう叫んだ。

「何をわけのわからぬことを言っている。こいつはきっと気が狂ってるに違いない。早くつかまえて、病院へつれていくんだ」

村人たちはその声を聞くやいなや、ボクをつかまえようと、取り囲んだ。➜127へ

166

森の奥へ奥へと、どんどん入り込んでいく。

もう、村人たちの追っかけてくる声も聞こえなくなった。しかし、どれほど、進んだのだろうか？　木々が深く茂って、なんだか、背すじがゾォーッとしてくる。

おや、目の前に屋敷が見える。こんな森の中だというのに、やけに大きな屋敷だ。

ギィーッ。扉がひとりでに開いた。そして、中から下男らしき男が現われた。

「道に迷われたのですか。もし良かったら、この屋敷で今晩は泊まっていかれたら……。もうすぐ、日も暮れます。旅のお方では、とてもこの森をひとりで歩いていくことはできますまい。だんな様も、あなた様のような方に泊まって頂ければ、きっとお喜びになりますので……」

お腹もすいたことだし、今夜はここに泊めてもらおう

かな？

●泊めてもらう　→ 129 へ

●断わって、村の方へもどろう　→ 56 へ

167

ボクの首すじに鋭いキバでかみつこうとするヤツの心臓を、銀の矢で射抜く。

ヤッター、命中だ。

ギェーッ!!

吸血鬼は断末魔の声を上げながら、息絶えた。窓から外を見ると、下男が森の中へ逃げていく。

さてと、こんな気味の悪い世界からはオサラバしよう。

どこかに、別世界へ通じる鏡はないか？　よし、この館の中を探してみよう。

●2階を探す　→ 57 へ　●1階を探す　→ 203 へ

●屋根裏を探す　→ 18 へ

168

南へ向かう道は森の中へと続いていた。

「おやっ、こんな森の中を赤いずきんをかぶった小さな女の子が歩いている」

どうしたのかな、ちょっと気になる。話しかけてみようか？

いや、こんな淋しい森の中を歩いているなんておかし



168

いぞ。もしかしたら、魔物が化けているのかもしれない。

●話しかける　→ 391 へ

●かかわらずに無視して、別の方へ進もう　→ 19 へ

169

　ふとんをはぎ取って、おばあさんの指を見てみると、やはり、人間の指だった。

「病人のわたしに、何という乱暴をするんですか」

　おこったおばあさんに追い出されてしまう。**(知力ポイント・マイナス1)** **→ 59 へ**

170

「ホントにこの村に狼なんか出るのかなぁ？　こんなに平和でのどかな村なのに……」

　どうも信じられない。だが、ひとりぼっちの少年をこのまま放っとくことはできない。どうせ、今夜は泊まる所もない。ひと晩だけ、少年の家に泊めてもらおう。

　翌朝、目を覚ますと、隣のベッドに寝ていたはずの少年の姿がどこにも見えない。

「どこへ行ったんだろう？」　**→ 133 へ**





171

表に出ると、丘の向こうから、何十匹もの狼が村に向かってやってくるのが見えた。

ものすごいスピードで大群が迫っている!!

バリバリ、グォーン、グォーン!!

狼たちは村人たちの家を荒し始めた。ボクは家の裏にある大木によじ登って、様子をうかがう。

「ああ、少年の言葉はウソじゃなかったんだ」➡ 22 へ

172

ハートをしまったとたん、少年の苦しみはウソのように消えた。この赤いハートはもしかしたら、童話世界の人間にとっては害を与えるものかもしれない。➡ 264 へ

173

例の袋をあけると、聞こえてきたぞ、あの声が!!

「王様の耳はロバの耳、王様の耳はロバの耳………」

すると、今までニコリともしなかったお姫さまが

「クスッ……」おや、笑ったぞ！

「ウフフフ、フフフ……」

「おお、姫がやっと笑った」

みんな騒ぎ始めた。そのうち、ひとりの家来が、

「そういえば、王様はいつも帽子をかぶって、決して人前では脱がないぞ」と言い始めた。

「ねえ、お父さま。お願いだから、帽子を取って見せて」



173

イヤがる王様。しかし、姫は帽子をムリヤリ取ってしまった。

王様はあわてて耳を押さえたが、間に合わなかった。

「ホ、ホントだ。王様の耳はロバの耳だ!!」

ところで、今、ハートをふたつ持っているか？

●持っている　➜ 378 へ　●持っていない　➜ 209 へ

174

どのくらい旅をしたのだろうか？　気がつくと、ある街に着いた。

大通りを歩いていると、「王様のお通りだ〜！」という声が聞こえてきた。

それまで道を歩いていた人々は大あわてで、いっせいに地面にひれ伏している。

さて、ボクは……。

●同じようにひれ伏して王様が通りすぎるのを待つ

➜ 23 へ

●無視する　➜ 92 へ





175

城に着いた。魔法使いからもらった衣装で貴族に化け、家来たちの目をごまかし、中へ入る。

「しめしめ、うまくいったぞ。ところで、白雪姫はどこだろう？」

舞踏会の人々の中を探してもいない。いったい、いつになったら、白雪姫は現れるんだ。

ボーン、ボーン。あっ、大広間の柱時計が12時の鐘を打っている。

「ヤバイ、12時をすぎると、魔力が消えてしまう」

ボクは大急ぎで身を隠し、今度は召使いに化け、城の中へ潜り込んだ。➜ 265 へ

176

夜もだいぶ深まった。街ゆく人は、ほとんどいない。

もう、マッチ売りも現れないだろう。そう思った矢先、風の音にまじって、か細い声が聞こえてきた。

近づいてみると、そこには……!?

「コビル！　おまえは、コビルじゃないか!!」

あの悪魔コビルが街角に立っていた。その肥満した体には不つり合いな、小さなカゴを持って。

「よう、ピット」ヤツは、元気のない声で言った。

「どうして、おまえがここにいるんだ!?」

「フフ、メデューサ様にばれてしまったのさ。おまえに



176 ガードクリスタルをやってしまったことがね」
「おまえも、呪いが解ければ、元の世界へもどれるのか」
「いや、オレはもう死ぬんだ」
「ばかな！　おまえを助ける方法は、ないのか？」
「オレは、もう悪魔を失業した。今なら、善のパワーで助かるかもしれないが……」
　善のパワーを持つアイテムは、3色のハートと金の矢。この4つのうち、いずれかひとつでも持っているか？

●持っている　→380へ　●持っていない　→212へ

---

177 扉を開けると、その部屋には得体の知れない妖気が漂っていた。どんなに抵抗しようとしても、ものすごい力でボクは部屋の中へ吸い込まれていく。
「あっ、あれは鏡だ！　きっとワナに違いない!!」
　しかし、気づいたときには遅すぎた。体が鏡の中に吸い込まれてしまう。どんなに叫んでも誰も助けてくれない。そしてその中へボクは閉じ込められてしまった。

END

---

178 扉を開けるなり、床に倒れている人の姿が、目に飛び込んできた。両手、両足を縛られている。
　いそいで駆け寄り、縄をといてやる。

178

「ありがとう。ボクは、イカロス。メデューサを倒そうと、この城へやってきたんだが、あっけなくつかまってしまったんだ。キミは、ピットだね。メデューサを倒せるのは、もうキミしかいない。いいかい、よく聞くんだ。メデューサを倒すには、三種の神器を身につけ、ひとつの矢でヤツの心臓を射抜き、もうひとつの矢で、その目を射抜くんだ！」

その時だ。天井から、ひとつの剣が落ちてきて、イカロスの背中にグサリと突き刺さった。

イカロスは、そのまま息絶える。

くそお、なんてことを！　ぐずぐずしていられない。早くメデューサを見つけ出すんだ!!

西と東と南の扉のどれに進むか？

●西の扉へ　➡214へ　**●東の扉へ　➡368へ**

●南の扉へ　➡177へ

179

いけない！　うっかり、ヤツと目を合わせてしまった！

うわあっ！

ヤツの大きなひとつ目から、ギラギラした光が放射され、ボクを包んだ。

ヤツの魔力で身動きできないボクは、足先から徐々に石に変わってゆく。



179 なんてことだ！　長い道のりをここまでやってきたのに。あと一歩というところで、すべてがふいになってしまうなんて！　こんな無念の気持ちを、だれが味わっただろう。

END

---

180 にらむように、ヘビがじっと、こっちを見すえている。

ボクは、催眠術にかかったように、動けない。

ガク、ガク、ガク……。弓矢を持った手がふるえる。

だめだ！　こう、追いつめられたら逃げるのみだ！

ボクは、ヤツに背を向けると、一目散に駆けだした。

神様、オシリをかみつかれたりしませんように。

わあっ！

石につまずいて地面にしたたかひざを打つ。

サッとふり向く。ヤツはいない。ホッ。

気がつくと、風景がまるで変わっていた。ずいぶん遠くまで逃げたもんだ。（**体力ポイント・マイナス1**）

また道が左右に分かれている。

●右の道へ　→349へ　●左の道へ　→336へ

---

181 毒キノコじゃないことを祈って……。

手を伸ばそうとしたとたん、キノコが胞子を振りまき

181

出した。

　ウワーッ！　ゲホッ、ゲホッ。

　こいつは、ただのキノコじゃないぞ!!　**（知力ポイント・マイナス１）　➡337へ**

182

「イェ――イ」

　ボクは、そばにあった弦楽器をエレキギターのようにかかえると、それをかき鳴らし、歌い出した。

　飛んだり、跳ねたり、のけぞったり。アクションも完璧。ノリがいいぜ！

「なんと奇妙な歌じゃ！　しかし愉快じゃわい。みなのもの、歌に合わせて踊ろう」

　バッカスの一声で、全員が踊り出す。なんと、神話世界の森の中に、ディスコができてしまったのだ。

　お祭り好きのバッカスは大喜びして、ボクにほうびをくれた。それは、竪琴の名人オルフェウスからもらったという竪琴だった。**（竪琴入手。チェックリストに記入せよ。知力ポイント・プラス１）**再び歩き始める。**➡251へ**

183

「さあて、『ザ』の箱の中身はなんでしょうか」

　アナウンス口調でヘルメスが言うと、箱が開いた。

「幸せの味、〝ポン・ヌショウ・ユ〟一年分で――す」



183

　なんだ？　ポン・ヌショウ・ユって。
「これは、ポンという、幸福を呼ぶ果実からとれるジュースだ」
「カメごと持ち運ぶのは大変ですから」と口実を言って断わる。せっかく正解したのに、ソンした感じ。
　しばらく行くと、道が三方向に分かれていた。どの道を進むか？

●右の道へ　➜275へ　　●左の道へ　➜251へ
●中央の道へ　➜103へ

184

「これは、ヘルメスからもらった大事なアイテムだ。渡すわけにはいかないよ」
　いくら言っても、ヤツは耳を貸そうとしない。
「ケチ、ケチ、ケチ——！」
　しまいには、地面に座り込んで、だだっ子のように足をばたばたさせる。
　まったく、つき合ってらんないよ。先へ行こう。
　さて、平原をどのように進むか？

●東へ進む　➜252へ　　●西へ進む　➜300へ
●南へ進む　➜276へ

185

ヤツらに向かって、次々とボクの矢が流れてゆく。間断ない矢の雨に、ヤツらも容易に、ボクに近づけない。

1匹落ち、2匹落ち……。しだいにヤツらの数が減ってゆく。

ウン、このリズムは、このタイミングの計り方は、まるで、ファミコンゲームと同じだ！

ボクはいよいよ調子に乗る。

とうとう、全部やっつけたぞ!!

ボクは、男のほうへ、駆け寄った。

周りには、血を吐いた口の化け物の死骸が散乱。皆、ベロリと舌を出している。なんておぞましい姿だろう。

（武力ポイント・プラス1）　→106へ

186

ん？　あれは。

ピンク色の風船が、フワフワ漂っている。

撃ち落としてやれ！　弓を構える。

とたんに、それは、空気が抜けたみたいに、ブーとうなり出した。そして、シュルシュルと弧を描きながら、こっちへ向かってくる。

うわー！　なんだ!?

よく見ると、目と無数のトゲが……。

風船なんてとんでもない、こいつは化け物だ!!



186 目を凝らすと、ツルツルの体に「ミノス」と書いてある。この世界の魔物たちはやたらと自己主張が激しい。

おっと、そんなこと考えている場合ではない。戦いだ。

体力ポイント＋武力ポイントは？

●14以上　→222へ　　●13以下　→40へ

---

187 その時、遠くで何かが光るのが見えた。湖だ、湖の光だ！

その瞬間、ボクの頭の中にも、ヒラメキが起こった。

よおし！　イチかバチかだ!!

ボクは全速力で、湖に向かって走り出した。

湖の大きさが、次第に広がってゆく。もう少しだ。

ついに到着！

そのまま湖に飛び込む。そして、夢中で、沖へと泳いでいく。

ロックマンは、くやしそうに陸でじだんだを踏んでいる。が、やがて、あきらめたのかどこかへ去っていった。

思ったとおりだ。ヤツは水に入れないのだ。あの体では、湖底の石となるのがオチだろう。

フー、一瞬の機転で助かった。安心したとたん、ドッと疲れが押しよせてきた。**（体力ポイント・マイナス2）**

→221へ

188

こいつ、男とは思えない。いっしょに旅に連れていって、根性をたたき直してやろう。

あれ？　今のボクのセリフ!?　われながら、たくましくなったもんだ。

さて、分かれ道だ。右の道を行くか、左の道へ進むか。

●右の道へ　➡ 301 へ　　●左の道へ　➡ 109 へ

189

山を下るうちに、不気味な谷に迷い込んだ。そこには、強烈な悪臭がただよい、動物の死骸やら白骨がいたるところにころがっている。こんなところ、早く脱出しよう。

その時、地面の中からヌッと出た手が、ボクの足首をつかんだ。

ギャ——!!

足元の地面が割れて、ひとりの兵士が現れる。あまりの恐怖で口もきけない。

「わたしは、冥府界の王、ハデス様の使いだ。おまえを冥府界に案内するように言われてきた」

さて、兵士についていくか？

●ついていく　➡ 153 へ　●ついていかない　➡ 44 へ



190 シュン、シュン、シュン

ファイアが、矢のまわりに炎の輪を描きながら、飛んでいった。だが、矢は、敵に当ってはね返る。ダメか！

とその時、ガニュメデのまわりをぐるぐる回っていたファイアが、ヤツの目に火をつけた。とたんに、ガニュメデは、ボッと炎に包まれる。

やがて、炎は青白い色に変わったかと思うと、突然消えた。同時にヤツも後かたもなく消滅。

あとには、ただ暗闇が広がるばかり……。

ヘンなの。ドクロが燃えつきえしまうなんて。

再び歩き始める。道が左右に分かれた所にきた。どちらも、先に何があるのか、まったくわからない状態だ。

●右へ進む　→227へ　●左へ進む　→10へ

---

191 フンギャ——!!

あわれ、ボクは、肥満した悪魔の下敷きに……。

コビルの下には勇者ピットのせんべいが出来あがった。

「せんべいのようにペッタンコの体になったピットは、永遠に冥府界をさ迷うことになったのです」なんて本に書かれてしまうのだろうか。

うう——、なんてみじめなラストなんだ。

END

192

もう、たちうちできないよ——。

ボクは、ヤケクソになって逃げ出した。

後ろをふり返っている余裕はない。無我夢中だった。鎌を背中に突き立てられる自分の姿が脳裏に浮かぶ。

どのくらい走っただろうか。ヤツの気配が、すっかり消えていることに気づいた。

立ち止まって、おそるおそる後ろをふり返ってみる。ヤツはどこにもいない。

奇跡だ！　助かったのか!?

ホッとするあまり、ボクは地面に倒れ込んだ。**（体力ポイント・マイナス2）　➡11へ**

193

もしかしたら、パルテナ様に会えるかも……。以前、湖でパルテナの姿を見たけど、今度は、きっと鏡でご対面だ！

ウキウキしながら、中央の道を進む。

イテ——！　何か固いものにぶつかった。

いつの間に出現したのか、白い扉だけが、ひとつぽつんと闇の中に浮いている。なんだろう。

扉を開けてみるか？　開けずに、また分岐点へ引き返して、別の道を選択してもよい。

●扉を開ける　➡158へ　●分岐点へもどる　➡346へ



194

それだけのことなら簡単、簡単。ボクは、ほら穴のように暗くてせまい道を進みはじめた。しばらくして……。

「もし、もし」と後ろから呼びかける声が。

「だれですか？」前を向いたまま聞く。

「わたしは、あるファミコンソフトメーカーのセールスマンだが……。いや、突然失礼。じつは、わたしは、現実世界からやってきた人間なんだ。フィクション世界にもファミコンをはやらせようと思ってね」

ええっ!? 本当だろうか？

「君も現実世界から来たというじゃないか。どうかね、ひとつわたしの仕事を手伝ってくれんかね。お礼はいくらでもするぞ。今ここに人気ソフトが全部そろっている。みんな君にあげよう。『スーパーマリオブラザーズ』、『リンクの冒険』、『ゴルフＪＡＰＡＮコース』、それから……」

男は、ソフトを数えあげる。

なんだって!? 人気のソフトがみんなボクのものに!? こんなおいしい話はないぞ！ 知力ポイントは？

● 9 以上 → 49 へ　● 8 以下 → 375 へ

195

ふと、セイレンの美しい歌声を思い出した。

そうだ！ ヤツの持っていた蜜酒が、役に立つかもしれない。

195

「ちょっとのどの調子を整えます」といって、蜜酒を飲む。すると、自然にメロディが口をついて出てきた。
「おお！　なんてすばらしい曲だ。」
　アポロンは狂喜して、この曲を竪琴で引き始めた。
「君は、恩人だ。お礼に、これをあげよう」
　と言ってアポロンが差し出したのは、銅の矢。
「わたしは、弓の名人でもあるんだ。この銅の矢は、わたしの力が込められている。きっと、重大な戦いで役に立つだろう」**（銅の矢入手。チェックリストに記入。蜜酒をリストから消す。知力ポイント・プラス１）**
　アポロンに別れを告げる。しばらく行くと、分岐点にさしかかった。右の道へ行くか、左の道へ行くか？　左の道は丘に続いている。

●右の道へ　➜ 85 へ　　**●左の道へ　➜ 259 へ**

196

　ムチを持っていて、体力ポイント＋武力ポイント＋知力ポイントは、30 以上か？

●Ｙｅｓ　**➜ 389 へ**　　●Ｎｏ　**➜ 304 へ**

197

　まさにその時、ヤツのカッと開かれた口は、ボクの頭を飲み込もうとしていた。間一髪！　大鎌をヤツの細長い胴体に向かって水平にふる。切れ口から鮮血がほとばく



197

しる！　と同時にその頭が湖の向こうへ飛んでいった。

残された胴体は、水しぶきをあげて湖の中に倒れた。

た、助かったんだ！

「あっぱれじゃ、あっぱれじゃ！」

いつの間にか、ゼウスが岸に立っていた。

「一部始終を見ておったぞ。ピンチの時のあの反撃力。なかなかのものじゃった。成長したのう」

「いや、それほどでも……」

ボクは、すまして言う。

「ただ前半のダジャレは情けなかったが……」

ズルッ。

「どれ、この辺で、おまえのこれまでの勇者度を判定するとしようか。今の戦いは、すばらしかったが、これはあくまでも冒険全体の総合判断だ。さあ、始めよう」

ゼウスは、ボクの頭に手を置き、目を閉じた。

体力ポイント＋武力ポイント＋知力ポイントが34以上で、なおかつガードクリスタルを持っているか？

●Ｙｅｓ　→285へ　　●Ｎｏ　→120へ

198

ワープして、姿を消すことができるパンドーラ。まともにぶつかっては殺されてしまう。

「よおし、ハデスの帽子でボクも姿を消して、対抗して

198

やる」突然、ボクが姿を消してヤツは、大あわて。このチャンスをのがすものか。

ボクはパンドーラの後ろに回り、口を押さえた。すると、ヤツは自分で吐いたシャボン玉を飲みこみ、苦しみもがいている。

（ハデスの帽子、チェックリストから消す。武力ポイント・プラス１）

メデューサを目指して、再び攻撃開始。さて、窓から中へ入ろうか、地上に降りようか？

●窓から中へ　➜ 53 へ　●地上に降りる　➜ 122 へ

199

クソッ！　あと一歩というところで、狙いがそれてしまった。

ハラリ。

攻撃に熱中して、力を入れすぎたあまり、ハデスの帽子を落とした。

「ま、まずい！」

だんだんボクの姿が見えてきた。そのとき、メデューサが首をグルリとこちらへ向け、ボクに気づいた。

➜ 377 へ



200

ラッキー、鏡だ！

その部屋の壁に、大きな鏡が埋め込まれていた。

この鏡で、本物のメデューサがいる場所へ行けるかもしれないぞ。

ボクはためらわず、鏡に近づいていった。

そして、体が吸い込まれていく。→ 328 へ

201

おそる、おそる、村人たちのそばに近づいて、尋ねる。

「いったい、何をしているんですか？」

「最近、何人もの村人が吸血鬼に襲われているんだ。吸血鬼に殺された人間は、死体になっても吸血鬼としてこの世に甦えってしまう。これ以上、村人の中から吸血鬼による犠牲者を出さないためにも、死体にクイを打ちこんでいるんだよ」（**知力ポイント・プラス１**）→ 108 へ

202

一目散に窓の外へ逃げ出した。そこへちょうど、村人が通りかかった。

村長が「そいつは吸血鬼だ！」と叫びながら追ってくる。

村人は大あわてで、ボクに向かって大きな十字架とニンニクをつき出した。

「吸血鬼め、これで身動きができないだろう」

202

「何をカン違いしてるんだ、ボクは吸血鬼じゃない!!」

どうして、ボクの言葉を信じてくれないんだろう。

そうか、わかったぞ。ボクはこの世界の人間ではないから、この国の鏡に映らないんだな。

しかたない、また、逃げよう。➡287へ

203

まっ白い壁に、全身がすっぽり映る大きな鏡が埋め込まれていた。まるで、鏡の向こうに部屋が続いているかのように、ボクは鏡の中に入っていった。

突然ふわりと体が宙に浮いたかと思うと、次の瞬間、ものすごい勢いで落下。回りには何も見えない。

「ピットよ、おまえは、メデューサのしかけたワナに入り込んでしまったんじゃ。この鏡に入り込むと、時間がもどってしまうんじゃよ。今までの記憶は消されて、また冒険の途中からやり直しじゃ」

老人の声が耳元に響く。いったいどこまでもどされるんだろう。考えているうちに、意識が遠ざかっていった。

(リストの中からアイテムをひとつ消す。体力ポイント・マイナス3、武力ポイント・マイナス3、知力ポイント・マイナス3。アイテムがない人はポイントのマイナスのみ) ➡186へ



204

　そうか、ボクはフィクション世界の人間じゃないから、この世界の鏡には映らないんだ。それがわかっていればあのおじいさんたちを恐がらせずにすんだのに……。これからは気をつけよう。**（知力ポイント・プラス１）**

→ 58 へ

205

「なぜ、私の言葉を無視するのよ!!」

　赤ずきんは急におこり始めた。すると、今までかわいらしかった目が血走り、美しい顔は見る見るうちに化け物のそれに姿を変えていく。

「あっ、メデューサだ。待てよ、こいつもダミーか」

　銀の矢を持っているか？

●持っている　→ 20 へ　　●持っていない　→ 377 へ

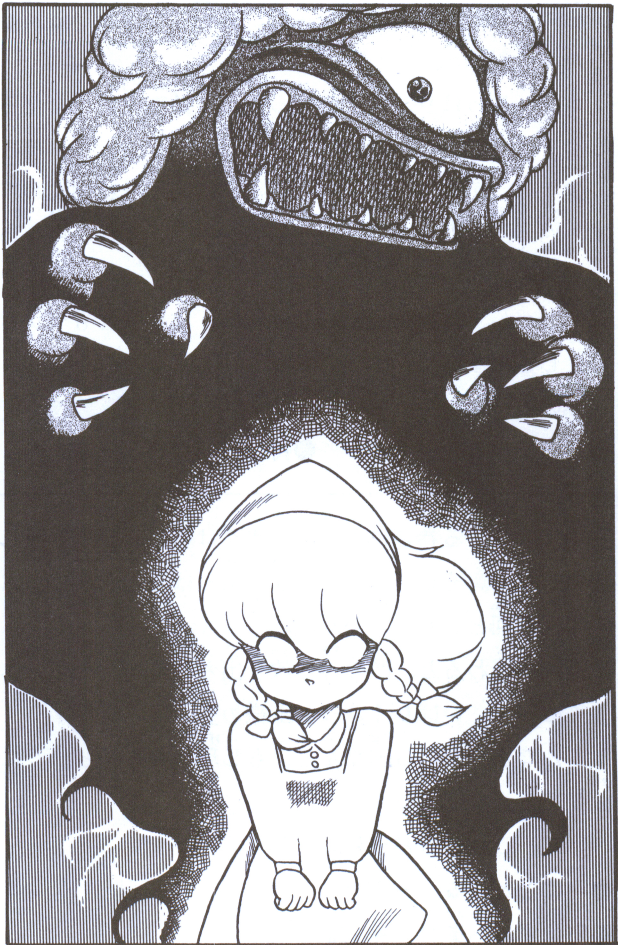
206

「あの丘の向こうから、ホントに狼は現れるんだ。でも、ボクが村人に知らせると、狼たちは消えてしまうんだよ」

　どうも、少年の話は信じられない。しかし、もし、ホントに狼が出るとしたら………。

●村を出よう　→ 21 へ

●もう少し、村にとどまろう　→ 170 へ



205 かわいい赤ずきんの顔は、みるみる化け物に変わっていった！



207

助けにやってきたボクを見て、少年はホッとひと安心したようだ。
「ホラ、やっぱり、ボクの言ったことは本当だっただろう」
少年は、抗議するような目をボクに向けた。相変わらず、何十匹もの狼がボクたちに向かって、うなり声をあげている。
何とかして、狼を退治しなければ、ふたりともヤツらのえじきになってしまう。
赤のハートを持っているか？

●持っている　→289 へ　●持っていない　→264 へ

208

縄でぐるぐる巻きにされて、ボクは城にムリやり連れていかれた。そして、王様の前に引っぱり出されて、ムチで何百回となく、叩かれる。
刑罰が終わると、門の外へ放り出された。
「くそ〜！　いばりくさった王様め」
こんな王様のいる国なんて、もし現代なら、とっくに滅びてるぜ。
さて、これからどうしよう？

●町にとどまる　→61 へ

●町はずれへ進む　→290 へ

209

「やっと姫が笑った。よくやったぞ！　と言いたいところだが、その代わり、お前はわしに恥をかかせた。ほうびはやれんが、命は助けてやる。さっさと、この国から出て行け!!」

あーあ、ほうびがもらえないなんて、ガッカリ。でもしかたないや。ボクは力を落として、トボトボと歩き始めた。おや、また道が分かれているぞ。平坦な道とデコボコ道。どちらへ行こう？

●平坦な道　→392へ　　●デコボコ道　→64へ

210

宿というよりは、ふつうの家だ。ボク以外に客はいない。食事が終わり、宿の家族と一緒に居間でくつろいでいると、宿屋の娘がボクに話しかけてきた。

「ねぇ、私の部屋にすてきな鏡があるの。良かったら、見に来ない？」

娘について行くか？

●Ｙｅｓ　→24へ　　●Ｎｏ　→62へ







211

少年と別れて、第3の街角へ。

「マッチはいらんか？　おい、そこの者、マッチを買っていけ！　なに？　わしのマッチが買えんというのか？　無礼者！　うち首じゃ」

あちゃ。あのわめき声は……

やっぱり。ろばの耳の王様だ。

「おお、ピットか？　弱っておったところじゃ。なにゆえ、わしがマッチを売らねばならんのじゃ。早く助けてくれ。金の矢で呪いを解くのじゃ」

（王様に金の矢をあげるか？　あげても、あげなくてもよい。あげる場合はリストから消す） **→ 292 へ**

212

「もう善のパワーのアイテムが残っていない。おまえを助けられないよ」ボクは、絶望して言った。

その時、耳もとに老人の声が聞こえてきた。

「コビルを助ける方法は、ただひとつある。それは、おまえの命を与えることだ」

ボクを助けてくれたコビルを見殺しにはできない。でも、死んだら何もかもおしまいだ。ああ、ボクは、どうしたらいいんだろう。

それでも命を与えて、コビルを助けるか？

●Ｙｅｓ　**→ 139 へ**　　●Ｎｏ　**→ 27 へ**

213

「うまい!!」

ホンモノの生命の酒だ。これでパワーアップができたぞ。（**体力ポイント・プラス３**）

しっかりと力を蓄えたボクは次の部屋へ向かう。扉は４つあるが、どの方向へ？

●北の扉へ　➡329へ　**●東の扉へ　➡140へ**

●西の扉へ　➡334へ　**●南の扉へ　➡34へ**

214

「うっ、凍えそうだ」

なんと、この部屋は氷の壁で囲まれているのだった。

「こんな所に長居をしていると、ボクは冷凍人間にされてしまう。１秒でも早く、次の部屋へ行こう」

うっ、扉まで凍っているようだぞ。東と南、どちらの扉に体当たりしようか？

●東の扉へ　➡178へ　**●南の扉へ　➡313へ**

215

と、とにかく、矢を飛ばせばいいんだ……。

グイと弓を引く。

放った矢は、とんでもない方向へ飛んで、地面に突き刺さった。でも、要領はつかめたぞ。

続けて、めくらめっぽうに放ちつづける。

まぐれにも、そのうちの１本が、ヤツの背中に命中！



215

　恐る恐る近づく。そして、串刺しになったサソリを持ち上げてみた。
　うわっ。まだ尻尾とハサミが動いている。
　あわてて手を放す。地面に落ちたサソリから、半透明の体液がジワ——と流れ出した。　う——。気持ち悪い。でも、なんだか自信がついたぞ。
（体力、知力ポイント、ともにプラス1）
　しばらく行くと、また道が左右に分かれている。右の道のほうが、左の道より広く、倍の道幅がある。右の太い道へ行くか、左の細い道へ行くか？

●太い道へ　➜ 349 へ　　**●細い道へ　➜ 336 へ**

216

　再び歩き出したとたん、今度は地面に生えているキノコが目についてしまった。カサが大きくて、厚ぼったい。
　どうせまた毒キノコだろう。誘惑しようたって、その手にはのらないよ。
　でも、焼いて食べたらおいしそうだ。食い意地のはっているボクの口から、よだれが出る。それに、腹が減っては戦ができないっていうし……。
　キノコを食べるか？　食べないか？

●食べる　➜ 181 へ　　**●食べない　➜ 274 へ**

217

「これは、魔の、『箱１年分』というものだ」

「？」

「この箱を一度開けたものは、最後の箱を開けるまで、ひたすら開け続けなければならない。ラストまでちょうど、１年かかるのだ」

「そんな、放棄することはできないんですか？」

「だめだ。おきてだ。おまえがなまけないように、ちゃんと見張りをつけておくぞ」

しかたなく、ボクは、箱を開け始めた。あまりのバカバカしさに涙が出る。こんなことで、足止めをくってしまうとは……。

END

218

♪お酒だけが生きがいなの　忘れられない――♫

自分では熱唱したつもりだった。

だが、歌の途中でいきなりバッカスがどなりだす。

「なんじゃ、その暗い歌は！　宴がすっかりしらけてしまったではないか」

怒りが加わって、ますます顔がまっ赤だ。

「とっとと、うせろ！」

ヒ――!!　ボクは逃げるようにその場から立ち去った。

（知力ポイント・マイナス１）　**➜ 340 へ**



219

どうせ勝負にはならないんだ。手を抜こう。

ボクは、ゆっくりと走り始めた。ところが、ヤツは、ビュンと突風のように消えたかと思うと、あっという間にもどってきた。

「おまえが、あんまりノロいから、平原を往復してしまったぞ」

なんだって!? あの地平線の彼方まで行ってもどってきたというのか？ スゴイ速さだ。

「負けた罰だ！ 持ってるアイテムをひとつよこせ！」

有無を言わさず、ヤツは革袋の中からアイテムをぶんどった。**（リストの中から、アイテムをひとつ消す。弓以外のアイテムがなければ、かわりに、武力ポイント・マイナス２）**

突然の不幸を嘆きながら、ボクは先へ進んだ。

さて、平原をどの方向に行こうか？

●東へ進む　➡ 252 へ　　**●西へ進む　➡ 300 へ**

●南へ進む　➡ 276 へ

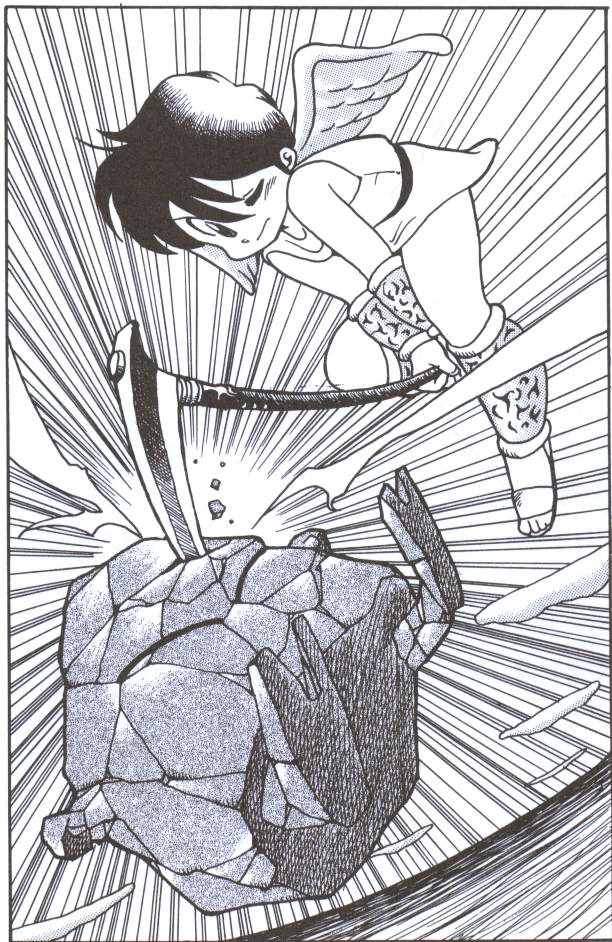
220

こい！ 大鎌で砕いてやる！

ボクは、大鎌をふりかざし、構えた。

ゴ――。岩石が真正面に迫ってくる。

今だ！ ジャ～ンプ!! そして、落下の勢いを利用し、



220

タア〜〜〜!! 大鎌をロックマン目がけて力いっぱいふり降ろす。



220

岩石めがけて、おもいきり大鎌をふり降ろす。

ガッ！　手応えはあった。次の瞬間、岩はまっぷたつに割れたのだ。

さらに岩を細かく打ち砕く。

岩はゲンコツぐらいの大きさの石くずになった。

ふう。汗で服がズブぬれだ。しかし、平原を通りぬける風が、じき乾かしてくれるだろう。**→ 149 へ**

221

平泳ぎをしながら、ゆっくりと岸にもどる。

岸に立って改めて湖を眺めてみた。

思ったより広く、向こう岸がかすんで見えない。

湖は、曇った空の色を映して、なんだか寂し気な表情だ。その湖のまん中に、ポツンとひとつの島が見える。

おや、ちょうどだれかが乗り捨てた小舟がある。あの島に渡ってみようか？

●島に渡ってみる　→ 341 へ　●渡らない　→ 223 へ

222

風船のお化けなんて、敵じゃないな。

弓をかまえ直す。だが、意外にヤツはすばしっこい。

ビュンビュン飛びまわって、狙いが定まらない。

弓じゃだめだ！　ボクは、そばにあった丸太をつかむと、バッターのフォームでかまえた。ヤツもその気にな

って、一直線に丸太めがけて飛んでくる。

パーン！　当たったぞ。ホームランか？　いや、当たった瞬間、ヤツは破裂してしまったのだ。自分から向かってくるなんて、おろかなヤツめ……。

しばらく歩くと、分岐点だ。東と南どちらへ行くか？

●東の道へ　➡149へ　　**●南の道へ　➡278へ**

222

223

さて、山のほうへ行くか、それとも、平原が続くほうへ向かうか？

●平原のほうへ　➡342へ　　**●山のほうへ　➡152へ**

224

「ワ――！　痛いのこわい、痛いのこわい」

そう叫びながら、ヤツは、あっという間にどこかへ逃げていってしまった。

あきれたやつだ。でも、ボクは、必ずこいつをやっつけてやるぞ。

ファイアは、あるか？

●ある　➡385へ　　**●ない　➡78へ**







225

そんなに忘れられないほど、すばらしい味ってあるのだろうか。もしかすると、麻薬のようなものかもしれない。

用心するにこしたことはない。男が実をとりにいっている間に、ボクは、村を出た。

村のはずれで、道が左右に分かれていた。右の道はなだらかな山に、左の道はけわしい山に続いている。

●右の道へ　➡231へ　●左の道へ　➡395へ

226

プルトンととっくみ合いになった。しかし、巨体の盗賊を相手に、勝負になるはずがない。

あっという間に、地面にねじふせられてしまった。

プルトンは、ぼくの革袋をあけると、めぼしいアイテムをふたつ奪っていった。**(チェックリストの中から、アイテムふたつ消す。弓以外のアイテムがひとつしかない人は、そのアイテムを消し、武力ポイント・マイナス1する。全然ない人は、武力ポイント・マイナス3)**

とんだ災難に会ってしまった。気をとり直して進もう。

➡189へ





227

薄暗闇の道が続く。見えるのは霧ばかり。

いったいどこまで進めばいいんだろう。不安がつのってゆく。

不意に、あたりが明るくなった。

あっ、あれは!? →113へ

228

歌声にひきつけられるように、島に上陸。

翼をつけた美しい女の人が、声の主だった。

吸いよせられるように、そばへ行くと、女の人は顔を近づけてきた。そして、いきなりキバをむきだし、ボクののどにかみついてきたのだ。身動きできず、ボクは、されるままになっていた……。

END

229

鎌には鎌で応戦だ！

だが、さすがに死神。攻撃するスキを与えない。

ブン、ブン、ブン、ヤツがふり降ろす鎌がうなる。

よけるのがせいいっぱいだ！

ついに、ヤツの血に飢えた鎌が、ボクの脳天めがけてふり降ろされた。うわ――っ！

ガッキーン！　思わずボクは、大鎌をタテにヤツの鎌を受けとめていた。ヤツの鎌がまっぷたつに割れて床に



229

落ちる。その瞬間、うそのように死神は消えたのだ。辺りに静寂がもどる。

いったい、ヤツは何だったんだろう。不思議に思いながらも、ボクは歩き始めた。 **➜ 11 へ**

230

笑い声の主が話し始めた。

「わしは冥府界を治めているハデス王だ。

ピットよ、冥府界での旅も終わりに近づいた。わしはおまえに、最後の試練を与えよう。この先に、地上世界に続く１本道がある。おまえは、地上世界の入口に着くまでこの道をただ歩き通せばいいんじゃ。ただし、一度も後をふり向かないという条件つきじゃが……。どうじゃ、簡単だろう」ハデスは、笑いながらそう言ったが、急に声の調子を変えて言った。

「しかし、もし、一度でも後をふり向いたら、おまえは、二度と地上世界へ帰れぬぞ。それが冥府界のおきてだ。よく頭に入れておけ」

それだけ言うと、ハデスの声は消えた。

辺りは、以前の薄闇。目の前に１本の道が伸びている。何が待っているかわからないが、前進するだけだ。

ガードクリスタルを持っているか？

●持っている ➜ 84 へ　●持っていない ➜ 194 へ

231

なだらかな山なんてとんでもない。こいつは、魔の山だ！　行けども行けども少しも頂上に近づかない。

やあめたっと！　道端に腰をおろしたとたん、

「ダメ！　根をあげちゃ」目の前に、手の平に乗りそうなほど小さな妖精が立っていた。うわあ、かわいい！

「あのね。ピットさん、いいことを教えてあげる。メデューサを倒すには、銅の剣が必要なの。それは、この山の頂上にいる巨人アトラスが持っているわ。だから、めげずに登ってね」妖精は、小さな目でウィンクした。

「ところで、キミは？」

「山の妖精スナよ」別れ際に彼女が言った。➡118へ

232

「なるべく早く帰ってきてよ」

「もちろん。オレが行けば、アッという間さ」

巨人が天をボクの肩の上に移す。そして、手を離した。

うぐぐ〜〜〜！　お、重い。今にも押しつぶされそうだ。

「まんまと引っかかったな。銅の剣の話なんてウソさ」

巨人はペロリと大きな舌を出して言った。な、なに!?

「これでオレも自由の身さ。その仕事にはうんざりしてたんだ。じゃあな、あばよ！」

そんな!!　これから地獄の苦しみが続くなんて……。

END



233

背中に、大きな羽の生えた人間が空を飛んでいる。

「うほ――い。おいらは、空飛ぶ盗賊プルトンフライだ、ほーい。アイテムをいただいていくぜ！」

空中に浮いたまま、ヤツは、ボクの革袋をしばらく凝視。それから、にわかにヒモを引くまねをした。

すると！　革袋の中から、アイテムが飛び出してゆく。まるで、見えないヒモに引かれるように。

大変だ！　早く防がなければ。

武力ポイントは？

●8以上　→86へ　　●7以下　→14へ

234

まともななぞなぞでは、たちうちできない。よし！

「左手のほうをよ～く見ろ！　そこでいちばん高いのはなんだ？」

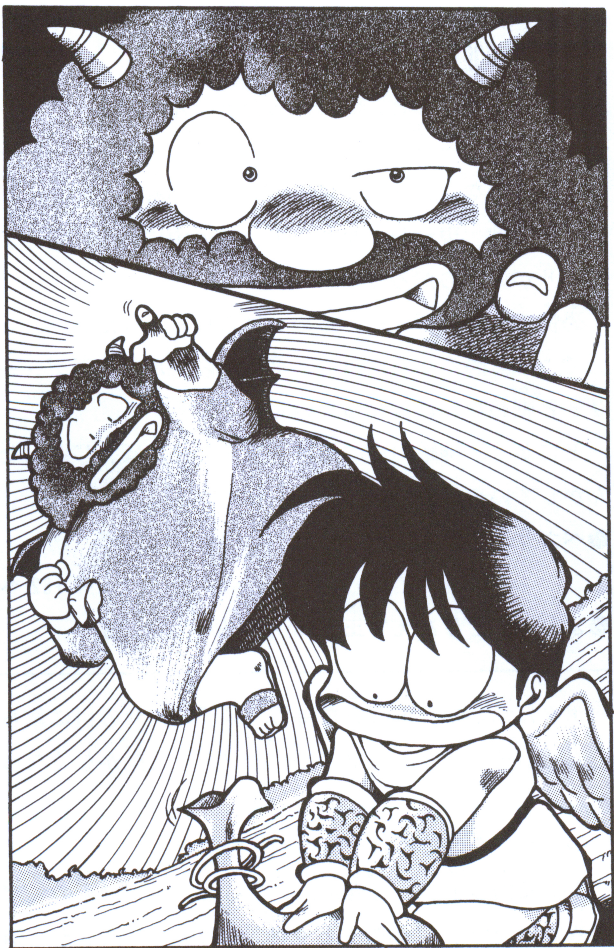
「おまえから見て左手だから、オレから言えば、右だ。そこで、いちばん高いもの……？　向こうに立ってるあの木ぐらいしかないぞ」

「ざ～んねんでした。左手でいちばん高いのは、中指だ」

「な、なるほど。まいった、負けだ。約束通り、ここを通してやろう」

ふう、危なかった。

巨人と別れて、再び歩きだす。



233

ギエー!? ヘンテコなドロボウに、アイテムが盗まれちゃうよ〜〜。



234

丘を越え、しばらく行くと、湖に出た。

ここらで、ひと休みしようか。

水浴びをしようと、湖に入ったとたん！ ➡ 15 へ

235

はるかかなたの雲の上にそびえ立つ神殿が、ボクの目の前に突然、現れた。果たして、この中ににっくきメデューサがいるのだろうか。

恐怖で心臓がギューとしめつけられるようだ。

「で、でも恐ろしくたって、平気だい。ボクはメデューサーと戦わなければならないんだ」

とにかく、神殿の中の様子を探らなければ。じっとなんかしていられない。

●ペガサスの翼を使って、上空から偵察しよう

➡ 162 へ

●よしっ。とりあえず正面から入ろう ➡ 122 へ

236

ボクは急いで、銅の矢を持ち、メデューサの目に撃ち込んだ。そのとたん、ヤツの頭はパタッと動かなくなった。

「やった、今度こそはヤツを倒したぞ!!」

ボクは飛び上がって喜んだ。すると、足元に銀の矢があるではないか。(**銅の矢と交換。銅の矢をリストから消**

236

し、銀の矢を記入せよ）

この銀の矢を武器に、一刻も早く、囚われているパルテナを救出しなければいけない。

ところが………！　➡164へ

237

「そろそろ、お休みの時間のようだね。寝室へ案内させよう」と、主人が言った。

フカフカのベッド、あったかそうな毛布。ボクは満足して眠りについた。

ところが……。廊下から妙な物音が響いてきた。

コツ、コツ、コツ。誰かがこの部屋に近づいてくる。

おやっ、この部屋の前で止まったぞ。

バタン。ボクはうす目をあけて様子をうかがった。

なんと、入ってきたのは黒マントを着たこの家の主人だ。暗闇の中でギラリと、主人の目が光る。

様子がおかしい。

ヤツはボクの毛布をはぎ取ると、いきなりギュッと首をつかんだ。そして牙をむき出し、襲いかかってくる。

そうか、こいつはやっぱり吸血鬼だったんだ。

銀の矢を持っているか？

●Ｙｅｓ　➡167へ　●Ｎｏ　➡364へ



238

赤ずきんがボクにそっとささやく。

「ねえ、変なの、お見舞いのかごを渡すとき、おばあさんの指に鋭いツメが見えたわ」

やっぱり、狼なのか………。

●いや、赤ずきんの言葉なんか無視しよう　→205へ

●おばあさんの正体を確かめよう　→169へ

239

グォーン、狼がボクに飛びかかってきた。

ひょいとボクは別の木に飛び移って、狼の牙から逃げた。

ド―――ン!!

狼は大木の幹に激突。ところで、いったい、少年はどこにいるんだろう？　**→91へ**

240

ボクは商人に化けて、城へ潜り込む。そして、王様の前で、声の入った袋を開いた。

「王様の耳はロバの耳。王様の耳は～～」

「やめんかあ――」王様は声を聞いたとたん、顔をまっ赤にしてどなり声をあげる。

「お前は町中でわしにたてついたヤツだな。一度ならず、二度までも……。許せん！　家来ども、なにをぐずぐずしておる。早く、コイツの首をはねてしまえ!!」

240

なんということだ。ボクは断頭台にムリやり、のぼらされて……。イヤだあ〜、まだ死にたくないのに——！

END

241

ヒューン！

放った矢が勢いよく、巨大アリめがけて飛ぶ。

いいぞ、命中だ！

アリ？

なんと、ヤツは、触覚をのばして矢を頭の前で受けとめたのだ！

なんて器用なヤツだ。思ったより、手強いぞ。

武力ポイント＋体力ポイントは？

● 15 以上　→ 298 へ　　● 14 以下　→ 249 へ

242

ボクは白雪姫の部屋にいるニセの白雪姫に向かって、矢を放った。

すると、姫は、真っ赤な血を流して、床に倒れた。

「あっ、何てことだ。こっちの姫がホンモノだったんだ。ということは……」

牢に入れられていた白雪姫こそ、魔物だったのだ！

あまりのことに、ボーゼンとしていたボクは家来に見つかり、とらえられてしまった。



242

数日後ボクは、王から、打ち首の刑を言い渡された。
「あーあ、魔物の言葉を信じたばかりに……」

END

243

「うーん、まだ修業がたらんのう。このままでは、メデューサと戦っても、すぐやられてしまうだろう。おまえをこの先へ通すわけにはいかん。時間をもどして、また冒険の途中からやり直しじゃ」
そんな。でも、みすみす死にに行くよりましだ。しかたがない。
「それ、足もとを見よ」
老人がそう言うと、そこには、ふたつの水溜りが、できた。ただの水溜りではない。表面が鏡のように、つややかだ。青い空と白い雲が美しく映っている。
「どちらかに飛び込むんじゃ。おまえの能力次第で、もどされる時間と場所が違ってくるじゃろう」
さて、右と左、どちらの水溜りに飛び込むか？

●右へ飛び込む　➜ 386 へ　●左へ飛び込む➜ 26 へ

244

「早まるんじゃない！」
あわててボクも水に飛び込む。そして、少年を岸に引きずりあげた。

244

「どうして死ぬなんてバカなまねをしたんだ？」

「は？」少年はポカンとしている。

「ぼくはこの美しい人に会いにいこうとしただけだよ」

ナルシスというその少年が指差したのは、湖に映っている彼自身の姿だった。こいつ頭がおかしいんだろうか。

ボクは恐る恐る、それはキミなんだよと教えてやった。

すると少年は、ショックを受けるどころか、大喜び。

「ぼくってきれいね。ぼくって、ビューティフルね」

ばかばかしい、つき合ってソンした。

そのまま、ナルシスをほっといて去るか？

●Ｙｅｓ　→ 279 へ　　●Ｎｏ　→ 188 へ

245

「また、化け物だあ——」

「何が化け物だ。オレさまのこの鋭いトゲは芸術品なのだ。ミノスさまのトゲはお前のような少年の血で洗うとより光るのだ」

とミノスがボクにジリジリと近づいてきた。

体力ポイント＋武力ポイント＋知力ポイントはいくつあるか？

● 32 以上　→ 354 へ　　● 31 以下　→ 150 へ



246

ボクは、必死で矢を放ち続けた。矢は、次々と、メデューサの体に突き刺さっていった。

が……!? それは敵に、何のダメージも与えない！

「わたしは、不死身だ！ どんな傷も、たちどころにいえてしまうんだよ。人間のおまえが、わたしにかなうとでも思っているのか！」

そんな！ こんな恐しい怪物を相手に、どうやって戦えと言うのだろう。

三種の神器（鏡の盾、ペガサスの翼、光の矢）と聖なる矢を持っていて、なおかつ、イカロスから、メデューサを倒すための情報を得ているか？

●Ｙｅｓ →270へ　　●Ｎｏ →179へ

247

ピーッ、ピーッ！

なんと、ホーラは体からトゲを放つことができるのだ。

「おっと、危ない」

よし、トゲが抜けた瞬間にその穴めがけて、矢を射ってみよう。

ビシッ！ 命中だ。

ホーラは突然、その色を変えて、ひからびていった。

（武力ポイント・プラス１）

次の部屋に行くことができる扉は北と西と南だけだ。

この3つのうち、ひとつを選ばなければならない。

●北の扉へ　➡ 359 へ　**●西の扉へ　➡ 331 へ**

●南の扉へ　➡ 68 へ

248

どうやら人間だ。直径1メートルはある大きな木に、ひとりの男が鎖でつながれている。だが、あれは!?

男の頭上に、何匹もの空飛ぶ生きものが群れ、男に襲いかかっているのだ。

さらに近づいて、仰天してしまった！　それは、なんと、口だけが浮いているような奇怪なお化けだ!!　ブ厚い唇がパックリ開き、中からダラリと大きな赤い舌がのぞいている。いかにも貪欲そうだ。

男は必死で怪物の攻撃を防いでいるが、やられるのは時間の問題だ。見殺しにはできない！

一本の矢を化物どもに向かって放つ。すると、いっせいにヤツらの注意が、ボクに向いた。

バトルだ！

ルールにしたがい、敵とのジャンケンで、ピット自身の戦闘力を決定せよ。

●勝った　➡ 185 へ　**●負けた　➡ 75 へ**



249

バトルだ！

ルールにしたがって、敵との勝敗を決定せよ。

●**勝った　→298へ**　　●**負けた　→370**

250

陽の光を受けて、水面がキラキラ輝いている。透明な水をながめているだけで、すがすがしい気分だ。

「もし、のう、もし」

後ろから声が……。ふり向くと、ひとりの老婆が地面にペタリと座り込んでいる。

「頼みがあるんじゃがの。わしをおぶって向こう岸までつれていってくれんかのう。水に流されてしまうかもしれん」

顔じゅうシミとシワだらけのみにくい老婆だ。

老婆のたのみを聞いてやるか？

●**聞いてやる　→102へ**　●**無視する　→317へ**

251

ウーン、甘い、いい匂いがしてきた。ウィスキーボンボンのシロップにミルクを混ぜたような……。

匂いのもとは、岩の間から流れ出している白い液体だった。岩のそばに、「命の酒」と書かれた立札がある。

味見してみると、予想通り、甘くてまろやかな味だった。

251

これはいけるぞ。ボクは、命の酒を浴びるように飲んだ。すると、フシギ、フシギ……、体じゅうに力がみなぎってくる。空腹感もなくなった。**（体力ポイント・プラス 2）**

さて、もう少しここで休んでいくか？

●休んでいく　→ 146 へ　●進む　→ 340 へ

252

だだっ広い平原をどのくらい歩き続けただろうか。ようやく目の前に岩山が現れ出した。ふもとまで近づいてみるとぽっかりと大きな岩穴がある。

奥が深そうだ。なんとなく、探険心をそそられる。

中に入ってみるか？

●入ってみる　→ 147 へ

●入らずに、平原を別方向に向かう　→ 300 へ

253

ビュン、ビュン、ビュン！

ボクの矢が飛ぶ。使いなれた今では、弓矢はもう体の一部だ。次々とモイラが海に落ちてゆく。

フ――、全部やっつけたぞ！　ファミコンゲームにくらべれば、チョロイもんだ。**（武力ポイント・プラス 1）**

再び舟を進める。湖は静まり返っている。ボクのオールをこぐ水の音だけが響いていく。



253

ん？　あの声は……!?

ボクは、こぐ手を止めた。フルートの響きのような澄んだ美しい歌声が、聞こえてくる。

なんてきれいな歌声だろう。何も考えず、ただ聞き入っていたいような……。

オルフェウスの竪琴を持っているか？

●持っている　→107へ　●持っていない　→41へ

254

それは、ひとりの少年だった。湖のほとりに立って、じっと水面をみつめている。とても美しい少年だが、何か考え込んでいる様子だ。

「ああ、つらいなあ」

と、大きなため息をつく。なにか、思い悩んでいるのだろうか？　と思っていると、突然、

「ぼく、キミのもとへ行くよ」

と言うなり、少年は湖に飛び込んだ。

ワ――!!　自殺する気だ！　**→244へ**

255

邪悪な花め！　散れ!!

ボクは、ヤツの厚ぼったい花ビラめがけて、ムチをふるった。

しょせん、このムチの強烈な破壊力の前には、ヤツは

255

敵ではなかった。花ビラと葉と茎がバラバラになって、ヤツは地面に散った。（**武力ポイント・プラス1**）

先を急ごう。しばらく行くと平原に出た。 **➜ 342 へ**

256

うわっ！

門をくぐりぬけたところで、いきなりヤリを突きつけられた。そこには、ガイコツの門番が立っていた。

「ピットだな。ハデス様がお待ちかねだ」

門番の後について、御殿の中へ――。

ス、スゴイ！　内装までも金一色。目がチカチカする。金の床なんて、踏みつけるのがもったいない。逆立ちして歩いてもいいほどだ。 **➜ 115 へ**

257

ああ――。闇の中をどこまでもどこまでも落ちてゆく。

「ピットよ、ピットよ」

落下しながら、ボクの物語を書いているあの老人の声が聞こえてきた。

「おまえはメデューサがしかけたワナにかかってしまったんじゃ。この鏡に入り込んでしまうと、時間が過去へもどってしまうんじゃよ。今までの記憶は全部消えて、また物語の最初からやり直しじゃ。やれやれ、おかげでわしの本も白紙じゃ。無駄な仕事をしてしまったわい」



257 また、1から始まるのか。しかし、不幸な結末で終るよりはましだ。考えているうちに次第に意識が遠ざかっていった。**（入手したアイテムをすべて消し、各ポイントを最初の数値にもどして、スタートへもどる）** **→1へ**

---

258 木陰で竪琴をひいているひとりの男を発見！　その男は、いきなり、腹をたて、竪琴を地面にたたきつけた。

「で、できない……。ああ、スランプだ、スランプだ」

ふと、顔をあげた男と目が合う。マ、マズイ！

「おい！　おまえ、こっちへ来い！」

案の定だ。しぶしぶ近寄ってゆく。

「わたしは、音楽の神アポロンだ。神々の宴会の場で発表する曲ができなくて困っているんだ。おまえ、試しに何か曲を作ってみろ！」

え——っ、そんなこと、突然言われたって……。

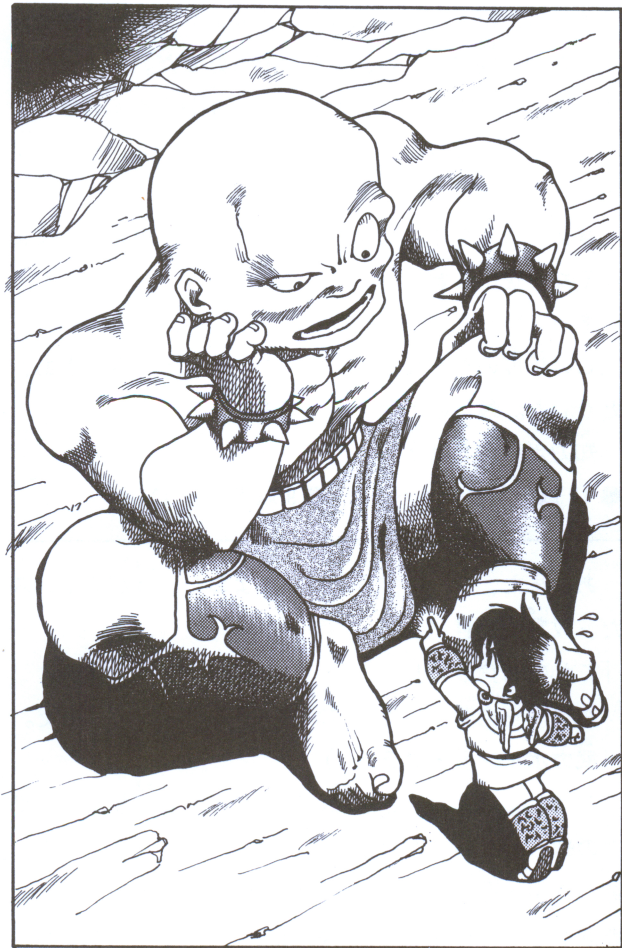
蜜酒を持っているか？

●持っている **→195へ** **●持っていない** **→50へ**

---

259 丘を登りきろうとした時だ。目の前にぬうっと巨人の姿が……。あちゃ、またしてもだ。逃げよう。

方向転換しとたん、「まて」と巨人がボクの首根っこをつかまえる。



259

1問、2問、3問……。うぬぬ。なぞなぞは次々と解かれてゆく。



259

「オレは、巨人ヘソクレスだ。人間のヘソが大好物なんだ。だが、同じくらい、なぞなぞも好きだ。おまえが出す、12のなぞなぞをオレが1問でも解けなかったら、ここを通してやろう。だが、12問全部解けたら、そのヘソをいただくぞ」

ぎえ。大変なことになったぞ。ボクは、思いつくままなぞなぞを出し始めたが……。

あっという間に11問解かれてしまった。

「この程度のなぞなぞなんて、チョロイもんさ。さあ、どうした。最後の1問を出してみろ！」

知力ポイントは？

●10以上　→234へ　　●9以下　→324へ

260

あ、また、ワープする気だな。よおし、今がチャンスだ。攻撃開始!!

「これでも食らえ」

パワーを全開にして、パンドーラをノックアウトだ。

（武力ポイント・プラス1）

どうだ、ボクの強さを思い知ったか。お前なんか、ボクの敵じゃない。次の敵を目がけて、前進だ！　さて、窓から中へ進むか、それとも地上に降りて進むか？

●窓から中へ　→53へ　　●地上に降りる　→122へ

261

「隣の町に住む祖母を訪ねて、旅をしていたのですが、どうも道に迷ってしまったようなんです」

ボクは歩き疲れて、今にも倒れてしまいそうなふりをしながら、こう答えた。

すると、この村の村長らしき老人が、

「それは、それはかわいそうに。では私の家に来て、ゆっくりと体を休めていくといい」

と親切にも申し出てくれた。　→ 327 へ

262

赤ずきんと一緒におばあさんの家へついた。

……さあ、鋭い目の、口が耳まで裂けた恐ろしい狼が出てくるぞ！

——ところが、とんでもない!!

おばあさんはとてもやさしい表情をした人間だった。

知力ポイントは？

● 10 以上　→ 238 へ　　● 9 以下　→ 59 へ

263

少年の話を聞いて、ボクは狼が出るという場所についていった。ところが、いつになっても、狼が出てこない。

「ホントに狼は現れたのかい？」　→ 132 へ



264

ガォー、ガォー!!

牙をむき出して、襲いかかる狼たちを前に、ボクは何もできない。しばらく、木陰に隠れていると、狼たちはあきらめたのか、どこへともなく去っていった。

村は狼たちのしわざで、さんざんに荒らされていた。あちこちから、村人たちのすすり泣く声が聞こえる。しかし、あの少年はどこかに消えていた。

「ああ」ボクはひどい疲れと、狼を倒すことのできなかった悔やしさで、落ち込んでしまった。早くこの村を出よう。**(知力ポイント・マイナス1)**

さあ、東と西に道が分かれている。どちらへ進むか?

●東へ　➡174へ　　**●西へ　➡392へ**

265

召使いに変装して、城の中を歩いていると、白雪姫の部屋があった。人の気配がする。

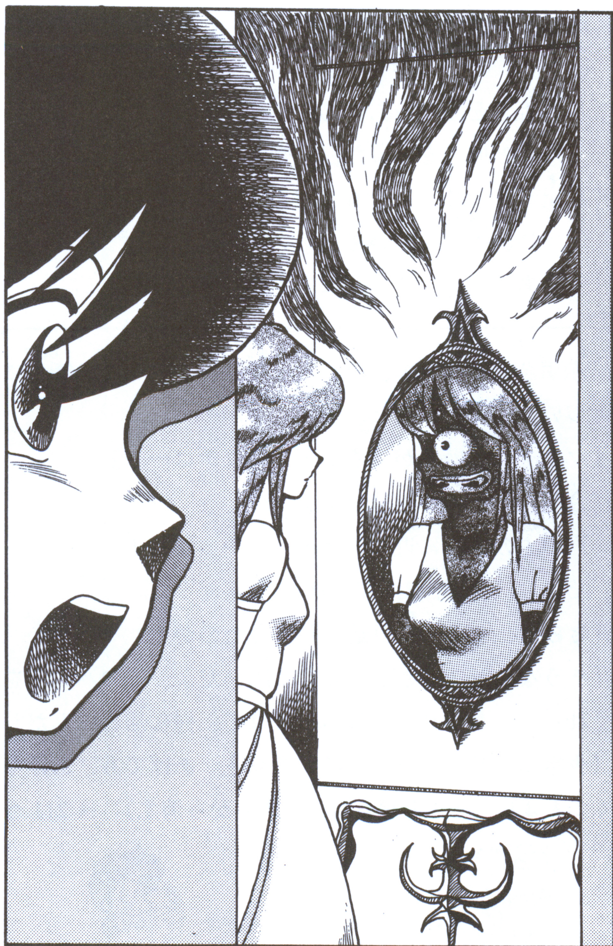
ソーッと扉を開けて、中をのぞく。

「あっ、白雪姫がいるぞ!!　何をしてるんだろう」

じーっとのぞいていると、部屋の中に鏡が見えた。

「な、なんだ、アレは?　化け物だ〜!!」

鏡にうつっていたのは、白雪姫の姿に化けた魔物だった。メデューサなのか、コイツは……!?　**➡5へ**



265

ギョ!? 白雪姫に化けた魔物の姿が鏡に映っている!!



266

グウォ〜

変だぞ。牢の姫がものすごいうなり声をあげ始めた。

「白雪姫、どうしたんだあ〜」

クルッと向きを変えた白雪姫の顔は青くブクブクにふくれ上がり、吐き気をもよおすほど醜くなっていた。

ヤツは、大口を開いて、ボクに突進してくる。

「うわあ〜、助けてくれェー！」 **→ 25 へ**

267

赤ずきんと別れて、再び街を歩き出す。第２の街角に近づいていた。すると、また、声が……。

「マッチは、いかがですか？　マッチは……」

今度は、少年の声だった。

声の主の人影に近づくと……、やっぱり！

それは、狼が出た、あの村の少年だった。

「きみも、ここへ送り込まれてきたのか！」

「そうなんだ、ピットさん。お願いだよ、緑のハートをくれよ。そうすれば、呪いが解けて、村に帰れるんだ」

（少年に、緑のハートをあげるか？　あげても、あげなくてもよい。あげる場合は、リストから消す） **→ 211 へ**





268

そこは泥だらけの部屋。

ベチャ、ベチャとしていて、足がすくわれそうになる。

ようやく、部屋のまん中に行きつく。壁にふたつの扉が見える。北と西、さて、どちらを選ぼう？

●北の扉へ　➡ 381 へ　**●西の扉へ　➡ 325 へ**

269

ここは、下の階から登ってきた2階のスタート地点だ。

さて、どうしよう。下の階へもどらない場合は、北か西か東の扉へ進むしかないが……。

●下の階へ降りる ➡ 311 へ　**●北の扉へ進む ➡ 331 へ**

●西の扉へ進む　➡ 31 へ　**●東の扉へ進む　➡ 68 へ**

270

そうだ！　イカロスの言ったことを試してみよう。

ボクは、ペガサスの翼を背中につけ、左手に鏡の盾を持ち、右手に聖なる矢と光の矢を持った。

翼で空中に飛び上がり、上からヤツを狙う。

よし！　ボクは、メデューサの頭すれすれのところまで近づいた。そして、ヤツの顔を思いっきり蹴とばす。

ズデ――ン！

ヤツは、あお向けにひっくり返った。

今だ!!　最初に、聖なる矢をその心臓に、そして、次に、光の矢をそのひとつ目に、続けて放った。



270

矢はみごとに命中！

ヤツは、この世のものとも思えぬ、すざまじい声を発しながらのけぞって苦しみ出した。すると、突然、ヤツの体が強烈な光に包まれた。まぶしくて、目が開けられないほどだ。そして、まもなく、光は消えた。

光とともに、ヤツも消滅してしまったのか？　そっと、目を開ける。すると、そこには……!? ➡ 400 へ

271

床に這いつくばって、無数に飛んでくる鏡の破片をよける。しかし、そのひとつがボクの足につき刺さった。

「イタッ」

足をかばおうとしたボクの目に破片が刺さる。

「もう、ダメだあ～～～」

目の見えなくなったボクは鏡の破片をよけることができなくなった。破片が心臓につき刺さり、ドクドクと真っ赤な血が流れる。　ボクはその場に倒れ込んでしまった。

END

272

「タナトスめ！」

こいつはもともとメデューサの髪の毛だから、すぐに体にからみついてくる。

270

三種の神器を身につける。見よ、この真の勇者のりりしさを！





272

そうだ！　舌を引っこ抜いてやれ。

ボクは力を振りしぼり、まっ赤な舌を引き抜いた。すると、タナトスは口をガタガタと震わせ始めた。よし、次はあの目だ。

5本の指でヤツの目ん玉を思いっきり、突く。

「グウェ〜、グウェ〜」

タナトスは目からまっ黒な液体を流して溶けていった。

それにしても、いつになったら、メデューサを見つけることができるんだろう。タナトスがいたということは、ヤツのいる場所も近いということか!?

ボクは、東西南北の4つの扉を順にながめた。

どの扉へ進もうか？

●**北の扉へ　→296へ**　　●**南の扉へ　→67へ**

●**東の扉へ　→141へ**　　●**西の扉へ　→178へ**

273

「ええ、会いましたよ」

この人が、女神ヘラだな。

「まあ、どこで？　まさか女といっしょじゃなかったでしょうね」

ゼウスがナンパしていたことを話すか？

●**話す　→70へ**　　●**話さない　→383へ**

274

同じ失敗を繰り返したら、ミジメだ。ここが、ガマンのしどころ。

キノコから、目をそむけて歩き出す。しばらくすると、またキノコが目の前に……。再び、素通り。すると、また……。なんでこんなに生えているんだ!?

ええい、うっとうしい！　キ――ック!!

ボクは、キノコを蹴り上げた。キノコは、空中に舞ったかと思うと、そのまま落下せずに、こっちに向かって一直線！

ウワー!!　キノコの化け物だ。今までのキノコは、みんなこいつが先まわりしていたんだ！　➜ 337 へ

275

ふと立ち止まる。1本の木をじいーっと凝視。

「気のせいかな、あの木の葉の中に目ん玉のようなものが見えるけど……」

バサバサッ。木から何かが飛び立つ。

それは、大きな緑のカエルだった。あいつか、正体は！

「ケロンだよ。ケロケロ。ケロンだよ、ケロケロ」

羽のはえたカエルはそう言いながら、飛びかかってくる！　武器は？

●ファイア　➜ 351 へ　　●ムチ　➜ 299 へ

●弓しかない　➜ 37 へ



276

ひたすら平原を歩き続ける。こう何の障害もないと、かえって不安だ。

ん？　不吉な予感……。ウワ――!!　ふり返ると、ゴーと音を立てながら巨大な岩がこちらへ向かってくる！

かろうじて、身をかわす。岩は、そのままピタリと停止。そして、いきなり、怪物の姿に変わったのだ！

「ノッてるかい？　イエーイ！」

ヤツは、唐突なセリフを吐いた。なんだ、こいつは？

「オレは、ロックマンだ！　イエーイ！」

ヤツは、再び岩となって、ボクを狙ってくる。

天使の羽はあるか？

●ある　**→ 352 へ**　　　●なし　**→ 148 へ**

277

負けた〜〜〜！

ぬふふふ……。

青白い光に照らされたヤツの顔が不気味に笑う。すると革袋の中のアイテムが全部消えてしまった。

こんなことってあんまりだ！**（チェックリストから、アイテムを全部消す。弓以外のアイテムがなければ、武力、知力ポイント、ともにマイナス 2）**

いつ岩穴から出たのか覚えていない。いつの間にか、ボクは再び平原をフラフラ歩いていた。**→ 186 へ**

278

それから、どのくらい立っただろうか。海と見まちがうような、大きな湖に出た。

湖は、曇った空の色を映してなんだか寂し気な表情だ。その湖のまん中に、ポツンとひとつの島が見える。

おや？　ちょうどだれかが乗り捨てた小舟がある。あの島に渡ってみようか？

●渡ってみる　➜ 341 へ　●渡らない　➜ 223 へ

279

「ひとりでやってろ！」

ボクは、サッサとナルシスのもとを去った。

歩き出してから考える。右手の森のほうへ行こうか、左手の平原が続くほうへ進もうか？

●森へ　➜ 109 へ　●平原へ　➜ 342 へ

280

「なかなかかわいいやつじゃ。わらわは気に入った」

ヘレーネは、不気味に、目を光らせながら言った。

「いっしょに、月の世界で楽しく暮そう」

ボクは、金縛りに会ったように、身動きできなくなってしまった。そのまま、月の世界へ連れ去られてしまう。

現実世界どころか、地上へも、もう二度ともどれないのだ……。

END



281

ヤツは、触手をバタバタと動かしながら、体当りしてくる。

あの触手で飛んでいるんだな。それなら！

ボクは、ヤツの触手をムンズとつかむと、1本ずつぶっちぎってやった。

飛べなくなったガニュメデは、ただのドクロとなって地面にころがる。

フン、ざまあみろ。

ヤツを道端へ蹴りやって、先へ進む。➡ 10 へ

282

トロいヤツかと思ったら、なかなかくせ者だ。ムチが届きそうな位置まで接近したかと思うと、スッと後退するのだ。くそ！　ムチが役に立たない。(**武力ポイント・マイナス 1**) ファイアは、持っているか？

●**持っている** **➡ 190 へ**

●**ないので、弓で攻撃** **➡ 46 へ**

283

次第に闇が深くなってゆくようだ。引き返したほうがいいだろうか。

足元の視界は、10 メートル程度。その先は黒々とした闇が続くばかりだ。

ん？　あれは？

283

闇の中でキラリと光るものが……。なんだろう？

行ってみるか？　行かずに分岐点へ引き返して、別の道を選択してもよいが……。

●近づいてみる　→357へ　●引き返す　→346へ

284

音楽の成績は、それほど悪くないんだ。え〜い、何とかなるさ。

流行歌をクラシック風にアレンジ。即興で曲を口ずさむ。アポロンの顔色をうかがいながら……。

「ウーン、なかなか斬新な曲だ。そのままでは、使えないが、ヒントぐらいには、なるかもしれない」

ホッ。この繊細な神の機嫌を損ねなかっただけでも、ラッキーだ。アポロンに別れを告げて、先を急ぐ。しばらくすると、分岐点に出た。道は左右に分かれている。左は、丘に続く道だ。

●右の道へ進む　→85へ　●左の道へ進む　→259へ

285

「文句なしの合格じゃ。おまえを、真の勇者として認めよう。それ、ほうびの品のペガサスの翼を与えるぞ」

目を開けて、ゼウスは言った。

「わーい！　ありがとうございまーす」

真の勇者と言われて、ボクは大喜びした。(**ペガサスの**



285

翼入手。チェックリストに記入）

「だが、これからの旅は、さらに厳しいものだぞ。心して、のぞめよ」制するように、ゼウスは言った。

「よく聞け、この先を行くと、岩山につき当たる。そのふもとには洞窟の入口が3つ並んでいる。それぞれの中には、ひとつずつ鏡が置かれているが、その中のひとつに、メデューサの神殿へワープできるものがある」

「あとふたつの鏡は、何なんです？」

「しらん。わしは、洞窟についてのセリフしか暗記しとらん。予想外の質問には、答えられんな」

なんてこと。これで本当に神々の王か？

あきれているうちに、ゼウスは消えた。➜ 51 へ

286

ふと、気がつくと、見たこともないような村が目の前に広がっている。白いもやが低くたれ込め、つたのからまったレンガ造りの家が点々と見える。

まるで、オカルト映画に出てくるような村だ。

ジャリ道を歩いていると、墓場に出た。

ゾォ〜。なんだか、寒気がしてくる。

おや、人が集まってきた。黒い服に身を包み、さめざめと泣いている。誰か死んだのかな？ ➜ 126 へ



285
「この先にある3つの洞窟が運命の別れ道だ」とゼウスが言った。



287

いったい、どこまでボクを追っかけてくるんだろう。走り疲れたボクは木のしげみに隠れて、村人たちの様子をうかがった。

興奮した村人たちは村長を先頭にして、ボクを必死に探している。

「なんて、しつこい奴らだろう。誤解だと言うのに！」

ボクは村のはずれまでようやく、逃げた。道が森の方と、街の方に分かれている。どちらへ向かうか？

●町へ　→ 56 へ　　　●森へ　→ 166 へ

288

どのくらい旅を続けただろう。ある小さな村に着いた。遠くで、子どもたちが騒いでいるのが見える。

「やーい、大ウソつきめ。お前なんか、オレたちの仲間に入れてやらないよ」

ひとりの少年が、ほかの子どもたちに石を投げられていじめられている。ボクはそばに近づいていき、少年を助けてやった。

「どうして、キミはいじめられていたの？」

「森で狼が出たので、村人たちに教えてあげたのに誰もボクの話を信用しないんだよ」

果たして少年の言葉はホントなんだろうか？

●信じる　→ 263 へ　　　●信じない　→ 21 へ

289

赤のハートを取り出すと、突然、少年は胸を押さえて苦しみ出した。

「ウッ、ウッ、く、くるしい。早く、それをしまってくれ！」

少年はあたりかまわず、のたうち回って苦しみをこらえている。

このハートをしまった方がいいのか？

●Ｙｅｓ　→172へ　　●Ｎｏ　→367へ

290

町はずれを抜け、まっすぐ歩いていくと、森へ続く入口があった。

「イテッ！」

小な穴に足を取られて、ころんでしまった。

まったく、なんでこんな所に穴があるんだ。

おやっ、ヘンだぞ。穴の中から声が聞こえる。

「王様の耳はロバの耳〜〜〜」

こいつはいい！　ボクは穴に袋をあてて、その声をつめ込んだ。フフフ、これから、どうしようか？

●まっすぐ城へ行く　→240へ

●町で一泊する　→333へ



291
娘の部屋に入ると、彼女は大事そうに鏡を抱えてきた。
「これよ。ほら見て、きれいでしょう」
娘はボクの顔の前に鏡を差し出した。しかし、ボクの顔は映らない。
しまった。この世界の者でないボクは映らないんだ。
「キャー、魔物よ。誰か、誰かあ――」
娘の叫び声に宿の主人が銃を抱えてやってきた。
冗談じゃない。こんな所で撃ち殺されてたまるか。
ボクは後ろをふり向きもせず、一目散に逃げ出した。
(体力ポイント・マイナス1)
早くこの国から、脱出しなければ……。ボクは人目を避けるようにして国から出た。**→ 64 へ**

292
第4の街角。すると、今度は、白雪姫というわけだな。
予想通り、真珠を散りばめた純白のドレスに身を包んだ白雪姫が、マッチを売っていた。
「ああ、ピットさん！」ぼくの顔を見ると、白雪姫は、ホッとしたように駆け寄ってきた。
「あたし、こんなところにいるのは、もういや。お願い、もとの世界へ帰して。白いハートをくださいな」**(白雪姫に白いハートをあげるか？　あげても、あげなくてもよい。あげる場合は、リストから消す)**　**→ 176 へ**

293

部屋のまん中に酒ダルがある。
生命の酒だ。いや、敵のワナかもしれない。だけど、ボクはいろんな敵と戦って、もうクタクタだ。
飲むべきか、それとも飲まないでおくべきか？
（前にこの部屋で酒を飲んだ人は、もう飲むことができない。飲まないへ進む）

●飲む　➜ 213 へ　　●飲まない　➜ 316 へ

294

「うわあっ！」
扉を開けたとたん、首根っこをつかまれ、宙に持ちあげられてしまった。続いて床にたたき落とされる。
したたかに体を打ったが、なんとか起き上がる。
「おまえは、何者だ！」
「オレは、ウラノス。神話界の神だったが、今は、メデューサ様につかえている者だ」
裏切り者の神だって？　しかし果たして神を倒すことができるのだろうか？
金の矢を持ち、体力ポイント十武力ポイントは20以上あるか？

●Ｙｅｓ　➜ 344 へ　　●Ｎｏ　➜ 150 へ



295

そこは、闇のように、壁も天井も床もまっ黒に塗られた部屋。まるで、冥府界にもどってしまったようだ。

しばらくじっとたたずんで様子をうかがうが、敵の気配はない。

先へ進もう。さて、扉は、北と東にあるのみ。ほかの方向は、ただの壁だ。どちらの扉へ進むか？

●北の扉へ　➡ 95 へ　　●東の扉へ　➡ 31 へ

296

バン！

勢いよく扉を開ける。すると——。

あっ！　あの後ろ姿は……!?

無数の髪の毛のヘビ、タナトスが、いっせいにこちらに向かってカッと口を開ける。

ついに、メデューサと対面だ!!

「フフフ……、来たな、ピット！」

ヤツは、地獄の底から響いてくるような、世にも不気味な声で言った。

そしてゆっくりと、こちらを振り向く。

鏡のタテを持っているか？

●持っている　➡ 32 へ　●持っていない　➡ 179 へ

297

バサバサバサッ……。

木の枝から、飛び立つ一羽の鳥。

いきなりそれは、ひとりの人間の姿に変わった。

な、なんだ!?

「ふう、あぶなかったわい」

ガッシリした体つきの大男だ。

「何者だ!?」

「わしは、ゼウス。この神話界の神々の王だ」

「すると、今、ヘラ様が探していたのは……」

「そう、わしじゃ。あいつは、恐ろしいかんしゃく持ちなんじゃ。まったくつき合って、おれんよ」

「それで、鳥に姿を変えて、隠れていたんですか」

「そうだ。わしに会ったことは、秘密だぞ。いいな」

再び鳥に変身し、飛び立つゼウス。

「ピットよ、機会があれば、また会おう」

やがて、神は、見えなくなった。

この世界の神は、神らしくないなあ。まるで人間と同じだ。 →36へ







298

矢は、見事に、敵に命中した。敵が倒れる。

「どんなもんだい！」

ボクって、すぐ調子に乗るタイプ。**（武力ポイント・プラス1）　→6へ**

299

生意気だ。カエルのくせに空を飛ぶなんて。ムチで地面にたたき落としてやる！

しかしヤツは、接近してきたかと思うと、サッと上空へよけるのだ！　くそ——！　ムチが届かない。

知力ポイントは？

●5以上　→371へ　　●4以下　→37へ

300

平原をずっと歩き続けると、目の前に、小高い丘が見えてきた。

ウン？　頂上に、何ものかの影が……。

行ってみるか？

●行く　→248へ　　●行かない　→39へ

301

「ピット君、おいしい木の実を集めてきたよ」

「ピット君、服を洗濯してあげよう」

「ピット君、のどがかわいたの？　水をくんできてあげよう」

301

ナルシスは、なかなかマメなやつだ。かいがいしく、ボクの世話をしてくれる。彼のおかげで、体調が良くなったぞ。**（体力ポイント・プラス 1）**

彼と旅をしているうちに、大きな森を抜け、平原へ出た。**→ 342 へ**

302

ビシッ。向かってくるヤツめがけてムチをふるう。

と、ところが……。

「どうした、オレはそんなものじゃ、ビクともしないぜ」

ムチをまともにあびても、ヤツは、全然こたえない。

「フン、もっと強力なムチで、いつもメデューサ様にしごかれ慣れているんだ！」

なるほど、できそこないの強味ってわけだ。

「押しつぶしてやる〜〜〜！」再度、ヤツが体当たりしてきた。これじゃ、弓を構えるヒマもない。

体力ポイント＋知力ポイントは？

● 18 以上　→ 373 へ　　**● 17 以下　→ 191 へ**

303

森へ入ったとたん、プーンと鼻をつく、甘いにおい。

においをたどってゆく。

これだ！　直径50センチほどの小さな泉を発見した。泉の水は、白くにごっている。そばに、「命の酒」と



303

書かれた立て札があった。

ボクは、泉をほさんばかりに、その白い液体を飲み始めた。

ゲプッ。お腹いっぱい。(**体力ポイント・プラス2**)

ひと休みしてから、歩き始める。

泉の場所から、10分も進んだだろうか。

「キン、ポローン、ボーン」

どこからか音のはずれた弦楽器の奇妙な音楽が聞こえてきた。ウー、なんて耳ざわりな音なんだ。

音のする方へ、近づいてみるか？　それとも、避けて、別の方向へ行くか？

●音のする方へ　➡258へ　●別の方向へ　➡85へ

304

稲妻のような光を放ち、ヤツの魔術が飛んでくる！

ビビビビビ〜〜〜！

ウワ——ッ

体に電気が走るような衝撃。

そのショックが消えると、ボクは、大きなナスに変わっていた。今夜は、マーボーナスにでもなって、ヤツの腹の中に収まるのだろうか。

END

305

ガラガラと大音響を立てながら、トーテムが崩れてくる。

「クソッ！　これじゃ、どんなによけたって逃げられないや」

おっと、またボクの体をめがけて、トーテムが襲ってきた。

ペガサスの翼を使うか？

●ペガサスの翼を使う　➜ 390 へ

●ペガサスの翼を使わない　➜ 362 へ

306

ああ、なんて気味悪いところなんだろう。だんだん、日も暮れ始めた。うっすらと、白い霧も立ち込めてきた。

「ブルブル、寒いなあ――」

何だか、体も冷えてきたようだ。

こんなうす気味の悪い村で、野宿なんて、まっぴらだ。どこか、ボクを泊めてくれないかな。

あっ、あそこに灯りが見える。

一軒の家の戸を叩くと、そこは村長の家だった。

「すみません。道に迷ってしまって………。どうか、今夜一晩だけ、ボクを泊めて下さい」

村長は、心よく、ボクを家の中へ入れてくれた。

➜ 327 へ



307

鋭い牙を向けて、狼が襲いかかってきた。

ウー、ウー、ものすごいうなり声だ。

ボクは手あたり次第に石を投げて、狼と戦う。

「痛い！」腕を引っかかれた。

しかし、ボクの投げた石が狼の頭に命中。大苦戦の末に、やっと倒した。**（体力ポイント・マイナス１）**

「確かに、少年の言ったことは本当だった。しかし、少年はどこにいるんだろう？」 **→ 91 へ**

308

城へ向かっていると、いきなり魔法使いが出現。

「舞踏会に行きたいんなら、ハート１個と交換で、舞踏会に必要なものを揃えてやるぞ」どうするべきか？

●断わって、召使いに変装し城に忍び込む **→ 265 へ**

●ＯＫする（ハート１個、チェックリストから消す） **→ 175 へ**

309

扉を開けて次の部屋へ入る。

その部屋は、床も天井も壁もすべて鏡張りだった。しかも、無数のヒビが入っている。ゆがんだボクの姿がいくつも映っていた。

ヒビ割れた鏡の部屋というのは、不気味だ。しかし、敵がいる気配はない。先へ進もう。この部屋からは、西

と南と北に扉がある。しかし、北の部屋はこの城塞の入口に通じる。もどってもしょうがない。西と南の扉のみの選択だ。 309

●西の扉へ　→ 65 へ　　**●南の扉へ　→ 318 へ**

扉をあけると、なぜか、そこに商人がいた。 310

「安いよ、安いよー」

でも、ボクは今、お金をもってないから、何も買えない。しかし、商人はこう言った。

「お金がないんなら、持ってるアイテムと交換してやってもいいんだよ」

交換して入手できるのは光の剣だ。どうしよう？

（交換する場合は、持っているアイテムの中からひとつをチェックリストから消す）

●交換する　→ 52 へ　　**●交換しない　→ 98 へ**

下の部屋へ着地。 311

さて、ここから、北と西と東、どの方向の扉へ進もう。

●北の扉へ　→ 96 へ　　**●西の扉へ　→ 245 へ**

●東の扉へ　→ 268 へ



312

ペガサスの翼を使って穴をくぐり抜けた。2階の部屋へ着地。北と西と東に扉があるが、どの扉へ進むか？

●北の扉へ　➡ 331 へ　　**●西の扉へ　➡ 31 へ**

●東の扉へ　➡ 68 へ

313

♪オレたちゃぁ〜、魔界のスーパーコンビだぞォ〜♬

部屋に入ると、鼓膜をつき破るようなひどい歌声が聞こえてきた。鉄のよろい、かぶとに身を包んだ大男と虫のような小さな化け物がボクを待ち構えている。

♪オレがフィルで、お前はコリンズ。ふたり合わせて、フィル・コリンズだぁ〜♬

なんて、ひょうきんな化け物たちなんだろう……と気を許したスキをついて、鉄のよろいを着たコリンズがボクの後ろに回り、はがいじめにした。そして、うじ虫のようなフィルが首すじにがぶりとかみついた。

「ひきょうだぞォー」

体力ポイント＋知力ポイントはいくつあるか？

● 25 以上　➡ 33 へ　　**● 24 以下　➡ 150 へ**





314

ああ、鏡だ！

洞窟の中に、なぜかぽつんと、ひとつの鏡が浮いている。それは、天井からさす、一筋の光を受けて、キラキラ輝いていた。

吸い寄せられるように、ボクは、鏡に近づいていく。

そして、鏡をのぞいた瞬間、ボクは、その中へ吸い込まれていった。➡117へ

315

「うっ、こ、これは毒だ！」

ひと口飲んで、吐き出したが、急いで解毒剤を飲まなければ、体中に毒が回り、死んでしまう。解毒剤を持っているか？

●持っている ➡330へ　**●持ってない** ➡366へ

316

さあ、困ったぞ。

部屋のまん中に立ったボクはどの扉を選んでいいのか、頭を抱えてしまった。というのも、どの扉にもメデューサの顔が描かれているのだ。

●北の扉へ ➡329へ　**●東の扉へ** ➡140へ

●西の扉へ ➡334へ　**●南の扉へ** ➡34へ



317

　ああいう雰囲気の老婆は、よくおとぎ話に出てくる。きまって妖怪か魔物の役だ。近寄らないほうが無難だろう。老婆に背を向けて、一歩踏みだしたとたん、地面がグニャリとへこんだ——。

　ドテーン!!

　みごと大きな落とし穴の中に落下してしまう。

「お年寄を大切にしないなんて、人間として最低よ」

　見上げると、美しい女の人が、こちらを見ていた。

「わたしはゼウスの娘、女神アテナ。老婆に化けてあなたを試していたのよ。少しその中で、反省していなさい」

　あきれ顔で女神は消えた。きれいな人にしかられると落ち込むなあ。**(知力、体力ポイント、ともにマイナス1)**

　やっとのことで、穴から脱出。この先、どう進もう。

●もう一度森の中へ　➜ 144 へ

●まっすぐに進む　➜ 71 へ

318

　扉を開けたとたん、敵の気配をかぎとる。思った通りだ！　なめくじのお化けが床をはっている。

　ええい、気持ち悪い。塩でもあればまいてやるのに。

「わしは、なめくじではない。ネトラだ！　これでもひとつ目族の由緒ある血を受けついでいるんだぞ」

　ヤツが怒って、飛びかかってきた！

318

体力ポイント＋武力ポイント＋知力ポイントは？

● 30 以上　→ 94 へ　　● 29 以下　→ 150 へ

319

うぬぬ。

相手が岩石とあっては、どの武器も役に立たない！

ヤツの攻撃をよけているだけでは、そのうちやられてしまうだろう。

知力ポイント＋体力ポイントは？

● 16 以上　→ 187 へ　　● 15 以下　→ 150 へ

320

なんとか、ヤツの動きを止めなければ……。

「やーい、肥満体！　そんなに太っていたんじゃ、立派な羽も役に立たないだろう」

「なに!?」ヤツが立ち止まった。しめた。

「バカにするな。飛ぶことぐらい朝めし前だ」

「じゃあ、飛んでみせろよ」

「いいとも！」

意地になったヤツは、必死に羽をバタつかせた。しかし、しっかり地についた足は、まるで浮こうとしない。

しめしめ……。

「浮いたかどうか。よ～く見てやるよ」確かめるふりをして、右足を思いっきり引っぱる。



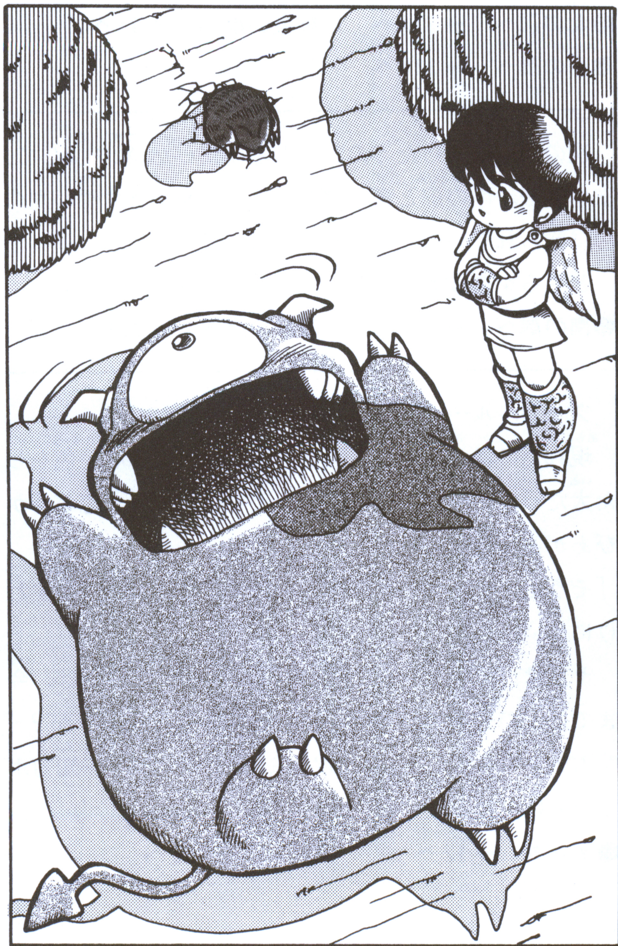
320

スデン！　コビルはあお向けにひっくり返った。
「わ〜〜、起きあがれないよ〜〜」
短い手足をバタつかせて、ヤツはもがきだした。
「そんなに、ブクブク太るからさ」
「お願いだ。助けてくれ！　もう襲ったりしないから。たのむ。このままじゃ、永久に起きあがれないよ〜〜」
ヤツはわめき散らす。助けてやるか？

●Yes　→　396へ　　●No　→　81へ

321

おやっ！　この部屋はボクの家の居間だ。
あっ、家族が泣いているぞ。どうしたんだろう。
「いったい、あの子はどこへ行ってしまったんだ！」
「早く、帰って来てちょうだい」
父さんと母さんが悲しんでいる。ボクは急に家族のもとへ帰りたくなった。
しかし、なんかヘンだぞ。ボクの両親がこんな所にいるわけがない。それにボクがいくら大声で叫んでも、だれもこちらを向かない。
そうか、ここは幻の部屋なんだ。だまされるもんか！
よし、次の部屋に行こう。
扉が北と東と南にある。
どの方向の扉へ進んだらいいだろう？



320

「わ～ん、起きあがれないよ～～～」まったく情けない悪魔だ。



321 ●北の扉へ　→334へ　●東の扉へ　→34へ
●南の扉へ　→338へ

---

322 次の部屋はまったくのがらんどうだった。敵を探して、次へ進む。南の扉と東の扉があるぞ。南はどす黒い血の色に塗られている。東は黄金に輝いている。

どちらを選ぼうか？

●南の扉へ　→334へ　●東の扉へ　→329へ

---

323 グゥガルル……。

現れたのは、ふたつの頭をもつ、炎のような毛色をした犬だった。闇の中に、燃えるようなオレンジ色が浮かびあがる。地獄の番犬というわけか。

「そうだ、ツインベロスだ！　おまえをこの先へ通すわけにはいかん」

ヤツは、テレパシーで話しかけてくる。こついは、今まで以上の強敵のようだ！　どうやって、戦おうか？

ムチを持っていて、なおかつ、武力ポイント＋知力ポイントは、15以上か？

●Ｙｅｓ　→12へ　●Ｎｏ　→83へ

324

これが解かれてしまったら、おしまいだ。祈るような気持で問題を出す。
「海と陸との間にあるものは？」
「簡単だ。『と』の字だ。くだらない問題を出しやがって。さあ、約束を果たしてもらおう」
うわあ、オヘソをとられたら死んじゃうよ〜〜〜。
ヘソクレ〜〜〜！　と叫びながら、ヤツが迫ってくる。
体力ポイントは？

●13 以上　➡ 397 へ　　●12 以下　➡ 150 へ

325

その部屋の天井には、直径2メートルぐらいの大きな穴が開いていた。穴をのぞくと、上にも部屋があるらしいことがわかった。ペガサスの翼を持っているか？

●持っている　➡ 312 へ　　●持っていない　➡ 382 へ

326

ビューン、ビューン！
四方八方から、飛んでくる鏡の破片をよけながら、次の部屋へ進む。東西南北、いったい、どの部屋に行く扉を選んだらいいのか？

●東の扉へ　➡ 348 へ　　●西の扉へ　➡ 3 へ
●南の扉へ　➡ 269 へ　　●北の扉へ　➡ 67 へ



327

　村長の奥さんはとても優しい人だった。

　クタクタに疲れたボクをあわれんで、暖かいスープやいろいろなごちそうを出してくれた。

　これなら、今晩はゆっくりと眠れるな。

　と思ったとたん、村長の奥さんが「キャー」と悲鳴を上げる。

「た、たいへんよ。この子、鏡に映っていないわ！　あなたぁー、この子、吸血鬼よ!!　早くつかまえて」

　えっ、ボクは吸血鬼なんかじゃないのに………。

　どうしよう。逃げた方がいいのか、それとも、ボクが吸血鬼でないと誤解を解くべきか？

●逃げる　→202へ　　●誤解を解く　→128へ

328

　ここは……？　また、最初と同じ森の中だ。

「ピットよ」声とともに、あの老人が現れた。

「早く革袋の中を調べてみなさい。鏡の中を移動している間に、アイテムが落ちてしまったようじゃぞ」

　えっ!?　驚いて、革袋を開けてみる。本当だ！　アイテムが3つしか残っていない。**(アイテムを3つ選んで、リストからそれ以外のアイテムをすべて消す)**

「まあ、3つ残っていただけでも、幸いじゃ。それに、この世界でも、アイテムを入手できる。そう、落胆せんで

328

もいいじゃろう」

「ところで、ここは、どこなんですか？」

「ここは、童話世界じゃ」

「ここにメデューサがいるんですか？」

「いや。だが、多くのフィクション世界の中で、この世界がいちばん、メデューサに荒らされているんじゃ。この世界の冒険を成し遂げられなければ、おまえはメデューサを倒せないだろう。ともかく、成功を祈る」

老人は消えた。なんだか、大変な旅になりそうだぞ。

ボクは、森の道を歩き始めた。**➡ 90 へ**

329

鉄のように重い扉をやっとの思いで押しあけた。と、クラゲの形をした化け物がプカプカと浮いている。

ピシュッ！

突然、そのうちの１匹がボクの顔をかすめるように飛んできた。そして、無数のトゲのついている触手をボクの目に伸ばしながら、こう言った。

「オレは冥府の砦に住むコメトだ。この触手に触れた者は猛毒が体中を回り、もがきながら死んでいくのだ」

バトルだ!!　ルールに従って、敵との勝敗を決定せよ。

●勝った　➡ 66 へ　　**●負けた　➡ 150 へ**



330

ポケットの中にあった解毒剤のビンを取り出し、中の液体をゴクリと飲んだ。なんだかまだ頭がボォーとする。

しかし、どうやら命拾いをしたらしい。**➜ 30 へ**

331

部屋の扉を開けるやいなや、ボクを狙って鏡の破片が無数に飛んでくる。鏡のタテを持っているか？

●ある　➜ 326 へ　　**●ない　➜ 271 へ**

332

化け物の心臓を射抜いたとたん、少年は再び生き返った。「ボ、ボクはいったいどうしたんだろう。頭が何だか重くて気持ちが悪いや」（**武力ポイント・プラス 1**）

少年はきっと森の中で化け物に乗りうつられたんだ。

戦いがすみ、ようやく、ひと心地つく。

ふと足元を見ると、緑のハートが落ちていた。（**緑のハート入手。チェックリストに記入**）　**➜ 21 へ**

333

宿につき、食事を取っていると、宿のおかみさんとお客の話し声が聞こえてきた。

「一度も笑ったことのないお姫さまを笑わせた者には、ほうびが与えられるそうだよ」

へぇー、これはいいことを聞いたぞ。（**知力ポイント・プラス 1**）　**➜ 135 へ**

334

ギィ〜、不気味な音を立てて、扉があいた。すると、部屋の中央で、ふたつの目をギョロつかせている生物がいた。まるで、おもちゃの鼻メガネのようだ。

「ワッハハハ」

化け物があまりにもぶかっこうなので、思わず吹き出してしまった。

「オレさまをバカにしたな。こう見えても、オレはメガネハナーンという、れっきとしたモンスターなのだ。オレさまの力で、お前など、すぐさま、ひねりつぶしてやる！」

今の武力ポイントはいくつか？

● 10以上 → 353へ　　● 9以下 → 150へ

335

クソッ！　キーパーめ、いったい、どこから襲ってくるのか、ボクには見当もつかない。よし、それなら、この矢でヤツの羽を射抜いてやる。ボクは矢を放った。

やった、ヤツは羽を貫かれて、床に落ちてきた。

すかさず踏みつぶしてやる。

キーパーは炎となって消えていった。そして、そのあとには光の矢が残されていた。**(光の矢入手。チェックリストに記入。ただし、一度、この部屋を通った人は二度入手することはできません)**



335

ボクは光の矢を手にして、北、西、南にある扉のうちひとつを選ぶ。

●北の扉へ　➜ 141 へ　**●西の扉へ　➜ 67 へ**

●南の扉へ　➜ 348 へ

336

あれっ？　人がいるぞ。木陰に男女の姿が……。

「ねー、ねー、イオちゃん。天空の喫茶オリンポスで、お茶飲まない？」

なんだ、あのデレッとした顔の男。デカいずう体をくねらせて……。女の人が、いやがっているじゃないか。

ボクに気がつくと、男はあわてて知らんぷり。

「あー、ゴホン。わしは、この神話世界の神々の王、ゼウスだ」おどすようにギロリとにらむ。

「おまえは、ピットだな。まだ旅を始めたばかりだろう。心がけ次第では、いつかおまえを助けてやってもよいぞ。がんばって旅を続けることだ」

そう言って立ち去るゼウス。と思ったら、クルっとふり向く。ワー!!　閻魔みたいにコワい顔！

「さっきおまえが見たことだが、だれにも言ってはならんぞ。とくにわしの妻ヘラにはな。いいな、わかったか」

そう言うとゼウスは、鷲に姿を変え、空へ飛び去った。

（知力ポイント・プラス 1）　➜ 35 へ

337

「シュルム、シュルム、シュルム！」

そう唸りながら、ヤツは、胞子をまき散らす。これだけ主張してるんだから、こいつの名前はシュルムっていうんだろう。

こうなったら、戦うしかない！

武器は、何を使うか。

●ファイア　➡298へ　　●ムチ　➡350へ

●弓しか持っていない　➡99へ

338

扉を開けると、そこはまっ暗な部屋だった。どこからも光が射していない。用心しなければ………。

ボクは手さぐりで進んで行った。これじゃあ、いったい、次の部屋に行くのにどの扉を選んだらいいかわからない。

しばらくすると、目が暗闇になれてきた。どうやら、北と東と南に扉があるようだ。どれに進むべきか？

●北の扉へ　➡321へ　　●東の扉へ　➡310へ

●南の扉へ　➡294へ

339

勢いよく、ボクの周囲を飛び回るタマンボ。ヤツはメデューサによって生命を与えられた化け物だ。

考えている暇はない。今だ、攻撃だ!!



339

タマンボの目に向かって、ボクは体当たりした。
「バカなヤツ。お前なんか、倒してしまえば、ただの玉っころさ」**(武力ポイント・プラス 1)**
しかし、油断するな。次の部屋には新たな敵が待っているのだ。北、東、西の扉、どの扉に向かおうか？

●北の扉へ　➜ 3 へ　**●東の扉へ　➜ 269 へ**

●西の扉へ　➜ 295 へ

340

突然、視界がパーッと広がった、平原に出たのだ。
ん？　あれは？
はるか向こうに点のような人影が見える。と思うまに、見る見るそれは大きくなって、目の前に巨人が現れた。
ウワーッ、何だ、こいつは!?
「オレさまは、巨人キクロペだ。この平原は、オレさまのなわばりだ。ここを通りたいのなら、オレさまと走りくらべをせねばならん」
ジョーダン、こんな巨人に勝てっこない。引き返そう。
「こら、逃げるな！　オレさまに見つかったら、勝負を避けることはできんぞ」
しかたがない。とりあえず、勝負するしかなさそうだ。
天使の羽を持っているか？

●持っている　➜ 104 へ　**●持っていない　➜ 219 へ**

341

舟をこいで、島に向かう。

あっ！　あれは何だ!?

ヒトデの群れが、空を飛んでくる。あいつらも敵か!?

ヤツらは、舟の上空で止まると、いっせいに、青い液を口から吐き出した。

その液は、舟底に、3つの文字を書く。「モイラ」

う〜ん、芸の細かいヤツらだ。

バトルだ！　ルールにしたがい、敵とのジャンケンで、ピット自身の戦闘力を決定せよ。

●勝った　→253へ　　●負けた　→76へ

342

日が暮れはじめた。空には、大きな三日月。

れれっ？

スーッと三日月が、平原へ落ちてきた。よく見ると、ひとりの女の人が、腰かけている。

月が平原のすれすれのところまでくると、ポンと、その人が飛び降りた。そして、こちらに近づいてくる。月のように、ぼうっとかすかな光に包まれながら。

「わらわは、月の女神ヘレーネじゃ」

妖し気な美しさをたたえ、女の人が言った。

ナルシスを連れているか？

●Yes　→110へ　　●No　→43へ



343

扉をあけると、いきなり、ビョーンと化け物が飛びかかってきた。スルメのお化けだ。

「オレ様は、カイメルースだ。お前など、この自由自在に動く足で絞め殺してやる!!」

バトルだ！　ルールに従って、敵との勝敗を決定せよ。

●勝った　➡ 347 へ　　●負けた　➡ 150 へ

344

「今度は、首をひとひねりだ！」

うお——っと怪物のようにうなりながら、ヤツが迫ってくる。ボクは、せまい部屋の中をバタバタ逃げまわる。

だめでもともとだ！　ボクは、弓矢をかまえた。

祈るような思いで、矢を放つ。

矢は、ヤツの心臓に命中！　その瞬間、ヤツはドサリと床に倒れた。

やった！

この間に逃げよう。そう思ったとき、足元に1本の矢が落ちているのを発見した。ふつうの矢の2倍はある太い矢だ。

もらっていこう。**(聖なる矢入手。チェックリストに記入。ただし、前にこの部屋を通った人は入手できません)**

さあ、脱出だ！　北と東のどちらの扉へ進むか？

●北の扉へ　➡ 338 へ　　●東の扉へ　➡ 29 へ

345

逃げよう。

ボクは、全速力で駆け出した。ところが、亡霊のようにヤツは、どこまでもどこまでもついてくる。

ひぇ〜〜〜、助けてぇ〜〜〜。

「え〜い、だらしないやつめ」

目の前に、ひとりの兵士が現れた。ボクを冥府界へ導いたあの兵士だ。助かった！

「これしきの敵で音をあげていては、この冥府界での冒険を成し遂げることはできないぞ」

兵士は、ガニュメデをわしづかみにすると、その触手をむしりとった。

「こいつは、触手を失うと、動けなくなってしまうんだ」

なるほど。感心しているうちに、兵士は、

「もう、二度と助けないぞ」

と言い捨てて消えた。**（武力、知力ポイント、ともにマイナス 1）　➜ 10 へ**

346

分岐点だ。目の前で道が三方向に分かれているが、そのうち二方向には、立て札が立っている。

左の道の立て札には、「地上世界へ」、中央の道の立て札には、「鏡の世界へ」と書かれている。

右には何もない。



346

さて、どの道へ進むか？

●**左の道へ　→ 283 へ**　　●**中央の道へ　→ 193 へ**

●**右の道へ　→ 116 へ**

347

カイメルースの脳天にパンチをくらわせる。

グニャ、グニャ！

カイメルースは頭を押さえながら倒れた。

よし、先へ進もう。この部屋からは南と西と東へ続く扉がある。しかし、東へ行くと入口にもどってしまうのだ。前進あるのみ。南と西だけしか選べないぞ。

●**南の扉へ　→ 65 へ**　　●**西の扉へ　→ 97 へ**

348

「こんなところにサボテンがあるぞ」

「ハハハ、私はサボテンではない。ホーラだ。このトゲで、お前の体を八つ裂きにしてくれるわ」

バトルだ！　ルールに従って、敵との勝敗を決定せよ。

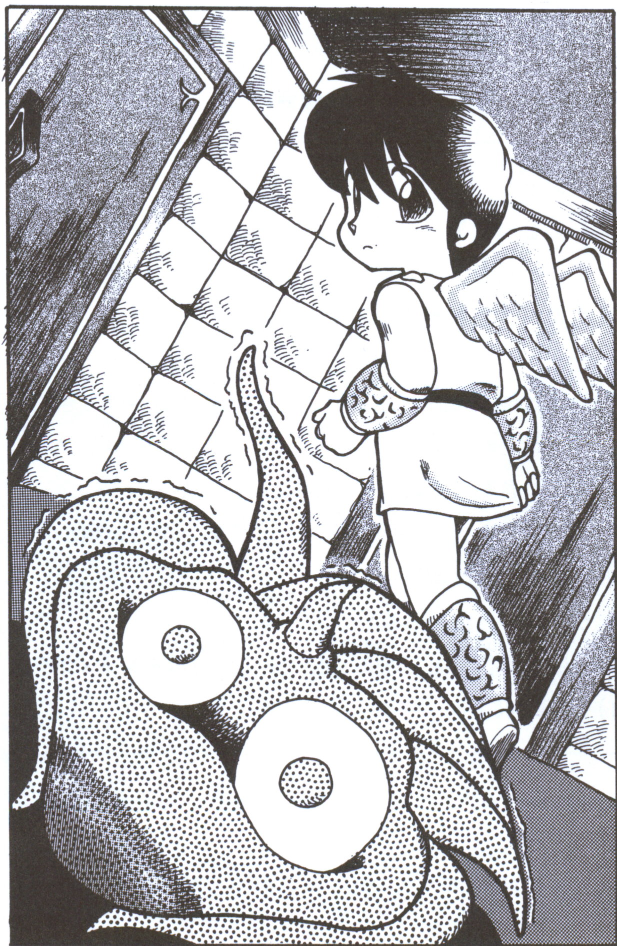
●**勝った　→ 247 へ**　　●**負けた　→ 150 へ**

349

突然、前方から走ってきた女の人に呼びとめられた。

「ねえ、ちょっとあなた！　わたしの夫のゼウスを見なかった？」

うわあ。目をつり上げて、コワ〜イ顔。



347
うぐぐ。カイメルースは頭を押さえながら倒れた。ザマアミロー！



349

なんだか、しかられているみたいな気分だ。
ゼウスに会っているか？

●会っている　→273へ　●会っていない　→101へ

350

ビシッ！
ムチをふり降ろした。たったひとふりで、敵は四散！
すごい威力のムチだ。これがあれば、鬼に金棒だぞ。

（武力ポイント・プラス1）　→6へ

351

ヤツは地上に降り、ジャンプして飛びかかってきた。
が、ヤツがボクに飛びつくより、ボクの矢がヤツの丸い腹につき刺さるほうが一瞬、早かった。
ドサッ。ヤツは地面に落ちた。破裂した白い腹から緑の血がドクドク流れ出す。
うぇ——。気持ち悪い。早く先へ進もう。
しばらく行くと、平原に出た。**（武力ポイント・プラス1）　→300へ**

352

こんな妙なやつ、相手にしていられない。逃げるにかぎる！
ビュン!!　ボクは、天使の羽を使って、はやてのように平原を駆け抜けた。

352

どのくらい進んだのだろう？　着いたところは、木がまばらに生えている平地だった。　**→ 186 へ**

353

「バーン！」

メガネハナーンに真正面から、体当たり。ヤツは床に倒れて動けなくなった。ヤツの体を押さえつけて、ふたつの目をつぶす。

目の見えなくなったメガネハナーンは自分から壁に突進して倒れていった。**（武力ポイント・プラス 1）**

「フン、口ほどにもないヤツだな」

ボクは部屋のまん中に立ち、次の扉を選んだ。

●北の扉へ　→ 322 へ

●東の扉へ　→ 293 へ

●南の扉へ　→ 321 へ

354

ボクはミノスの牙に向けて、石を投げた。

「バキッ！」

命中！　牙がなけりゃ、あんなの恐くない。

ボクはジャンプして、ヤツの脳天をキックした。そして、とどめにパンチを浴びせた。ミノスは脳天から、血しぶきをあげて、グッタリとなった。**（武力ポイント・プラス 1）**

次の部屋は北と東と西だ。さて、どの扉を選ぶべきだ



354

ろうか？

●北の扉へ　➜ 358 へ　　●東の扉へ　➜ 325 へ
●西の扉へ　➜ 29 へ

355

「あ——、ショックだわ。あたしの歌声より美しい音色があるなんて。セイレンちゃん、落ち込こんじゃう」

島には、鳥の魔物が泣きわめいていた。美しい女の顔をしているが、両手のかわりに翼が生え、両足には鋭いツメが光っている。こいつが声の主か！

ボクに気がつくと、魔物は、ボクの持っていた竪琴に鋭い視線を投げて言った。

「お願い！　その竪琴をちょうだい。あたし、その竪琴で、もっと歌がうまくなるように練習するわ」

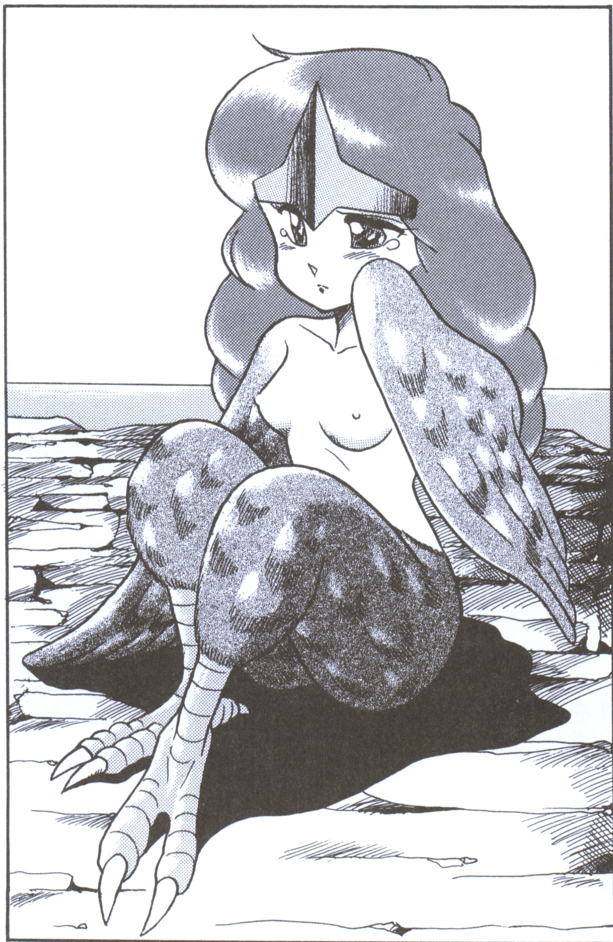
なんて立ち直りが早いんだ。あ然としている間にヤツは、竪琴をひったくっていった。

気がつくとひとつのビンを持たされている。中に蜜のようなものが入っていた。竪琴のかわりにセイレンがくれたんだろう。**(蜜酒入手。チェックリストに記入せよ。竪琴をリストから消す)**

さて霧も晴れてきた。今のうちに島を出よう。

もとの岸にもどるか、それとも反対側の岸に向かうか。

●もどる　➜ 77 へ　　●反対側の岸へ　➜ 89 へ



355

島では、セイレンという美しい鳥の魔物が泣きわめいていた。



356

なんて奇妙なヤツなんだ。

霧の向こうから現れたのは、ずんぐりむっくりしたひとつ目の怪物だった。どこを見ているのかわからないような大きな目。だらしなく開かれた口。

ヤツを観察しているうちに、怪物は、ボクのまん前に迫った。相手の出方をうかがうように、しばらく対峙。

「わっ。おまえはだれだ!?」

驚いたように怪物が言った。こいつ、今までボクに気づいていなかったのか!?　拍子抜けするぜ。

「ボクは、勇者ピットだ」勇者を強調して、ボクは言う。

「オレは、悪魔コビルだ」相手も悪魔を強調して言った。

プッ。ボクと怪物は、お互いに吹き出した。

「悪魔だって？」

「勇者だって？」

相手の言葉を聞いて、今度はお互いにムッとする。

「フン、ヒヨッ子が……。まだお尻にカラがついてるぜ」

「そっちこそまぬけ面しやがって、百貫デブ！」

「気にしていることを、よくも！　オレが悪魔だってことを証明してやる！」

対決だ！　何で戦うか？

●ムチ　→ 302 へ　　　●弓　→ 45 へ

357

鏡だ！

空中にぽつんと、だ円形の鏡が浮いているのだ。

どこからも光を受けていないのに、なぜかキラキラ輝いている。

恐る恐る鏡をのぞき込む。

あ――っ！

体が吸い込まれてゆくのがわかった。風が頭のてっぺんから、足元のほうへヒュウと流れてゆく。 →257へ

358

扉をあけると、部屋の片隅に看護婦の姿をした女の人が捕えられていた。鎖でつながれた足が、痛々しい。

「わたしはおとぎ世界の病院に勤めるナースです。メデューサのために薬を届けにきたら、そのままとらえられてしまって……」

ボクはナースをつないでいる鎖をはずそうとした。

「無理よ、今のあなたの力では……。私のことはいいから、早く先へ進んで。そうだわ、もしものときのために、この解毒剤をあげるわ」

ナースはそう言って、ボクに解毒剤の入ったビンをくれた。**（解毒剤入手。前にこの部屋を通ったことがある人は入手できません）**

ナースのことは心配だがボクには使命がある。４つの



358

扉のうち、ひとつを選び、前進しなければならない。

●東の扉へ　➜96へ　　●西の扉へ　➜310へ
●南の扉へ　➜245へ　　●北の扉へ　➜177へ

359

扉をあけると、天井からこうもりのような化け物が襲いかかってきた。素早くよけたが、ヤツは羽根をパタつかせながら、ボクの顔の回りをグルグルと回る。
「お前は何者なんだ？」
「オレ様か、オレ様は、キーパーだ」
ガブリ。ヤツはボクの耳にかみついてきた。手で払いのけても、あきらめずに攻撃してくる。
体力ポイント＋武力ポイントはいくつか？

● 25以上　➜335へ　　● 24以下　➜150へ

360

無理難題だ。この気むずかしい神の前で、曲を作れなんて。ボクって、プレッシャーに弱いんだ。ヤケクソになって人気歌手のヒット曲をがなり立てる。
「わーっ、何だ、そのセンスの欠けらもない妙な曲は！わたしの繊細な神経が破壊されてしまう！」
追いたてられて、しかたなく歩き出す。分岐点に出た。道は左右に分かれている。左は丘に続く道だ。

●右の道へ進む　➜85へ　●左の道へ進む　➜259へ

361

「おまえにはまだ、勇者の印の、ペガサスの翼を与えることはできん。もう少し、旅を続けて修業を積め！」

ガーン！　ショックを受けて、トボトボ歩き出す。

（知力ポイント・マイナス１）

いつの間にか、ボクは、ひとつの洞窟の入口に立っていた。そして何気なく、その中へ入っていく。 **→121へ**

362

クソッ!!

「次から次にトーテムが天井から、崩れ落ちてくるぞ」

力の限りを振りしぼって、ボクはトーテムと戦った。しかし、あっという間にトーテムの下敷きに。

「ウッ、苦しい――」

もうダメだ！　そう思った瞬間、ボクの意識は完全に途絶えてしまったのだ。

END

363

見つけたぞ、鏡だ！

その部屋の床に、四角い鏡が埋め込まれていた。この鏡が、本物のメデューサのいる世界に通じているのかもしれない。

勇んで、その鏡に飛び込んだ。 **→55へ**



364

ウッ、なんて強い力だ。吸血鬼はボクの頭をガッチリつかんで離さない。そして、ギラつく目でボクの目を見すえた。だんだん、気が遠くなってくる。

「やめてくれぇ――」

ヤツはボクの首にツメを立て、牙を向けてきた。

「うっ！」

ついにヤツの牙がボクの首にかみついた。

意識がうすれて、目の前がかすんでくる。

これでボクも吸血鬼のエジキだ。もう、二度と人間にはもどれない。もし、生き返っても、ボクは人間の生き血を求めてさまよう吸血鬼なのか……。

END

365

「フン、ボクはそんな作り話なんか、聞いている時間はないんだ」

もう、これ以上、こんなウソつき少年につき合ってられない。少年に別れを告げてしばらく行くと、上り坂と下り坂があった。どちらに進むか？

●上り坂へ　➡174へ　　●下り坂へ　➡392へ

366

「くっ、苦しい!!」

毒が体中に回り始めた。ボクの体は激しくケイレンし、もう、意識がはっきりしない。あー、だんだん目の前が暗くなってきた。

END

367

「苦しい、苦しい」とうめきながら、少年は息絶えてしまった。不思議なことに、狼たちも次々とアワとなり、姿を消していく。

ボクはわけがわからず、ぼんやりと立っていた。

ところが、突然、少年の体がグチャ、グチャと気味の悪い音を立てて変形し始めた。そして、なんと、少年の体から化け物が出現!! →134へ

368

扉を開けるなり、タナトスが首に巻きついてくる。

「ウァー、首が、苦しい〜〜」

体力ポイント＋武力ポイント＋知力ポイントは？

●34以上　→272へ　　●33以下　→150へ

369

幸い、草切りサソリのスピードは、ノロい。

逃げよう。

ここまでくれば、だいじょうぶだろう。



369

立ち止まってみて驚いた。サソリのいた場所から、ずいぶん遠ざかっている。
（知力、体力ポイント、ともにマイナス１）
夢中で走っていたんだな。

あっ、だれか、こっちへ走ってくるぞ。 **→ 349 へ**

370

弓はろくすっぽ命中しない。

やっぱりダメだ！　逃げよう。

でも、敵はしつこく追ってくる。わ〰〰ん、助けて〰〰。

そう叫びながら、そこらじゅうをかけまわる。

「こ、こら、そう泣きわめくんじゃない。みっともない」

気がつくと、目の前にひとりの男が立っていた。

「化け物は、もうわたしがやっつけたよ」

見ると、矢に射抜かれた死骸がころがっている。

「どうもありがとうございました。ところで、あなたは」

「わたしは、戦いの神ヘルメスだ。おまえはピットだろう？　まったく世話のやける勇者だ。これでは先が思いやられる」

やれ、やれ、といいながらヘルメスは消えた。

うっ、われながら、情けない。**（体力、武力、知力ポイント、ともにマイナス１）**

ああ、疲れちゃった。ここで休んでいこうか？ **→ 73 へ**

371

これでは、らちがあかない。そうだ！

ボクは、ヤツに向かって叫ぶ！

「やーい、おまえはカエルのくせに、地上を飛び跳ねることができないんだろう」

「なにを！　オレ様のジャンプ力をしらないな」

しめしめ……。ヤツは地上へ降りてきた。

今だ！　再びムチでの一撃。ムチは、みごとにヤツの体を補えた。ブヨブヨのケロンの体が、バラバラになって飛び散ってゆく。服にもベットリ、その緑の血がついてしまった。

うえー、気持ち悪い。どこかで洗濯しなければ……。

水のあるところを探しているうちに平原へ出た。**（武力ポイント・プラス1。体力ポイント・マイナス1）**

→ 300 へ

372

小さな村にたどり着いた。

あちこちに、赤や黄など色とりどりの花が咲き乱れ、人々の笑い声や歌い声が、いたるところに響いている。

ひとりの村人を呼びとめた。それは、若い男だった。

「ここは、なんという村ですか」

「ここは、ハス食い人の村だよ。天国のようにすばらしいところだ。この村でとれるハスの実は、おいしいよ」



372

「ハスの実？　どんな味がするんですか」

「それはもう、例えようもないほどすばらしい味だ。この実を食べた旅人は、みんなとりこになってしまって、村に住みついてしまうほどだ」

と男は言った。グ——。急にお腹が鳴る。

知力ポイントは？

● **9 以上　→ 225 へ**　　● **8 以下　→ 111 へ**

373

サッと身をかわし、スッと足を出す。

ドッテン！

コビルは、前のめりにころんだ。

素早く、ヤツの太った体を両手でころがし、あお向けにしてやる。

「わ〜〜〜、起きあがれないよ〜〜〜。助けて〜〜〜」

ヤツは、短い手足をバタつかせて、もがいている。

「自分で起きあがれるようになるまで、そうやってダイエットしてろ！」

ボクは、わめき散らしているコビルを見捨てて去った。

再び暗い道を歩きはじめる。

不意に、パッとあたりが明るくなった。**→ 113 へ**

374

ついに、ここまでやってきたんだ!!

目の前に、高くそびえる銀の城が現れた。

まるで雲母のように薄い鏡が無数にはりついて、城を覆いつくしている。そして、その空には、黒々と渦を巻く暗雲。いかにも不吉だ。

よおし、憎っくきメデューサ、待っていろ！　きっとおまえを、この手で倒してやるからな!!

ボクは、固い決意を胸に、正面から城の中へ入っていった。入口は、何の変てつもない、ひとつの部屋だった。ただ、南と西に、ふたつの扉がある。

さあ、選択だ！　西と南、どちらの扉へ進むか？

●西の扉へ　➜ 343 へ　　**●南の扉へ　➜ 309 へ**

375

「やります。やります！　ファミコンソフトのためならなんだって……」

思わず後ろをふり向く。そこに、男の姿はなかった。

ヒュウ。

一陣の冷たい風が通りぬける。

しっ、しまった！

「ばかもの〜〜！」

雷鳴のようなハデスの声がとどろいた。

「勇者失格じゃ。誘惑の声に耳を傾けおって。おきて通



375

り、おまえは、二度と冥府界から出られぬぞ」

ガーン！　こんなのってあんまりだ。

END

376

黒い扉を開けたとたん、ひとつ目のお化けが牙をむき出して、ボクに飛びかかってきた。

「お前は、いったい、何者だぁ」

「小僧め、何を驚いているんだ。ワシはこの神殿を守るエリヌス様だ。お前の体をこの牙と爪で八つ裂きにしてくれるわ」

敵は、ジワジワと迫ってくる。

銅の矢はあるか？

●銅の矢を持っている　→ 163 へ

●銅の矢を持っていない　→ 150 へ

377

あっ、しまった！　ヤツの目を見てしまった。メデューサは目から、不思議な魔力を発するのだ。

ボクは抵抗することもできずに、石にされてしまう。

END

378

ハートをひとつずつ王様の耳にあてる。すると、ロバの耳がみるみるうちに小さくなって、人間の耳にもどった。

「おおっ!! ワシの耳がもとにもどったぞ」

大喜びした王様はほうびに金の矢をくれた。**（金の矢を入手。チェックリストに記入し、銀の矢をリストから消す）**

人間の耳にもどった王様は心やさしい王になり、すっかり明るくなった姫と仲よく暮らし始めた。

「よかった、やっと平和な国になったのだ」

ぼくは再び冒険を始める。

少し行くとでこぼこの道と平坦な道に分かれていた。

●平坦な道へ　➜ 392 へ　●でこぼこ道へ　➜ 64 へ

379

「たしかに、おまえは、立派に冒険を続けてきておる。ここまできたら、この童話世界では、あとひとつの冒険を残すのみじゃ。しかし、それは、おまえに大きな苦しみを与えることになるだろう。さあ、最後だ！　この水の中へ飛び込め！」

いつの間にできたのか、地面に水溜りができていた。しかし、その表面は、鏡のようにつるつる光っている。

ボクは思いきって水溜りの中に飛び込んだ。**➜ 138 へ**



380

よかった。ボクには、善のパワーのアイテムがある。

「コビル。きっと、これがおまえを助けるはずだ！」

ボクは、アイテムをコビルに持たせた。

しかし、アイテムにもコビルにも何の変化もなかった。コビルはそのまま息絶えた。

「こんな、ばかな……」ボクは、コビルの横にへたり込んだまま、ボーゼンとヤツの死体を見つめていた。

すると、突然、突風が起こった。

風が止むと、周りの景色は、まるで変わっていた。そばにあったコビルの死体もない。

ここは、この風景は、呪いのマッチ売りの街へ入る前に老人と話した、あの場所だ！

そう気がついた時、目の前に老人が現れた。→ **243 へ**

381

少し体が疲れたようだ。そう言えば、もう何時間もロクに休んでいないし、食べていない……。

「あっ、酒ダルがある」

もし、生命の酒なら、ひと口飲むだけで、体力がメキメキと回復するが……。**(前にこの部屋で飲んだことがある人は、飲むことはできない。飲まないへ)**

●飲まない　→ **30 へ**　　●飲む　→ **315 へ**

382

クソッ！　ペガサスの翼がないばかりにボクはこの階から脱出できない。一生、この城の中から出ることができずに、ぐるぐると回り続けなければならないのか。

END

383

「いいえ、ひとりで木陰で休んでいましたよ」

安心したのかヘラは、急にやさしい顔になった。ぼくも、ホッ。**（知力ポイント・プラス１）**

「おまえはピットだね。武器ひとつじゃ、これからの冒険は、大変だよ。このムチをあげよう。ひとふりで、たいていの敵は、やっつけることができるよ」

お礼を言うと、ヘラは、ゼウスのいた方向へかけていった。**（ムチ入手。チェックリストに記入せよ）**

→ 36 へ

384

パンパカパーン！

「おめでとう、箱の中身は、天使の羽だ」

再び、ラッパが鳴り、くす玉が割れる。

もう、いいっていうのに——。

「これを身につけると、飛ぶように速く走れるぞ」

ラッキー！　役に立ちそうだぞ。**（天使の羽入手。チェックリストに記入せよ）**



384

ヘルメスと別かれてしばらく行くと、道が３本に分岐していた。どの道へ進むか。

●右の道へ　➔ 275 へ　　**●左の道へ　➔ 251 へ**

●中 央の道へ　➔ 103 へ

385

ボクの放った矢が、ヤツの花びらの１枚に突き刺さった。すると、けたたましくダフネが騒ぎ出す。

「きゃ〜〜〜。わたしの大切な花びらに傷が。大変だわ、大変だわ、お嫁に行けなくなっちゃう。早く手当てしなくちゃ」

ダフネは、再び、空に舞い上がり、アッという間に飛び去った。なんだ？　ありゃ。

しばらく歩き続けると、平原に出た。　**➔ 342 へ**

386

闇の中をどこまでも落ちてゆく。

すると、老人の声が……。

「これまでの記憶は、消してしまうぞ。おまえはまた、神話世界の途中から、冒険をやり直すんじゃ」

（童話世界で得たアイテムをすべてリストから消し、体力ポイント・マイナス３、武力ポイント・マイナス３、知ポイント・マイナス３）　➔ 13 へ

387

イチかバチか試してみるか！

ボクは、ガードクリスタルを取り出す。すると、先端についている透明の石から、キラキラした光がふたつ飛び出した。そしてクルクルとボクの周囲を回りはじめる。

不思議なことに、今まで鎌をふり回していた死神が突然消えた。辺りはまたもとの静寂の闇にもどったのだ。

ん？　歩き出そうとすると、不意に固いものがつま先に当たった。死神の持っていた鎌だ。

魔力を消すというガードクリスタル。あの死神は、鎌に宿っていた悪霊だったのだろう。➡11へ

388

やったあ！　ついに到着したぞ。地上世界の入口だ。

「よくやったピット、合格じゃ」ハデスだ。その声は、さっきと違い、テレパシーのように心に通じてくる。

「ほうびを授けよう」

頭に何かがポンと乗った。手に取ってみるとそれは緑の帽子だった。

「それは、かぶると姿が消える不思議な帽子じゃ。きっと役に立つだろう。ただし、地上で使えるのは、一度だけだぞ」

礼を言ってボクは、ハデスの帽子を革袋に入れた。

（ハデスの帽子入手。チェックリストに記入）➡13へ



389

先手必勝だ！

ボクは素早くヤツの杖にムチを巻きつかせ、杖を奪った。そして2本にへし折ってやる。

「あ〜〜〜、よくも、よくも——」

ヤツは、青い汗をたらして叫びながら「覚えていろ！」と飛ぶように逃げていってしまった。

口ほどにもないヤツめ、**（武力ポイント・プラス1）**

さて、山を降りるとしよう。下りはスイスイ、アッという間にふもとに到着。これから、どの方向へ進もうか。

●北の平原地帯へ　➡85へ　●南の森へ　➡303へ
●東の丘陵地帯へ　➡259へ

390

「フン、ペガサスの翼さえあれば、ヤツなんてボクの敵じゃないぞ」

翼をはためかせて、上に飛んでしまえば、へっちゃらだ。ボクは上空から神殿の中に入り込んだ。**➡53へ**

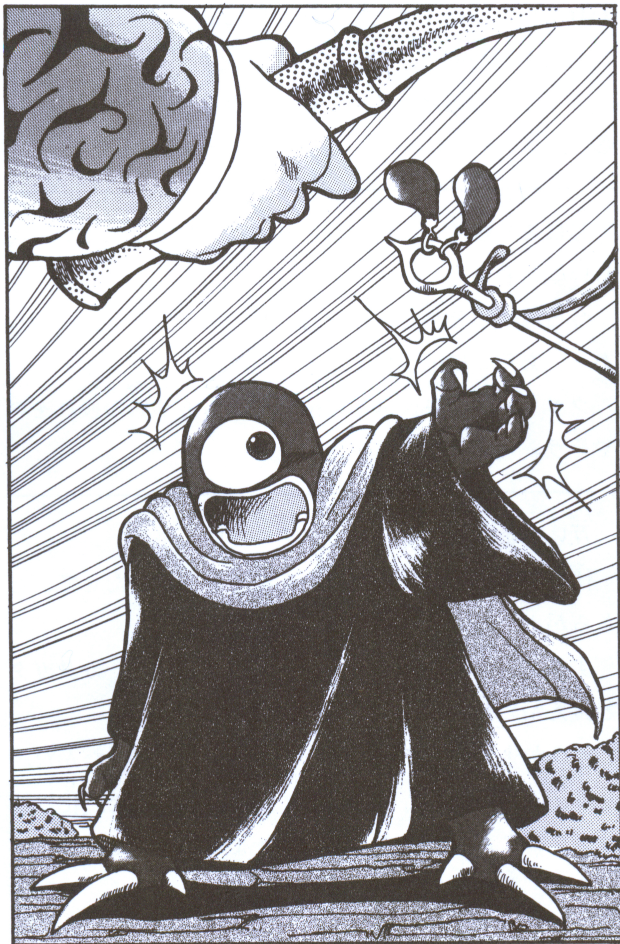
391

「キミ、こんな森の中をひとりで歩くのは危ないよ」

と、女の子に声をかけた。

「わたし、赤ずきん。これから、森の向こうに住むおばあさんのお見舞いに行くの」

そう言えば、童話の中では確か、おばあさんは狼に襲



389

えい、これならどうだ！ムチでナスビ使いの杖を奪う。



391

われていて、赤ずきんは危険な目にあうのでは……。
何だか、心配だ。
赤ずきんのあとをついて行こうかな？

●Ｙｅｓ　➜ 262 へ　　●Ｎｏ　➜ 19 へ

392

しばらく歩くと、色とりどりの花が咲き乱れている美しい国に着いた。
今日はずっと歩きっぱなしで、もうボクはへとへとだ。あっ、あそこに宿が見えるぞ。
ラッキー！　今夜はあの宿で、ゆっくり旅の疲れをいやそう。➜ 210 へ

393

互いにホンモノだと言って譲らない。
仕方ない。それなら、ふたりにハートを持たせて、どちらがホンモノかを決めることにしよう。
すると、牢の姫はハートを手にしたとたん、カタガタと震え始め、「グウェ～」とうなり声を上げた。
そうか！　部屋にいた姫こそ、ホンモノだったんだ。
ボクは苦しみあえぐニセモノに金の矢を射た。化け物はブクブクと泡を立て、青い液となって消えた。
あっ、あれは？
化け物が消えたあとには、白のハートがひとつあった。

393

ボクはそのハートを手にすると、白雪姫に別れを告げ、この国から出て行った。**（白のハート入手、チェックシートに記入）　→ 64 へ**

394

無我夢中だった。

気がつくと、蛇の頭は、ぼくの頭ほどもある石の下敷きに……。

石のまわりに、どす黒い血がにじみ出ている。

えっ？　だれがやっつけたんだ。

しかし、どう考えてもボクしかいない。ボクが、そばの石を持ちあげて、投げつけたんだ！

「ス、スゴいじゃないか！」

ようやく実感。ボクって、本当は、スルドい反射神経の持ち主なのかもしれない！　**（武力、知力ポイント、ともにプラス 1）　→ 336 へ**

395

山を登っているうちに、いつの間にか、気味の悪い谷に迷い込んでいた。いたるところに、動物の死骸や白骨がころがっている。おまけに霧まで、出てきたようだ。

早く脱出してしまおう。と、その時。

「もし、もし」

とボクを呼びとめる声がする。恐る恐るふり向くと、



395

そこには、ひとりの兵士が立っていた。

ん？　なんだかおかしい。兵士の体を通して、むこうの風景がすけてみえるぞ……。

ギャ〜〜〜〜!!　幽霊だ！　つんざくような悲鳴をあげ、ボクはその場に腰を抜かした。

「わたしは、冥府界の王ハデス様の使いだ。おまえを、冥府界に案内するように言われている」

ガタガタふるえているボクを前に、幽霊の兵士は言った。**→ 153 へ**

396

こいつは、メデューサの手下の中でも、落ちこぼれに違いない。なんだか、他人を見ている気がしないよ。

ボクは、ヤツに手をかして、体を起こしてやった。

「助かった」コビルは喜んで言った。

「お礼にこれをあげるよ」

ヤツが差し出したのはガードクリスタル。さまざまな魔力から身を守ることができるという。**（ガードクリスタル入手。チェックリストに記入）**

「オレに会ったことは、絶対メデューサ様にはないしょだぞ」ヤツは、何度も念を押して、去っていった。

悪魔にしては、まぬけで気のいいヤツだったな。

ボクも、再び歩き出す。**→ 227 へ**

397

ボクは、逃げて、逃げて、逃げまくった。わき目もふらずに、丘を飛ぶように駆け降りる。

丘を降りてしまっても、しばらく走り続けていた。気がつくと、目の前に湖が広がっている。

ヒー、ヒー、ここまでくれば、もう大丈夫だろう。巨人の姿は、とっくに見えない。

（体力ポイント・マイナス２）

どれ、ここで休憩だ。

荒い息が静まると、ボクは、水浴びをするために、湖に入った。

が、そのとたん！　**→15へ**

398

ボクは炎のようにまっ赤な口と鋭く光るキバをまのあたりにした！　それが、ボクが見た最後のものだ。

ここまで来て、やられてしまうなんて……。

END

399

パンドーラの吐くシャボン玉が目に入った。

「うっ、痛い。これじゃ、目があけられない」

ど、どこにいるんだ、パンドーラ!!

ドピューン！　背中に走る激痛。

くそっ、パンドーラめ、ひきょうだぞ。後ろからボク



399

を襲うなんて………。

　もう、ダメだぁ—。体の力がなくなってきた。こんなみじめな死に方はイヤだぁ〜。

END

400

　そこには、いつか湖面で見た、美しい女の人、女神パルテナが横たわっていたのだ！

　突然パルテナは、パッチリと目を開けた。

「あ、わたくし、元にもどったのね！　治ったのね！」

　そう叫びながら、女神はムックリと起きあがった。

「お、おじいさま〜〜！」パルテナが駆けて行くほうを見ると、そこにあの、老人が立っていた。

「お—、よし、よし、よかったのう、そう泣くんじゃない」老人は、パルテナを抱きしめながら言った。

　ひとり、ポカンと立たずむボク。

「あの、おとり込み中、すみませんが、どういうことか、説明していただけませんでしょうか」

「おお、ピット。すべておまえのおかげじゃ。じつは、パルテナは、わしのかわいい孫なんじゃよ」

「はあ」全然ピンとこない。

「こいつはのう、フィクション界の禁断の実を食べてしまったんじゃ。その実は、すばらしい味じゃが、食べる

400

と悪魔になってしまう。いわば、フィクション界の病気のようなものじゃな」

「すると、メデューサとパルテナ様は、同一人物だったんですか。し、信じられない！」

「そうじゃ。だが、フィクション界を治めている女神が、悪魔に変わってしまったなんて、世間体が悪くてのう。だから、フィクション界の人間には極秘のことじゃ」

「それで、その病気を治すために、ボクが必要だったんですか？」

「そうなんじゃ、この病気は、現実世界から来た人間でないと治せない奇病なんじゃ」

　禁を破って病気になったんなら自業自得じゃないか！　そのためにわざわざ、こんな危険な冒険をやらされてたなんて、ああ、ばかばかしい。

「ピット、あなたのおかげよ。どうもありがとう」

　その時、パルテナがニッコリと笑って言った。

　ドッキン！　弱いなあ。美子ちゃんに似たこの笑顔。

「さあ、約束通り、おまえを現実世界へ帰してやろう」

　そう老人が言うと、目の前に鏡がでてきた。

「現実世界へもどってもがんばって暮せよ」

　ボクは老人とパルテナに別かれを告げ、鏡の中に飛び込んだ。**（エピローグに続く）**

エピローグ

こんにちは、生徒会長の鏡光夫です。

冗談を言うなって？　ところが本当のことなのさ。まあ、そんなに驚かないで、ボクの話を聞いてよ。

あれから現実世界にもどってみると、まだ時計の鐘が鳴り続けていた。つまり、ボクが鏡の中に入り込み、フィクション世界で冒険をしている間、少しも時間がたっていなかったということだ。もう、ガク然としたね。

次の日、クラ～イ気持ちで学校へ向かった。なにしろその日は、人生最悪の日になるはずだったんだから。

ところが、どうもまわりの様子がおかしいんだ。今までボクに見向きもしなかった女の子たちが、声をかけてくる。クラス一の人気者の高瀬君が、まるで親しい友達のように話かけてくる。下駄箱を開ければ、ラブレターが10通も！

どうなってるんだ!?　キツネにつままれた思いで、教室に入ると、進級早々のテストの結果が貼り出されたところ。それがなんと、全科目満点で、ボクが１番!?

その時、ハッとひとつの考えが浮かんだんだ。これは


生徒会長バンザーイ
100
数学
100
100
100
地理
100
パルテナの鏡

あの老人のおかげではないだろうか。パルテナを助けたお礼に、ボクの人生のシナリオも書き変えてくれたのだとしたら……。

驚きはまだまだ続いた。ホームルームの時間、ボクは美子ちゃんも見ている中、全学級員の指示を得て、生徒会長候補に選ばれたのだ。そして、その1週間後、2年生ながらみごと生徒会長に当選!!

フィクション世界で立派な勇者に成長したボクは、現実世界でもヒーローになったワケだ。おまけに美子ちゃんというかわいいガールフレンドもできたし、もう最高にハッピーさ。

こんなすばらしいプレゼントをボクにくれた『パルテナの鏡』これはもうかけがえのない思い出の本だ。白紙だった部分は、今は文字でぎっしりうめつくされている。もちろん、ボクの英雄物話でね。冒険の間は苦しいだけだったけど、今ではなつかしさでいっぱいだ。

もしかしたらまた、フィクション世界で勇者が必要とされることがあるかもしれない。その時は、キミがこの幸運を手にする番だ。そう、ボクは信じているよ。

HAPPY END

編集部から

好評シリーズ第13弾「光神話パルテナの鏡／神殿の悪魔を倒せ！」いかがでしたか？　今回は、本の中の世界に飛び込んだ少年となって、活躍してもらいました。みなさんは、無事、使命を果たし、ハッピーエンドにたどりつくことができましたでしょうか。きっと、すばらしい英雄物語を作りあげたことと思います。

さて、今後も編集部では、みなさんのご意見を参考に、より楽しいファミコンゲームを作ってゆくつもりです。すでに発売している12作を含め、当シリーズに対するご意見、ご感想をお待ちしております。また、これからゲームブック化してほしい素材、ゲームブックに対するご希望などもお寄せいただければ、幸いです。

＜あて先＞　〒162　東京都新宿区東五軒町3番28号(株)双葉社ＣＴＲ　ファミコン冒険ゲームブック編集部　「パルテナの鏡」係

お寄せいただいた方々の中から、抽選で100名の方にゲームブックの最新刊をプレゼントします。

企画・構成／スタジオ・ハード
制作／漢那早美　高橋信之
文／村中江弓子　前田かおり
作画／不敵万才

光神話パルテナの鏡
神殿の悪魔を倒せ！

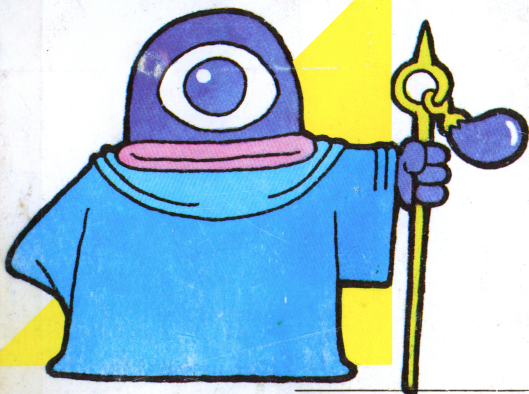
双葉文庫　ファミコン冒険ゲームブックシリーズ す 02-14

昭和62年7月1日　第1刷発行　定価380円

著　者　村中江弓子
前田かおり
スタジオ・ハード
発行者　清水文人
発行所　株式会社双葉社
〒162　東京都新宿区東五軒町3番28号
TEL　東京（268）5111（代表）
振替　東京8－117299
印　刷
製　本　大日本印刷株式会社

ISBN4-575-76029-3 C0193

双葉文庫



FUTABASHA FAMICOM GAME BOOK SERIES

光神話 パルテナの鏡

神殿の悪魔を倒せ！

ISBN4-575-76029-3 C0193 ¥380E 定価380円 双葉社

GAME BOOK

光神話

パルテナの鏡

神殿の悪魔を倒せ!

スタジオ・ハード編

村中江弓子　前田かおり著

双葉文庫

す
02-14
380

GAME BOOK

光神話 パルテナの鏡

神殿の悪魔を倒せ！

FUTABASHA FAMICON GAME BOOK SERIES

す
02-14
380